Kumamoto University

熊本大学大学院　消化器外科学

20年のあゆみ

Department of Gastroenterological Surgery,
Graduate School of Medical Sciences,
Kumamoto University

平成17年 ～ 令和6年

熊本大学大学院　消化器外科学

20年のあゆみ

Department of Gastroenterological Surgery,
Graduate School of Medical Sciences,
Kumamoto University

平成17年 ～ 令和 6 年

Kumamoto University

― 目　次 ―

年 報

診 療

業 績

一般社団法人熊本外科研修教育推進機構

巻　頭　言

開講20周年を迎えて

教授　岩　槻　政　晃

熊本大学大学院 消化器外科学講座は、本年、開講20周年という節目を迎えました。人に例えるなら、かつての成人の年にあたります。自立と責任を担い、社会の中で新たな一歩を踏み出す、そのような重みを持つ時機です。臨床・研究・教育に携わる組織としても、これまでの歴史を振り返り、未来への責務を見つめ直す大切な機会であると感じ、本記念誌の発刊に至りました。

当講座は、平成17年（2005年）、初代教授である馬場秀夫先生によって開設され、以来19年にわたり発展を遂げてまいりました。馬場先生は、消化器がんに対する高度な外科技術のみならず、集学的治療の開発にも尽力され、高度進行がんに対して果敢に挑まれました。一方で、低侵襲手術・ロボット支援手術の導入、基礎研究と臨床研究の橋渡し、外科医教育における先進的な取り組みなど、幅広い分野で講座の発展を牽引されました。これらの成果は数多くの学術業績として結実し、熊本大学外科学講座創立100周年にあたる2022年には、日本外科学会定期学術集会を主宰され、その業績は大きな節目を飾るものとなりました。

そして2024年７月より、私はこの講座の重責を継承し、新たな歩みを担う立場となりました。伝統を守りつつ、時代の要請に応じて講座を進化させていくことは、決して容易ではありません。しかし、この20年の歩みが示しているように、真摯な臨床実践、探究心に満ちた研究、そして人を育てる情熱こそが、講座を支えてきた本質であり、これからも変わることのない礎であると確信しています。

近年、私たち外科医を取り巻く医療環境は、加速度的に変化しています。外科医不足、医師の働き方改革、高齢化社会における医療のあり方、AIやロボット技術の進展、地域医療との連携の深化など、私たち消化器外科医に求められる役割も大きく変貌しつつあります。このような状況の中で、患者様に最適な医療を提供するためには、確かな技術に加え、高い人間性を備えた外科医の育成がますます重要となっています。

そのためにも、当講座は今後も「人を育てる消化器外科学講座」であり続けなければなりません。学生・研修医・若手医師が、患者様から信頼される外科医として着実に成長できる場を提供し、地域に根ざしながらも世界に目を向けた医療人の育成に努めることが、私たちの大きな使命であると考えております。

この20年の歩みは、講座を支えてくださったすべての皆様のお力添えなくしては成し得なかったものです。この場をお借りして、心より深く感謝申し上げます。記念誌をご覧いただく諸先輩方のご尽力に改めて敬意を表するとともに、その志を次の世代へと継承していく覚悟を新たにいたします。

今後とも、本講座への変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

20周年に寄せて

熊本大学消化器外科開講20周年　おめでとうございます！

一般財団法人化学及血清療法研究所 理事長　**馬　場　秀　夫**
昭和59年卒業

この度、熊本大学消化器外科開講20周年、誠におめでとうございます。熊本大学の外科学講座が臓器別再編され消化器外科の初代教授として着任したのが2005年の４月、時の流れは速いもので、あれから20年の月日が過ぎたのかと感慨深く感じています。

当時の消化器外科は旧１外科、旧２外科の混成部隊であり、同じ目標に向かって如何に組織を束ねて高みを目指すべきかと日々試行錯誤の連続だったように思います。初期臨床研修制度開始後であり、医師不足のさなか、新たな組織・新たなメンバーとともに手術症例を増やし、先端研究に取り組み、学会・論文発表を積極的に推進し、学生教育や教室員の指導に奔走した日々が懐かしく思い出されます。教授在職中に、同門会の立ち上げ、外科学開講100年記念事業、第122回日本外科学会定期学術集会開催などができましたのは、日頃より極めて協力的に動いてくれた教室員と同門の皆様方、大学関係者や医師会、全国の外科系医師、行政の皆様方のご理解とご協力があったからこそ成し遂げられたことと心より感謝しております。退官後後任に岩槻政晃教授が着任し、また馬場祥史教授も東京大学消化管外科に赴任することができ、何の憂いもなく大学を離れることができた幸せを感謝する日々です。

現在、一般財団法人化学及血清療法研究所の理事長に就任し１年が経過したところです。化血研は1945年12月、終戦の年に太田原豊一先生により創立されており、今年は創立80周年の記念の年であり、研究支援や留学助成、奨学金給付などの公益事業を中心に活動しております。化血研の業務のほか、JSP の創発的研究支援事業の PO、AMED の医学研究支援プロジェクトの PO、JSPS の基盤研究や厚労科研の審査、民間助成財団の研究助成の審査などに広く携わっております。その中で感じる事は、日本の研究力の低下が顕著であり、失われた30年の間に経済低迷のみならず、研究開発、人材育成、産業構造転換の観点において日本が世界に大きく後れを取った現状を憂う昨今です。

バブル崩壊後日本は国全体が内向きになり、企業も内部留保（現在600兆を超える留保額）を優先し、研究開発や人材育成に投資しなかった結果、労働生産性の向上や産業構造の転換が遅れ、世界に大きく水をあけられてしまいました。IMD の世界競争力年鑑で、1989年から４年連続世界１位であった日本が、今や世界38位に低迷しています。半導体や液晶、ブロックチェーン技術、自動運転技術、コンピュータービジョン技術、水素貯留技術、ゲノム編集技術など、さまざまな技術面において世界をリードしていた日本が、なぜここまで世界の中で埋没してしまったのかと残念に思います。

一方、医療界に目を向けると日本は医療水準が高く、診断・治療は世界トップレベルです。特に、消化器癌の診断・治療の分野においてもその治療成績は世界トップレベルを誇っています。中でも日本の消化器外科治療は世界に冠たる成績を示しており、今後も手術手技の開発・継承、周術期の効果的な補助療法、合併症の軽減対策などを通じて病める患者に幸せを届けるためにも日本の外科医療が世界を先導する存在であり続けてほしいと願っております。

熊本大学消化器外科は、岩槻政晃教授を筆頭に新体制で、教室員・同門会が一体となり、診療・研究・教育の更なる充実を目指して頑張っておられることと思います。岩槻教授就任初年度は10名、今年は８名の新入局員を迎え、教室全体が若返って随分活気に満ちあふれていることと思います。是非、短期的成果を追い求めるのではなく、中長期的に高度化する外科医療の更なる発展を目指し、先端研究を追求し、次代を担う若手外科医をしっかりと育成して素晴らしい教室を作り上げてほしいと心より願っております。

今年は巳年、蛇は脱皮することから再生と発展の年といわれます。熊本大学消化器外科教室の今後の更なるご発展を心より祈念申し上げます。

熊本大学消化器外科学講座 開講20周年に寄せて

熊本大学消化器外科同門会 会長　**那　須　二　郎**
昭和62年卒業

このたび、熊本大学医学部消化器外科学講座が開講20周年という大きな節目を迎えるにあたり、同門会長として記念誌に寄稿の機会をいただけたことを、大変光栄に思います。

新体制と次の時代への歩み

令和６年７月、岩槻政晃教授が第二代教授に就任され、講座は新たなリーダーシップのもとで、さらなる飛躍の時を迎えました。講座はこれまで、優れた臨床・教育・研究活動を通じて、熊本のみならず九州、さらには全国の外科医療の発展に多大な貢献を重ねてきました。これまでの歩みに心から敬意を表するとともに、20年の節目を迎え、次の時代へと向かう講座の姿に、大きな期待と力強さを感じています。

そして、この新たな体制の中で、これまで教授が兼務されていた同門会長職をOBが担うかたちとなったことは、同門会の役割を再認識し、より積極的に講座を支えていく体制づくりの始まりでもあると受け止めています。私自身、その責任の重みを真摯に受け止め、現役医局員と同門会員を結ぶ架け橋として、全力で取り組んでまいります。

外科医の育成に向けて

現在、外科医を志す若手医師の減少は全国的な課題であり、同門会として真剣に向き合わなければならない現実です。外科診療の現場では、技術の継承と人材の確保が急務であり、同門会としてもその一翼を担うべく積極的な支援が求められています。特に、女性医師が安心して長く働ける環境づくりは、医局全体の魅力を高め、結果として男性医師の入局者増加にもつながる可能性があります。多様な働き方を認め合い、個々の人生に寄り添う柔軟な体制が不可欠だと思われます。

若手医師が将来像を描きながら安心してキャリアを築ける環境整備も、同門会の重要な役割の一つです。研修制度の充実やキャリア支援体制の構築において、関連病院との連携は不可欠であり、地域に根ざした臨床現場の経験やフィードバックを、医局内外での教育に反映させていくことが求められています。

また、医師としてのやりがいや誇りを実感できるような評価のあり方についても、今後の検討課題として意識していく必要があります。たとえば、努力や成果が正当に評価される仕組みや、働きがいにつながる制度の整備は、人材の定着と育成の観点から、将来的に重要な要素となるかもしれません。同門会としても、現場の声に耳を傾けながら、大学や医局とともにより良い環境づくりに貢献していきたいと考えています。

伝統を受け継ぎ、未来へつなぐ

こうした諸課題に立ち向かうためには、大学・講座・関連病院・同門会が三位一体となり、同じ目標に向かって歩みをそろえていくことが不可欠です。特に、各地で活躍するOB・OGの経験とネットワークは、医局の財産であり、現役医局員を支える大きな力となります。私たち同門会は、教える立場として、また地域医療の第一線で得た知見を教室に還元する存在として、これまで以上に能動的に関わっていかなければなりません。

開講20周年という節目に際し、「伝統と革新のバランスを保ちながら、次世代へつなぐ」ことこそ、今の私たちに課せられた最も重要な使命であると強く感じております。これまで先輩方が築いてこられた礎をしっかりと受け継ぎつつ、新たな時代の変化を柔軟に受け入れ、講座と同門会が一体となって前進していきたいと思います。今後とも皆さまと力を合わせ、講座のさらなる発展に貢献できるよう尽力してまいります。

熊大消化器外科20年の振り返りとこれから

熊本大学病院 医療の質・安全管理部 教授　**近　本　　亮**
平成６年卒業

2005年４月、馬場秀夫初代教授のご着任とともに、熊本大学消化器外科の歴史が幕を開けました。私自身は当時、旧第一外科に所属し、外科医として10年の節目を迎えていた頃でありました。それまでは、旧第一外科と旧第二外科が、それぞれの伝統のもと、診療・研究・教育に取り組んでおりました。互いの意思決定プロセスを知る機会はほとんどなく、同じ「外科」を標榜しながらも、全く異なる教室運営がなされていました。切磋琢磨するという意味では、独立性のある体制にも利点があったように思いますが、患者さんや社会の視点から見れば、いささか歪に映っていたかもしれません。ちょうどその頃、全国的に臓器別再編の波が広がり、いわゆる「ナンバー外科」の統合が進められていました。先行する大学の中には、再編がうまく軌道に乗らず苦慮している例も多く、本学における臓器別再編と新たな消化器外科教室の行く末に、期待と同時に一抹の不安を抱いていたことを今でも覚えています。

2005年４月１日、馬場秀夫教授の着任初日、旧第一外科・旧第二外科に属する消化器外科医が初めて一堂に会し、記念撮影を行いました。その日から、新たな毎日が始まりました。

馬場教授は「日本一の外科教室をつくる」という高い目標を掲げ、診療・研究・教育すべての分野において情熱を注がれました。その理念は教室員一人ひとりにも深く共有され、常に高い水準が求められる中、各自が自らの成長と教室の発展を目指し研鑽を重ねてまいりました。

病棟の稼働率は常に100％を超え、紹介患者を必ず受け入れる体制が整えられました。手術手技の一つひとつ、術前・術後の管理に至るまで、旧両教室の伝統に新たな風が吹き込まれ、新しい診療体制が築かれていったのです。研究面においても、教室員の努力により論文数や科研費の採択件数が年々増加し、全国の大学からも高い評価を受けるようになりました。その集大成として、日本外科学会学術集会の開催という名誉にも浴することができました。

2024年３月には馬場秀夫教授がご退任され、同年７月には岩槻政晃先生が第二代教授にご就任されました。岩槻先生は、この20年間を一教室員として支えてこられた方であり、そのご就任は大きな期待とともに、相応の重責を伴うものと拝察いたします。

創始者と継承者には、それぞれ異なる資質が求められます。ゼロから立ち上げるにはフロンティアスピリットが必要であり、継承には、既存の枠組みを見直し、時には破壊と再構築を行う勇気も不可欠です。国内外の医療情勢の変化や医学の進展を見据えつつ、熊本大学消化器外科が、慎重かつ大胆に進化を遂げていくことを願ってやみません。

全国の外科教室は、新生・熊本大学消化器外科の歩みに注目しております。これからの20年が、本教室の真価を問われる時代となるでしょう。岩槻教授のリーダーシップのもと、教室員の皆様が一致団結し、診療・研究・教育に邁進されることを心より願っております。

私自身も同門会の一員として、微力ながら全力で支援を続けてまいります。「何を遺し、何を付加していくか」という私の恩師の言葉とともに、新生・熊本大学消化器外科に心からエールをお送りいたします。

教室のさらなるご発展を、心よりお祈り申し上げます。

熊本大学消化器外科学開講20周年に寄せて

熊本大学病院 低侵襲医療トレーニングセンター 特任教授　**吉　田　直　矢**
平成６年卒業

岩槻政晃教授、熊本大学消化器外科学の皆様、開講20周年誠におめでとうございます。

大変幸せなことに、私は過去20年の大部分を消化器外科学の皆様と過ごすことができました。そして馬場秀夫先生と岩槻政晃先生という稀代の教授の下で大変充実した時間を共有し、一生の思い出となる仕事をすることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

初代教授であられる馬場秀夫先生は、2005年から19年の間、全身全霊を持って臨床、研究、教育に邁進され、教室の揺るぎない礎を築かれました。その成果は2022年に行われた第122回日本外科学会定期学術集会に結実し、学会のテーマとなった「外科学の未来を拓く」は、教室の普遍的な精神として現在に引き継がれています。それぞれの立場で臨床、研究、教育の多忙な一日に全力を尽くすだけでなく、更に一歩未来に向けて歩みを進める、そのような気概を持った教室員が今も消化器外科学を支えています。

その薫陶を受けた岩槻政晃先生が2024年に第二代教授に就任され、消化器外科学は更なる発展を遂げています。岩槻教授の教室運営を身近に拝見して感じることは「人を育てる」という情熱です。外科医、医学生を育てるため、陋習を改め新風を興し、様々な改革を推進されています。寸暇を惜しんで学び、全ての学術活動に目を配り、悉く深夜の緊急手術に入られる姿を見るにつけ、小川道雄先生、馬場秀夫先生と同じく率先躬行、率先垂範を体現されていると感じます。医師、政治家であった後藤新平が残した「一に人、二に人、三に人」、「人を残して死ぬのが上」という思いを持たれた岩槻教授が教室を牽引されていることは、消化器外科学の盤石と明るい未来が予見され、私達も安心して教室を応援することができます。ただ、誰しも限界がある健康を、ご自愛されるよう祈るばかりです。

教室の発展は人にかかっています。教室員一人一人が努力するのはもちろんですが、皆が力を合わせることで初めて大きな仕事を成し遂げることができます。一方で、大学は大変忙しく、臨床を卒なくこなしながら研究、教育にも力を割かなければなりません。また家族にも沢山の愛情を注ぐ必要があると思います。私自身がそうであったように、大学では教室員の多くがどのように時間を作るかという壁に当たります。少しでも若い先生方の参考になればと、私自身の消化器外科学での経験を記したいと思います。

馬場秀夫先生と歩んだ消化器外科学は私の大きな転換点でした。凡人が馬場先生の沢山の demand に応えるために、自分自身を変える必要がありました。１日は24時間、これは天才でも凡人でも平等です。一方、睡眠時間は違います。ショートスリーパーの馬場先生と異なり、私は１日７～８時間くらい睡眠を取らないと頭が回りません。そこで私は時間のシフトを行いました。例えば東京に出張する場合、往復の飛行機、電車等で４時間ほど仕事の効率が悪い時間が出てきます。この移動時間を睡眠に充て、前日のデスクワークへとシフトします。つまり出張の前日は４時間多めに、具体的には朝４時まで論文を書いて、大学～目的地の往復はひたすら睡眠を取ります。遠方の当直に行くときには、自家用車を使わず公共交通機関で行くと、移動時間を睡眠に充てることができます。私が担当していた牛深市民病院は大学から130 km、高速道路もないため、バスを乗り継ぐと片道４時間ほどかかります。そこで、当直の前日は徹夜で仕事し、バスでぐっすり眠るようにします。夜間のデスクワークは呼び出しで作業が中断することが殆どなく、仕事がはかどるというメリットもあります。

学会に行った際、興味があるセッションがない時間帯は、休憩ブースで電源を拝借してデスクワークをします。また懇親会等の酒席がある場合は、終わった後教室に戻り、懇親会と同じ時間だけ机に向かいます。時間のシフトは、前の週の日曜日に紙に書いて予定を作成し、その中に必ず家族と過ごす時間を入れるようにしました。

GW や年末の仕事納めの後はまとまった時間が取れます。この時間はデータベースの予後調査等を行い、グループの学会発表や論文作成の土台作りに充てました。臨床をしながら学術活動をするのは大変ですが、時間がない事を言い訳にしていて教室の発展はありません。体力がある若いうちは自身の成長のため、中堅以降は加えて後輩のためにも尽くし、悔いのない外科医人生を送っていただければと思います。

最後になりましたが、消化器外科学の輝かしい次の20年を祈念いたします。

甚だ微力ですが、私自身も引き続き教室の発展に尽くして行きたいと思います。

岩槻政晃教授、消化器外科学の皆様、今後とも宜しくお願いいたします。

熊本大学消化器外科開講20周年、おめでとうございます

兵庫医科大学 医学部 遺伝学講座 教授　**大村谷　昌　樹**
平成７年卒業

熊本大学消化器外科開講20周年、誠におめでとうございます。

2005年に馬場秀夫先生が初代教授としてご着任された当時、私は熊本大学発生医学研究センターに研究員として在籍しておりました。ちょうど学位審査を控えていた時期であり、馬場教授にスライドをご確認いただき、非常に熱意をもってディスカッションにお付き合いいただいたことを、今もなお鮮明に記憶しております。

私の学位論文は、膵分泌性トリプシンインヒビター（PSTI）およびオートファジーに関する研究でした。当時、タンパク質の分解に関する研究分野は急速に進展しており、2004年にはユビキチン-プロテアソーム系の解明が評価され、ノーベル化学賞が授与されたことで注目を集めておりました。ユビキチン-プロテアソーム系が選択的な分解機構であるのに対し、非選択的な分解機構であるオートファジーも徐々に研究者の関心を集めつつありましたが、当時はまだ一般にはほとんど知られていませんでした。そのような中、基礎生物学研究所の水島昇先生（現・東京大学教授）より、臓器特異的にオートファジーを欠損するマウスをご提供いただき、大学院生の橋本大輔先生とともに、膵腺房細胞特異的オートファジー欠損マウスを作製し、解析を進めてまいりました。

その後も、熊本大学消化器外科より、多くの優秀で勤勉な大学院生の先生方を派遣いただきました。膵炎と小胞体ストレス、PSTI と EGFR の相互作用、慢性膵炎モデル、IPMN モデルマウスの作製など、多岐にわたる膵臓およびオートファジーに関する研究成果は、馬場教授のご指導と、消化器外科の大学院生の皆様のご尽力によるものであり、心より感謝申し上げます。また、私の就職活動が成功したのも、消化器外科の皆様のご支援のおかげであり、深く感謝しております。2016年、私が現在所属しております兵庫医科大学に異動した年に、大隅良典先生がノーベル生理学・医学賞を受賞され、オートファジーは広く一般に認知されるようになりました。ちょうどそのような時代の転換点において、熊本という恵まれた研究環境の中で貴重な研究に携わる機会をいただけたことを、大変光栄に存じております。

異動後も、熊本大学消化器外科より毎年ご送付いただいております診療案内を拝見し、その研究内容の質の高さと、成果の多さに、常に感銘を受けております。馬場教授におかれましては、ご着任当初より臨床、臨床研究のみならず、基礎研究やトランスレーショナルリサーチにも積極的に取り組まれ、それらが着実に結実されたものと、心より敬意を表する次第です。第二代教授にご就任された岩槻政晃先生におかれましては、ご重責を担われる中で、さらなる教室のご発展に向けて尽力しておられることと拝察いたします。今後のますますのご活躍を、心よりお祈り申し上げます。また、馬場祥史先生が東京大学消化管外科学教授にご就任されたことも、誠に素晴らしいご栄誉であると存じます。今後、熊本大学と東京大学が連携し、国際的にもご活躍されることをお祈り申し上げます。

熊本大学消化器外科に育てられて

東京大学 大学院医学系研究科 臓器病態外科学分野 消化管外科学 教授　**馬　場　祥　史**
平成12年卒業

熊本大学消化器外科学の開講20周年、誠におめでとうございます。節目の年にあたり、これまでの教室の歩みをともに振り返り、このように寄稿の機会を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

私は2000年に熊本大学医学部を卒業後、旧第二外科に入局し、外科医としての第一歩を踏み出しました。2005年４月に初代教授・馬場秀夫先生が熊本大学消化器外科学にご着任された当時、私は大学院生として病院病理部に出向し、基礎研究に従事しておりました。教室所属の大学院生として、年２回の研究報告会はもとより、日々の実験やデータ解析に至るまで馬場教授から熱心なご指導を賜りました。そのおかげで無事に学位を取得することができ、私が現在も臨床研究に携わっているのは、この時期に受けた初期教育の賜物であると、心より感謝しております。その後、２年間の海外留学（Dana-Farber Cancer Institute)、半年間の再留学（Brigham and Women's Hospital)、および済生会熊本病院での３か月間の勤務を除き、私は一貫して熊本大学消化器外科の一員として、臨床・研究・教育に取り組んでまいりました。外科医としての礎は、まさに熊本大学消化器外科学で築かれたものであり、そこで得たすべての経験が、今の私につながっております。

なかでも特に印象深く記憶に残っているのは、馬場教授が会頭を務められた第122回日本外科学会定期学術集会です。私は幹事として事務局運営を担当させていただきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、開催形式の最終決定が直前までできず、大変苦慮いたしました。最終的にハイブリッド形式での開催が実現し、熊本城ホールのメインホールで馬場教授が会長講演をなさるお姿を拝見した際には、教室員として胸に迫るものがあり、あふれ出る涙を抑えることができませんでした。実際に涙を流したかどうかは定かではありませんが、それほどまでに心を動かされる場面であり、私にとって忘れ難い経験となりました。

また、第２代教授である岩槻政晃先生とも、長きにわたり多くの時間を共有させていただきました。大学病院および国立病院機構熊本医療センターにおける研修医時代にはともに臨床に励み、大学に戻ってからは、同じ上部消化管外科医として、診療・研究・教育、さらにはプライベートに至るまで、さまざまな場面をご一緒させていただきました。食道グループで、性別を問わず多職種の皆さまとともに、上通や下通、上之裏で懇親会を頻回に催し、「食道がん診療の未来」について熱く語り合っていた頃のことが、今でも懐かしく思い出されます。現在、岩槻先生のもとで教室が新たな発展の時を迎えていることに、深い喜びと確信を抱いております。

2025年９月、私は熊本大学を離れ、東京大学消化管外科学教授として、新たな一歩を踏み出しました。長年親しんできた熊本の地を離れるにあたり、寂しさもありましたが、熊本大学で得た臨床力、研究力、そして人とのつながりは、今の私を支えるかけがえのない財産であると、日々実感しております。

馬場教授、岩槻教授のご指導のもと、本教室が20年間にわたり築いてこられた伝統は、高い専門性と学術性を有し、全国に誇る成果を挙げてきた証左であります。そして何より、互いに切磋琢磨し、支え合う温かな風土こそが、教室員一人ひとりの成長を力強く後押ししてきたのだと思います。このような環境に身を置くことができたことを、私は心から誇りに思っております。

末筆ながら、熊本大学消化器外科学のさらなる発展と、次の10年・20年に向けたご活躍を、心より祈念申し上げます。

寄　稿

関連病院

（五十音順に掲載）

熊本大学病院消化器外科医局設立20周年に寄せて

阿蘇医療センター 阿蘇市病院事業管理者・
阿蘇医療センター院長　**甲　斐　　豊**

熊本大学病院消化器外科の医局設立20周年をお祝い申し上げます。

当院は開院当初から医師をはじめ医療職の確保に苦慮して参りましたが、消化器外科については、貴医局の計らいで2019年４月から常勤の先生を派遣いただいております。その後次第に診療体制も整い、お陰をもちまして阿蘇医療圏の拠点病院として、政策的医療を中心に必要とされる機能を整備するに至りました。なかでもがん医療に関しては、2020年４月に阿蘇圏域初の熊本県がん診療連携拠点病院に指定されましたが、これは偏に消化器外科から派遣いただいている先生方による、化学療法・手術・緩和ケア・キャンサーボード等の様々な尽力・指導の賜物と感謝しております。また、がん症例を含め重症度の高い外科系疾患については、貴診療科との紹介・逆紹介の症例数も増加しており、外科一般に係る診療支援のご配慮にも併せて感謝申し上げます。

当院も昨年８月に開院10周年を迎えました。今後更に地域医療拠点病院として機能充実を図り、地域の医療需要に応えてまいります。引続きご指導ご支援のほどお願い申し上げます。

貴医局ならびに関係諸氏の今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

近況報告

天草市立牛深市民病院 院長
松　﨑　法　成

当院は天草下島の南西端に位置し熊大病院から約３時間と時間的に最も遠い関連病院のひとつです。過疎化による人口減少と人手不足も勘案し本年度より118床から93床に病床削減し病棟を３病棟体制から一般と療養の２病棟にしました。外科３名、内科２名、麻酔科１名の６名の常勤医で急性期から回復期、慢性疾患の入院患者を受け持ちます。一時期の常勤医不足の際は医局から多大なるご支援をいただいて乗り切ってまいりました。岩槻教授をはじめ現在の医局の教官を務められております先生方の多くが若手の頃（大学院在学中、または卒業すぐのタイミング）、当院に１～３か月の短期交代での常勤を務めていただいた経験があられ、地域や病院の事情をご理解いただけるという点で非常に心強いかぎりです。

手術件数は昨年62例で、消化器がんや乳がんの手術、胆石、ヘルニアなどの中低難易度手術を主に行っております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

地域医療の存続にむけて

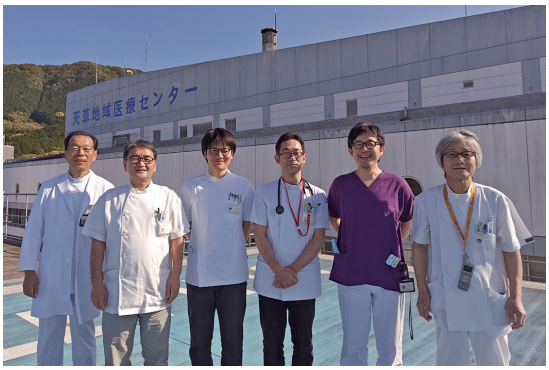
天草市立河浦病院　病院長
中　川　和　浩

消化器外科医局設立20周年誠におめでとうございます。

この度、馬場秀夫先生より岩槻政晃先生に教授職が引き継がれましたけど、今後ともますますの教室のご繁栄をお祈り申し上げます。

当院は、天草の南方　河浦町、天草町を主とする広範な地域を医療圏として担っています。ただ少子高齢化、人口減少が著明で、患者減少による経営悪化は否めません。ただ住民に必要とされる地域医療の存続のため在宅医療のサポート、訪問診療の強化に力を入れております。今年３月には、医療 Maas を利用した遠隔診療をはじめました。

馬場先生には、地域医療に対し非常に気を使って頂き、多くのご支援をいただきました。岩槻先生にご挨拶に伺ったときにも同様のお言葉をいただきました。今後とも地域医療の存続のために消化器外科同門のみなさまのご支援、ご協力よろしくお願いします。



教室設立20周年に寄せて
－天草からの感謝と敬意－

天草地域医療センター　院長
吉　仲　一　郎

教室の設立20周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

天草地域医療センターは、熊本市から車で約２時間、三方を海に囲まれた環境に位置し、離島に近い地理的特性を持ちながらも、地域の皆さまの命と健康を守る医療の拠点として歩んでまいりました。

これまでの20年間、教室からは多くの先生方を派遣いただき、日々の診療はもとより、地域医療の質の向上にも大きく貢献していただいております。

とくに、高度な医療技術や最新の知見を現場に直接届けていただけることは、私たちにとって大きな刺激となり、日々の励みともなっております。

少子高齢化の進行や専門医の確保が一層難しくなるなかで、大学からの継続的なご支援は、私たち地域の医療を支えるうえで、非常に心強く、大切な存在であると実感しております。

今後とも、大学と地域とが一層連携を深め、ともに理想の医療の実現を目指していければと願っております。これまでのご尽力に、改めて深く感謝申し上げます。

熊本大学消化器外科学教室とともに

JCHO 天草中央総合病院 病院長
芳　賀　克　夫

当院は、昭和21年に健康保険病院として開設した急性期総合病院です。昭和21年の創立以来、院長は代々熊本大学第二外科の教室員が努めて参りました。私も2017年に熊本大学消化器外科学教室の馬場秀夫教授のご命令により、当院に派遣された次第です。当院４代目の院長となります。就任時、馬場教授は病院経営を立て直すように言明されました。当時当院は７億円を超える借入金がありました。その後、私は医師確保に取り組み、当時17名であった常勤医師を８年間で25名にまで増やすことができました。これにより、病院は黒字となりました。借入金はすべて返済し、逆に10億円を超える預託金をためることができました。

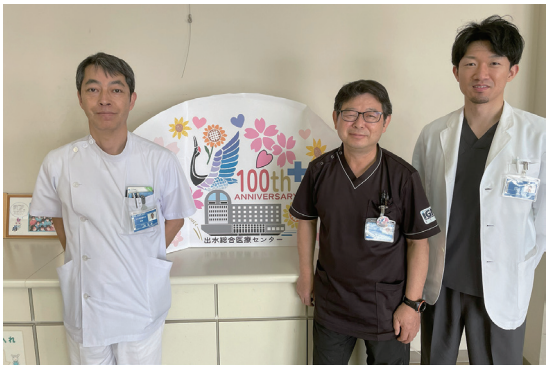
私は病院長に求められるには、多種多様な職員の能力を最大限発揮させることだと思います。それに最も適しているには、マルチタスクに慣れている外科医であると考えています。今後も熊本大学消化器外科学教室の変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

消化器外科開講20周年に寄せて

荒尾市立有明医療センター 病院事業管理者
大　嶋　壽　海

熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学講座開講20周年おめでとうございます。

開講以来絶えず教室から優秀な人材を派遣していただき、馬場秀夫初代教授、岩槻政晃現教授、そして医局の先生方に心より感謝申し上げます。おかげさまで、令和５年10月１日に荒尾市立有明医療センターとして新築オープンすることが出来ました。外科は令和７年度、手術支援ロボットの予算を計上し、令和８年からの稼働を目指して準備中です。しかしながら外科医の高齢化は深刻で、平均年齢58歳、実働３人＋α といった状況です。多くの症例を経験でき、休暇はしっかり取れる若手医師にとって魅力ある病院を作ってまいります。より一層のご支援をよろしくお願い申し上げます。私達も、研修医に外科の魅力を伝え、消化器外科に進む医師を増やすことで教室の発展に寄与したいと考えています。近い将来、外科医不足が懸念される中、日本の医療を共に守っていきましょう。



馬場外科から岩槻外科へ

出水総合医療センター 院長
花　田　法　久

熊本大学消化器外科開講20周年、誠におめでとうございます。カオスの時代から築き上げられて来られた、前馬場秀夫教授には大変なご苦労があったことと思います。それを支えてこられた教室員の皆様にも大きな敬意を表します。私はこの20年間大学での経験はありませんが、その業績の質・量ともに圧倒されます。若い人たちと一緒に仕事をさせてもらい感じることですが、将来が楽しみな Academic Surgeon ばかりです。真摯な態度で、病気でなく病人をしっかりみてくれます。人付き合いもよく、将来立派なリーダーになってくれるものと期待します。

さて、岩槻外科となり１年が経過しました。プレッシャーもあると思いますが、岩槻カラーを出して順調な船出だと思います。私たち同門は、岩槻教授の方針をよく理解し、できる限りの協力をすべきと考えます。しかし、関連病院の多くは厳しい状況にあり、母体である大学を頼りにせざるを得ないところが多数です。今後とも変わらぬご支援を賜れば幸いです。

光陰矢のごとし

宇城総合病院 診療部長
小　森　宏　之

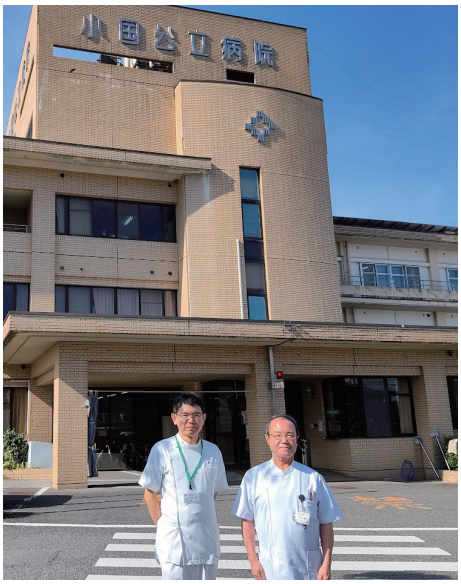
この度は医局設立20周年おめでとうございます。先代の馬場教授が着任された開局のころに大学に在籍しておりました。ほんのちょっと前のことと思っておりましたが20年も過ぎていたとは、時の流れは早いものだと痛感いたします。この20年の間に当院は宇賀岳病院から宇城総合病院となり地域医療を支えて参りました。医局のご協力もあり最近は消化器外科の手術も増えてきております。宇城地域の中核病院として、地域の方々のニーズによりいっそう応えられるようになりました。今後の熊大消化器外科の益々のご発展に、微力ながら協力できればと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

大牟田天領病院だより

大牟田天領病院 診療部長
松　村　富二夫

昔の大牟田市は三井財閥の城下町として石炭産業を中心に栄えていたのですが、三井財閥の撤退とそれに伴う人の流出で現在は寂しくなっています。当院の歴史は古く明治22年の三池炭鉱の操業とともに開院し、今年で136年目を迎えました。おととし大牟田吉野病院と合併し現在では14科の診療科があり病床数は389床となりました。日本外科学会認定施設、日本消化器外科学会関連施設、日本消化器病学会関連施設、日本消化器内視鏡学会認定連携施設などに指定されています。手術件数はやや減少し年間200例となっています。

スタッフは松村、大川、佐藤、堀内の４人で診療に当たっています。患者中心の総合的チーム医療をモットーとして地域住民の健康を守っていきたいと考えています。



熊本県の北の郷から

小国公立病院 院長
堀　江　英　親

小国公立病院は、阿蘇小国郷の医療の要として、地域住民の健康を支える役割を果たしています。熊本大学消化器外科からは常勤医師のみならず宿日直にも派遣いただき、地域医療を共に支えていただいています。当院では現在手術は行っていませんが、必要な際には大学や関連病院にご協力をお願いしており、皆様の支援に感謝しています。

また、人口や年齢構成の変化を考慮し、訪問診療やオンライン診療を導入するなど、住民と職員が理想とする医療の実現に向けて取り組んでいます。これからも地域の皆様から信頼される病院を目指し、医療サービスの充実を図ってまいります。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

開講20周年に寄せて

球磨郡公立多良木病院企業団 企業長
髙　森　啓　史

熊本大学消化器外科学開講20周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。岩槻教授をはじめ教室員各位には、へき地における地域医療に格別のご高配とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。当院企業団は球磨二次医療圏唯一の自治体病院として高齢化率が40%を超える圏域で、『病と病人と生活を診る』を基本理念として地域一体型のチーム医療を展開しています。現在、外科は３名体制で一般外科から消化器外科の低侵襲手術や高難度手術まで幅広く行なっています。中原部長は手術や外科診療のみならず、副企業長兼診療部長兼医療技術部長として、企業団全体のマネージメントも行っています。大山医長は手術手技の上達顕著で、救急では外科以外の様々な疾患の入院診療まで担当し、更には職員運動会や忘年会等の企業団行事のリーダーとしても活躍しています。今後も職員がキャリアアップでき、働きがいを実感できる職場づくりに努めてまいります。教室の益々のご発展を祈念申し上げます。奥球磨の地から微力ながら応援させて頂きたいと存じます。

県北の地から感謝を込めて

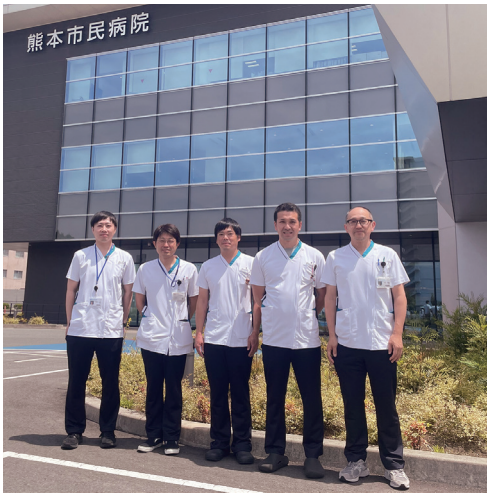
くまもと県北病院 外科系統括部長兼
消化器外科部長　**赤　星　慎　一**

熊本大学大学院消化器外科学開講20周年、心よりお慶び申し上げます。当科は赤星、髙城、坂本、松本の４人で手術を中心とした診療に励んでおります。当科の年間手術症例は当院開院時（2021年度）の約260件から徐々に増加し、私が部長となった2024年度は約350件と前年より約60件増となりました。これはひとえに諸先輩方のご尽力および近隣の先生方のご協力の賜物だと思っております。

岩槻教授におかれましては、本年度（2025年度）より派遣医を３人から４人に増員していただき、誠に感謝申し上げます。今後ともご協力よろしくお願い申し上げます。当科としても最大限の協力をさせていただければ幸甚に存じます。

当科は専攻医が希望してくれる病院となり、本当にうれしく思います。今後もそれが継続できるよう、魅力とやりがいにあふれる当院消化器外科を形作っていければと考えております。

最後になりますが、熊本大学大学院消化器外科学講座のますますの発展を祈念しております。



熊本大学消化器外科 20周年に寄せて

熊本市民病院 部長
生　田　義　明

熊本大学消化器外科の創設20周年、誠におめでとうございます。これまで多大なるご指導とご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

2019年10月、熊本市民病院は熊本地震の教訓を生かし、東区東町に新築移転し、地域医療の中核としての機能を強化しております。移転以降、救急医療体制の充実により、年間救急車搬入件数は約3,000件から約6,000件へと増加し、消化器外科手術件数も年間500例以上に増加しております。本年度には Da Vinch XI の導入も予定されております。

本年度より、消化器外科は生田義明、東孝暁、大徳暢哉、野元大地、小野浩輔の５人体制で診療を行っております。中堅、若手の充実したチーム体制で、地域の皆様に信頼される医療を提供すべく、日々研鑽を重ねております。

今後とも、地域医療の発展と患者様の健康を守るため、共に歩んでまいりたいと存じます。

消化器外科同門会 20周年おめでとうございます

くまもと森都総合病院
外科部長　**田　嶋　ルミ子**

当院は大正11年６月20日に熊本逓信診療所としてスタートしてから熊本逓信病院、NTT 九州病院、NTT 西日本病院の編成を経て、平成24年７月1日より現在のくまもと森都病院となり、2022年に100周年を迎え、現在103年目に突入しています。当院といえば、旧第二外科の時代1987年に赴任され、2023年３月まで当院に37年間勤務されていた山中剛先生（現御幸病院　総合診療部長）を思い浮かべる同門の先生方が多いのではないでしょうか？　2005年４月に馬場秀夫前教授が立ち上げた消化器外科同門会と当院との歴史も山中先生との関係を抜きには語れないかと思われます。2008年７月から消化器外科の医局人事として、２－３年ごとに若手－中堅医師のローテションが始まり、2019年4月に私が派遣させていただいています。2023年４月からは市民病院より横山先生が赴任され、現在横山・田嶋の二人体制で業務を行っています。主な手術症例は胆石、ヘルニア、横山先生が担当される肛門疾患になりますが、大腸癌や胃癌等の Major 手術も行っています。時間外の救急に対しては今まで同様、大学や関連病院の先生方にお世話になることが多いかと思いますが、当院が御役に立てることがある時は全力で対応いたしますので、お声がけください。今後の展望としましては、やはり市内中心部で、大学病院に近く、フットワークの軽い手術の出来る病院としての地の利を活かして、同門の先生方のお役に立てればと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

春は桜よ秋なら紅葉
夢も田原の草枕

熊本赤十字病院 第一外科部長
横　溝　　博

熊本大学消化器外科学教室創立20周年おめでとうございます。馬場教授が輝かしい業績を挙げ発展させた教室を教室出身の岩槻先生が継承されたことは大変意義深いこととお慶び申し上げます。

日本赤十字社は西南の役・田原坂の戦いの負傷者を救助した博愛社が前身です。日本赤十字社発祥の地に当院は昭和25年に水道町に開院、昭和50年に現在地長嶺に移転しました。開設当初は医師数４、病床数53でしたが、熊本大学との連携により現在医師数は200を超え病床は490床です。田原坂以来の救急医療と癌診療を含む高度医療が当院の二本の柱です。

当院は平成31年から外科領域専門研修プログラムを立ち上げましたが、人材の確保は年々難しくなっています。そのような中で熊本大学消化器外科への入局者が近年増えているのは誠に喜ばしい限りです。当院も関連病院として未来を担う外科医の育成に向けて協力を惜しみません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

施設整備は無事終了しました

熊本総合病院 病院長
島　田　信　也

岩槻教授のご高配により、当院へ消化器外科の優秀な人材の充実をお図り頂き、お陰様で住民の皆さんの期待にお応えできる熊本県南の拠点病院として、鋭意貢献しております。

特に今年度は、当院の更なる診療機能充実と院内インフラ整備を図るために北館竣工に続き本館の大改修も終えましたので、総合病院の名に相応しい全診療科の拡充に努めて参ります。

今後とも、熊本大学大学院消化器外科のご支援を仰ぎながら、当外科一同はさらに診療の質を高め、課題解決に向かって一層の精進をして参ります。

消化器外科
設立20周年記念によせて

熊本地域医療センター 病院長
杉　田　裕　樹

消化器外科設立20周年記念おめでとうございます。初代の馬場教授が20年前に熊大消化器外科を築かれ、19年間の長きに渡って多くの医局員を御指導され、また熊本の外科医療を引っ張られました。昨年同門の岩槻先生が第二代教授に就任され、さらに次世代へとバトンが渡されており、熊大消化器外科医局の伝統というべきものが、今まさに築き上げられて来ていると思われ、喜ばしい限りです。学問のみならず医療のレベルにおいても全国でトップレベルであり、同門の一員として大変誇らしく思っております。

私は2012年に熊本地域医療センターに赴任し、地域医療としての外科診療を継続しております。当センターには当センターでしかできない医療がありますが、大学には大学でしかできない仕事があると思っております。医局員が一丸となり、これまで築いてきた熊大消化器外科の素晴らしい伝統を継承しつつ、今後さらに発展して行かれることを願っています。

開講20周年によせて

国家公務員共済組合連合会 熊本中央病院
外科部長　**齋　藤　誠　哉**

熊本大学消化器外科学の開講20周年を心よりお喜び申し上げます。

熊本大学消化器外科学開講以降、この20年間に約32名の医局員が当院で勤務し、当院の外科を支え、研鑽を積んでいただきました。これまで、外科部長としては、高野定先生、那須二郎先生、齋藤誠哉が務めてきました。更には、2023年より那須二郎先生が院長職をお勤めです。当院で外科が十分な力を診療に注ぐことができ、発展してこれたのは、消化器外科学教室とともにこの20年間を歩むことができたからだと感謝しております。この20年間で外科手術も腹腔鏡手術やロボット手術と新たな手術方法が確立されてきています。その一方で若手外科医の減少といった問題点もあります。より一層、魅力ある消化器外科を目指して診療・外科医育成に取り組む必要があると感じております。

これからの10年、20年も医局員や教室とともに更なる発展を遂げられるように精進していきたいと考えております。

医局20年の歩みによせて

独立行政法人労働者健康安全機構 熊本労災病院
消化器外科部長・消化器内視鏡外科部長　井　上　光　弘

熊本大学消化器外科医局開講20周年おめでとございます。月日のたつのは早いもので、自分は医師になって５年間外勤し大学に戻った2005年４月１日が消化器外科学教室発足の第１日目でした。大学、外勤先といろいろな先生方に大変御世話になりました。

現在熊本労災病院は県南医療の基幹病院として、診療科も充実し、昨年度就任された松岡雅雄院長先生のもと、日々の診療態勢もさらに充実しております。今年度手術室、ICU、災害拠点棟が新設されます。またロボット支援手術も今年度より開始し、当院は国産の hinotori を導入し、軌道に乗せるべく邁進しているところです。消化器外科からスタートしましたが、泌尿器科、呼吸器外科もロボット手術経験者が赴任し、導入にむけて進めています。外科医局は、消化器外科だけでなく、心臓血管外科や呼吸器外科、小児外科の若い先生も研修で一緒になり、充実した環境ができております。これも一重に消化器外科医局、前馬場教授、岩槻教授のご厚意と篤く御礼申し上げます。

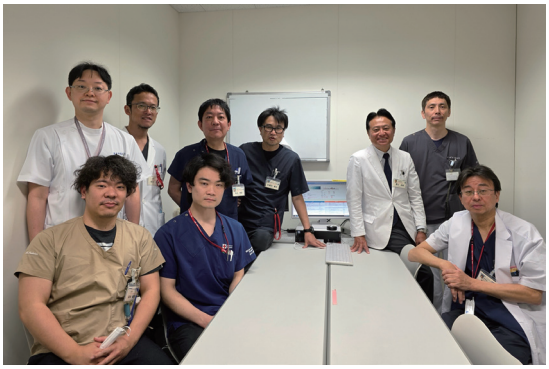
五ヶ瀬町国民健康保険病院

五ヶ瀬町国民健康保険病院 院長
崔　　林　承

当院の院長職は前任の松岡由紀夫先生より消化器外科が担当しております。以前は月に数件あった全身麻酔症例は次第に減少し、現在は全例熊本大学病院や県立延岡病院はじめ関連施設へお願いしております。また、外科２名体制から１名（院長）へ、病院全体でも常勤医師２名体制となっており、医局からの非常勤・休日当直医の派遣なしには診療を継続できない状況です。

ご存じの通り日本の少子高齢化と人口減は想定よりも早くすすんでおり、五ヶ瀬町の人口もこの10年で４分の１減少し、本年中には３千人を切る勢いです。持続可能な診療体制の維持を目指すべく、宮崎県北の西臼杵郡３町（高千穂町・日之影町・五ヶ瀬町）の国民健康保険病院の経営統合を行い、「西臼杵医療センター」がスタートして２年目を迎えます。

今までも、そしてこれからも熊大消化器外科と共に地域医療を支えていければと考えております。本教室の益々の発展を祈念しております。



消化器外科教室20年への思い

国立病院機構 熊本医療センター 副院長
宮　成　信　友

国立病院機構熊本医療センターの宮成です。2005年に旧ナンバー外科の消化器部門が統合され消化器外科が立ち上がりました。当時医局長をしていましたので様々な状況が思い出されます。馬場秀夫前教授は臨床・教育・研究を柱に、全国最高レベルの教室を作り上げることを目指していらっしゃいました。本当はさらに上の世界レベルが目標だったかもしれません。消化器外科発足時は、2004年より新臨床研修医制度が始まりましたので新入局員なしの１年間でした。私は2008年に熊本医療センターへ異動になりました。教室からは優秀な人材を派遣していただき感謝しております。当院は臨床研修医が比較的多いこともあり人材確保ではスタッフ全員で貢献できるように努力し、多くの人材が入局してくれました。その後の彼らの成長には頼もしさを感じます。

この20年間には、熊本地震、コロナ禍など大変な時期もありましたが、それを乗りこえ教室として第122回日本外科学会を熊本の地で開催できたこと、そして教室員から２代目の消化器外科教授に岩槻政晃先生を東大教授に馬場祥史先生を輩出したことは教室の誇りです。これからも国立病院機構熊本医療センターのスタッフ一同、消化器外科教室に貢献できるよう努力してまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

近況報告

国立病院機構 熊本再春医療センター
消化器外科部長　沖　野　哲　也

熊大消化器外科医局20周年の節目にあたり、当科として大過なく業務運営できますのも大学医局をはじめ多くの皆様方のおかげと改めて深く感謝致します。写真背景は2020年11月完成の新屋舎です。旧屋舎は改装後、医局や会議室などとして今も使用されています。当科メンバーは写真列左から大原（S60)、沖野（H２)、冨樫（H13)、園田（H22)、の４人で診療を行っています。診断から治療・follow まで一貫して行うことを基本としています。当院にとって嬉しいニュースがあり、これまで長年不在であった消化器内科常勤医が、2025年４月より新たに２名勤務されることとなりました。連携を密にしながら診療内容の充実を目指します。今後ともいっそう地域住民のニーズに応えるよう日々努めて参ります。ご支援、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

近況

国立病院機構 熊本南病院 診療部長
林　　尚　子

熊本市と八代市の中間地点、宇城市松橋に位置する当院の状況は、消化器外科医局が開講した20年前とは様変わりしました。20名以上いた常勤医は14名まで減少し、外科医は私１名、常勤麻酔科医も不在となりました。従いまして、全麻手術は週に１回、熊大麻酔科医の来院日に集約し、消化器外科医局から小川克大先生に手術応援に来て頂き、行っております。当直医の確保にも苦慮しており、現在、消化器外科医局以外にも循環器内科、血液内科医局より当直医を派遣して頂いております。

今後、地方では都市よりもいち早く、高齢化と人口減少が進んでいくため、2040年頃までを見据えた地域医療構想の策定が進められており、一定以上の難度を伴う外科手術は high volume center へ集約化されていくものと予想されます。当院外科がどのような形で地域へ医療提供していくことになるのかはまだわかりませんが、外科領域における common disease だけでなく、人口の高齢化に伴い増加していくがん患者さんに対して、今まで同様、診断・治療・緩和まで、都市部の病院と遜色ない医療を地域住民に提供できるよう努力して参ります。

感恩報謝

独立行政法人国立病院機構 都城医療センター
外科医長　藏　元　一　崇

平素より岩槻政晃教授および教室の先生方には格別な御支援御鞭撻を頂き大変感謝しております。この度は医局設立20周年、誠におめでとうございます。この20年間、医局からは多大な御援助を頂き、厚く御礼を申し上げます。本年４月から藏元と３ヶ月毎に大学からローテーションで派遣して頂き、大変有難く思います。現在は木下翔太郎先生に来て頂いておりますが、優秀な先生を派遣して頂き重ねて感謝申し上げます。当院は地域がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院の役割を担う307床の病院で、各科所属医局は様々ですが、垣根はなく協力して診療を行っております。外科の診療は手術のみならず、癌薬物療法や緩和ケアも行っております。患者様に安全で質の高い医療を提供できるように心がけております。今後はこれまで以上に都城市近辺の医療を支えるよう、さらなる精進しますので、今後とも何卒御指導御鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

消化器外科教室
設立20周年を記念して

済生会熊本病院 部長
今　井　克　憲

熊本大学消化器外科学講座20周年に際し、心よりお祝い申し上げます。平成17年に熊本大学消化器外科学講座が発足、それから早いもので20年がたとうとしております。これまでの歴史の中で、熊本の地において安全かつ最善・最新の医療を提供し、多数の外科医および教育者を輩出するのみでなく、日本そして世界に向けて外科学の最新の知見を発信し続け、世界の外科学の発展に貢献されてこられたこと、心より敬意を表するとともに、その教室の一員であることを心から誇りに思います。

済生会熊本病院は1935年に恩賜財団済生会熊本診療所として開設され、今年で90周年を迎えます。その中でも外科センターは臓器再編前の旧第二外科、そして再編後の消化器外科教室と歩みを共にして参りました。当院は毎年1000例以上の外科手術を行う high volume center であり、さらに３次救急病院として多数の緊急手術を連日連夜行っております。高度最先端医療を提供し、さらに地域における急性期病院としての「断らない救急」を実践すべく、メンバー一同日々奮闘しております。今後とも、ご支援ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

手術室の維持

済生会みすみ病院 外科部長
甲　斐　幹　男

消化器外科20周年おめでとうございます。

当院は国立療養所三角病院閉院に伴い、2003年３月１日に済生会みすみ病院となり、新たに開院致しました。以後22年間、近隣30 km 圏内に唯一の手術対応可能な病院として熊本大学消化器外科により当院外科は維持して頂いて参りました。

しかし、COVID-19 の影響、常勤の麻酔科医の退職、整形外科常勤医の退職による整形手術の終了と手術室自体の維持が当院外科の大きな課題となっています。

今後の消化器外科のご発展に合わせ、当院も頑張ってまいります。よろしくお願いいたします。

開講20周年によせて

国家公務員共済組合連合会 新別府病院
病院長補佐　**菊　池　暢　之**

「熊本大学大学院　消化器外科学教室」開講20周年、誠におめでとうございます。

初代教授の馬場秀夫先生のご指導のもとに教室の先生方が一致団結して、日々の臨床、研究、教育に幅広く尽力され築き上げられた教室を、現在の岩槻政晃教授がさらに発展させていらっしゃることと拝察申し上げます。

さて当院は、別府鉄輪温泉の近くに位置しています。大分県下で４ヶ所の救急救命センター（新型）の一つが当院に併設され、年間3000件以上の緊急搬送受け入れを行っています。そのため、当科の手術症例も、1/3 が緊急手術となり、慌ただしくなることもあります。現在は大分大学消化器・小児外科学の猪股雅史先生の教室から３名の先生を派遣していただき、日々の診療を行っています。

コロナ禍で長らく休止していましたが、やっと最近復活した病院玄関横にある足湯「わをんの湯」（写真：再開前のため、土足で失礼しています）は、別府八湯温泉道に登録された（第209番）、由緒正しい足湯です！

和水町立病院の現況

和水町立病院 院長
大　島　茂　樹

医局設立20周年おめでとうございます。和水町立病院は菊水町立病院の時代から、歴代院長を旧第２外科・消化器外科医局から派遣していただいております。また常勤医を派遣いただくとともに宿日直の非常勤医師の応援もいただいております。人口減少・高齢化が進んでいる地域であり、病床数を削減するとともに、機能も回復期、慢性期や在宅医療に軸足を移してきた歴史があります。高度急性期病院へのアクセスが良い地域であるため、機能分化を進める中で平成26年から手術も局麻のみとなっております。地域の住民の皆さんが安心して生活できる社会づくりに貢献できる病院を目指して、外科で培った General Mind をもった仲間とともに日々奮闘しております。

西日本病院よりご挨拶

西日本病院 外科部長
兼　田　　博

熊本大学消化器外科教室設立20周年、誠におめでとうございます。平素より難しい症例への対応から当直などまで大変お世話になっております。今後もさらなる発展と教室の皆様のご健康とご活躍を心より願っております。

さて、現在西日本病院は聖ヶ塔病院との合併のため、新病棟増築工事の真っ最中です。年末にリハビリセンターとして完成する予定ですが、699床の大所帯となるため人材確保を含め考慮しておくべき問題が山積しています。新病棟完成後も「地域完結型医療」の提供を目指し、急性期から回復期までの診療をより強化していけるように準備を進めているところです。

外科は、杉原栄孝先生、古橋聡先生と私の３人体制です。２人が上手に他のスタッフとも連携してくれているため、手術症例の増加にも繋がっているようです。私自身は気が付けば還暦となっており、『生涯一兵卒』という目標の重みを自覚すべき年齢に至ったと感じています。若いスタッフに迷惑をかけることなく、フットワークの軽さをいつまで維持できるかが今後暫くの課題です。

患者も10年前と比較すると超高齢者の割合がかなり増えてきており、それぞれで身体機能のふり幅が大きいため、同じ結果を求めることが困難になってきているような気がします。今こそ、適切な層別化が必要かなと思われるこの頃です。

球磨川発・消化器外科行き。地域だからこそ志は高く

人吉医療センター 副院長
藏　重　淳　二

熊本大学大学院消化器外科医局設立20周年、心よりお祝い申し上げます。ご指導を受けた先生方の背中を追いながら、私たち人吉医療センター外科も、“外科愛”と“地域魂”を胸に、球磨川のほとりで日々奮闘しております。

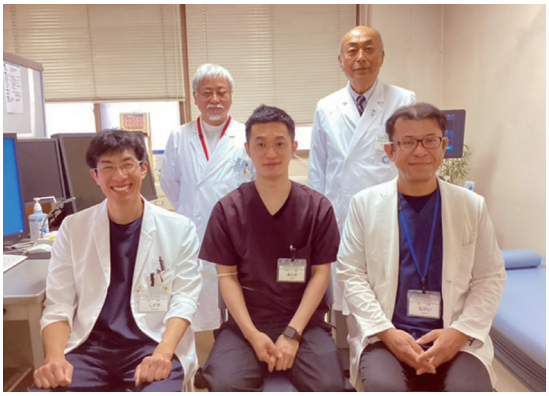
本年度は、下川・藏重・澤山・江藤・丸野・安部の６名体制で、

① 鏡視下手術の適応拡大やERASの導入による低侵襲・早期回復の実現、
② 化学療法を含む総合的ながん診療の継続と体制強化、
③「断らない救急医療」の堅持、

の３本柱を軸に、一丸となって診療に取り組んでおります。

また、今年度も初期研修医が合計11名在籍しており、これまで当院での研修を経て熊本大学消化器外科へ進んだ若手医師も多数。いまや「気づけば消化器外科医局員」が、当院あるあるになりつつあります。

“田舎でもアンテナ高く！”を合言葉に、これからも大学医局とのつながりを大切にしながら、地域完結型かつ未来志向の医療を目指して邁進してまいります。



医療情報部新設

国保水俣市立総合医療センター 院長
阿　部　道　雄

当院は熊本県南西部に位置し、水俣・芦北医療圏に加え、北薩地域（出水・阿久根・伊佐等）からも広域に患者を受け入れる急性期中核病院であり、24時間対応の救急医療体制を継続的に維持しております。外科は坂本事業管理者のもと、阿部・長井・志垣・荒木の常勤体制で診療に従事し、消化器外科を中心に多様な外科疾患に対応しております。令和７年度には医療情報部を新設し、長井診療部長が部長を兼任することで、院内の情報基盤整備と地域医療機関との連携強化を図っております。熊本大学消化器外科には、画像データや電子カルテ情報を遠隔共有のうえ、術式の選定や手術適応の判断等に関して継続的な助言を頂き大変感謝しております。今後とも地域に根差した医療の充実に努めてまいります。

延岡だより

宮崎県立延岡病院 外科
土　居　浩　一

熊本大学消化器外科学教室　開講20周年誠におめでとうございます。

2005年に臓器別の外科教室の再編成として旧一外科と旧二外科で育まれ、それぞれ独自の文化を持つ消化器外科医が馬場前教授の力強い指導の下に融合し、手術数も経時的に増加し、学会発表や論文数も飛躍的に増加し、国内海外留学も毎年多数の教室員が成果をあげ、熊大に帰ってきて獲得した英知を還元して成長してきました。帝国大学以外では数少ない主幹大学となり第122回日本外科学会が熊本で開催され、熊本外科学誕生100周年に花を添えていただきました。昨年からは岩槻教授が主宰され更なる成長が期待されております。

さて県立延岡病院は宮崎県北の唯一の高次医療施設であり、県北最後の砦として日々診療に励んでいます。外科と消化器内科で消化器センターを運営し、消化器検査と外科手術、内視鏡治療、化学療法を精力的に行いながら、必要時には集学的治療も共同で行っています。応需率の極めて高い救急部も活躍しており、緊急手術が必要な症例にも当科はほぼ全て対応しています。ロボット支援手術の準備も進み、来年には泌尿器科から稼働開始予定です。

熊本からは少し距離はありますが、中九州道路も断片的に繋がってきています。自然豊かな延岡で、一緒にこの砦を守ってみませんか。

開講20周年に寄せて

公益社団法人日本海員掖済会 門司掖済会病院
副院長　安　部　利　彦

消化器外科学講座開講20周年おめでとうございます。馬場教授の御着任とともに開講された後、日本外科学会総会を主催するなど目覚ましい躍進を遂げ早20年に感無量の思いです。新型コロナの規制解除とともに、九州屈指の観光地である門司港は外国人観光客を中心に以前の賑わいを取り戻しています。しかし折からの人口減少、外科常勤医数の減少に加えコロナ期間の受診控えによる患者数の減少が元に戻らず収益減となっておりましたが、一昨年度より整形外科と泌尿器科の常勤医再確保に成功し、少しずつではありますが患者数と手術件数の回復を実感しております。当院の所属する日本海員掖済会は明治31年に民法による法人登記第１号としての歴史があり、門司病院も明治35年から現在地に在ります。北九州市唯一の医局関連病院として再増員を目指して盛り返していこうと２人体制で頑張っておりますので宜しくお願い致します。

新生山鹿市民医療センター
８年の歩み

山鹿市民医療センター 病院事業管理者
別　府　　透

消化器外科学開講20周年、おめでとうございます。2005年の臓器別外科再編時の緊張感がよみがえります。当センターは1964年に開設、2011年に山鹿市民医療センターと改名、2016年に新しい消化器外科チームが着任しました。201床の自治体病院で、がん、感染症、災害、救急、地域医療、研修医教育、等の拠点病院です。現在３名の病棟医（１名産休中）と院長、事業管理者が所属しています。キャリアアップを目指して、外科・消化器外科・消化器病・肝臓・緩和ケア、等の施設認定を取得し、25名の専門医・指導医を産み出しています。Yamagaからの英文論文数は72編（First 42編）になりました。Ｒ６年度には外科手術は260例に増加し、救急車受け入れ台数も1500台に増加しています。特に肝がん治療数は合計約700件に達しました。消化器がんやヘルニアの腹腔鏡手術の指導が可能です。今後ともよろしくお願いします。

熊大消化器外科と連携し僻地医療を担って75年

山都町包括医療センターそよう病院 副院長
竹　本　隆　博

当院は山都町の山間僻地に立地する常勤医５人（外科医１人）の小病院です。少子化・人口減少の波を受け高齢化率50％超で現在の日本の20年先を行く“先進地域”です。当院に求められているのは総合診療・地域包括ケア及び救急医療です。外科を基盤としながらも住民のあらゆる健康課題に対応しなければなりません。熊大消化器外科教室の歴史ある連携病院として緊密に連携し、山都町はもとより近接する南阿蘇や宮崎県の患者様を高度先進医療へ橋渡しし、更に術後の回復管理や抗癌剤を含めた後治療を担います。今後も教室と共に地域医療の維持・発展を担って参ります。

教室のあゆみ

沿　革

熊本大学消化器外科学講座は、熊本大学の大学院大学への改組に伴い前身である旧第一外科学講座、旧第二外科学講座が統合・臓器別再編されて誕生しました。

2005年４月１日の馬場 秀夫 初代教授の着任に伴い開講し、2025年に20周年の節目を迎えました。2024年７月１日に岩槻 政晃 第二代教授が着任し、診療・研究・教育のすべてにおいてさらなる発展を目指して日々取り組んでおります。

熊本大学大学院生命科学研究部・医学部・熊本大学病院　遠景

2005年4月～2024年3月
馬場　秀夫
（初代教授）

2024年7月～
岩槻　政晃
（第二代教授）

人　事・　留　学

	H17年4月　2005年	H18年4月　2006年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		
准教授	江上　　寛	廣田　昌彦
特任准教授		
講師	田平　洋一・辻　　龍也・廣田　昌彦・金光敬一郎	金光敬一郎・別府　　透
特任講師		
診療講師		
助教	別府　　透・高森　啓史 石河　隆敏・宮成　信友	高森　啓史・石河　隆敏 宮成　信友
特任助教		
ICU講師	杉田　裕樹	杉田　裕樹
ICU助教	蒲原　英伸	蒲原　英伸
救急・総合診療部助教		
救急・総合診療部診療助手		
医局長	宮成　信友	宮成　信友
病棟医長	廣田　昌彦	高森　啓史
外来医長	別府　　透	別府　　透
医員 専門修練医	野澤　文昭・阿部　道雄・石川　晋之・近本　　亮 渡邊すぎ子・保坂　征司・水流添　周・井上　光弘	本田　志延・近本　　亮・水元　孝郎・小森　宏之 大熊　利之・保坂　征司・水流添　周・野村　由紀 阿部　真也・木下　浩一・蔵重　淳二・蔵元　一崇 齋藤　誠哉・田中　洋平・八木　雄史
大学院生	小森　宏之・池田　公英・高橋　将史・前田　圭介 本村　　裕・山本謙一郎・譚　　暁冬・大村谷昌樹 福永　剛隆・中川　真英・市原　敦史・遠山　和美 古賀　宣勝・増田　佳子・坂本　快郎・崔　　林承 坂本　達彦・生田　義明・中村　匡彦・宮本　裕士 原尾美智子・藤村　美憲・陶山　浩一・橋本　大輔 赤星　慎一・馬場　祥史・増田　稔郎・新田　英利 林　　洋光・今井　克憲・石躍　裕之・長井　洋平 尾崎　宣之・石本　崇胤	坂本　達彦・遠山　和美・市原　敦史・古賀　宣勝 増田　佳子・生田　義明・坂本　快郎・崔　　林承 陶山　浩一・中村　匡彦・橋本　大輔・原尾美智子 藤村　美憲・宮本　裕士・馬場　祥史・増田　稔郎 新田　英利・林　　洋光・今井　克憲・石躍　裕之 長井　洋平・尾崎　宣之・石本　崇胤・赤星　慎一 今村　　裕・岡部　弘尚・井田　　智・日吉　幸晴 岩槻　政晃・冨樫　陽彦・井上　光弘・中原　　修 岡村　茂樹
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	4名	6名
技術補佐		

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学		
国内留学	石川　晋之　H4　県庁 水元　孝郎　H9　愛知医科大学 宮本　裕士　H10　国立がんセンター研究所 岩上　志朗　H11　都立駒込	石川　晋之　H4　県庁 本村　　裕　H10　国立がんセンター東病院 宮本　裕士　H10　国立がんセンター研究所 岩上　志朗　H11　都立駒込

	H19年4月　2007年	H20年4月　2008年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		
准教授	廣田　昌彦	
特任准教授		
講師	別府　　透・高森　啓史・宮成　信友	別府　　透・高森　啓史・渡邊　雅之
特任講師		
診療講師		
助教	林　　尚子・堀野　　敬	林　　尚子・堀野　　敬 外山栄一郎
特任助教		
ICU講師	杉田　裕樹	
ICU助教	蒲原　英伸	蒲原　英伸
救急・総合診療部助教		
救急・総合診療部診療助手		
医局長	高森　啓史	高森　啓史
病棟医長	宮成　信友	外山栄一郎
外来医長	堀野　　敬	堀野　　敬
医員 専門修練医	外山栄一郎・石川　晋之・吉田　直矢・田中　　洋 小森　宏之・坂本　達彦・生田　義明・坂本　快郎 崔　　林承・市原　敦史・田中　洋平・美馬　浩介 澤山　　浩	吉田　直矢・田中　　洋・小森　宏之・生田　義明 坂本　快郎・崔　　林承・中村　匡彦・工藤　啓介 原尾美智子・堀　　和樹・岩上 志朗[*4]・橋本　大輔 陶山　浩一・馬場　祥史[*4]・鶴田　　豊・志垣　博信 黒木　秀幸・中川　茂樹
大学院生	中村　匡彦・原尾美智子・藤村　美憲・陶山　浩一 橋本　大輔・赤星　慎一・馬場　祥史・増田　稔郎 石躍　裕之・新田　英利・今井　克憲・林　　洋光 長井　洋平・尾崎　宣之・石本　崇胤・中原　　修 井上　光弘・冨樫　陽彦・岩槻　政晃・岡村　茂樹 岡部　弘尚・井田　　智・今村　　裕・日吉　幸晴 佐藤　孝彦・平島浩太郎・古橋　　聡・辛島　龍一 太田尾　龍・佐藤　伸隆・哈　　斯塔	赤星　慎一・増田　稔郎・石躍　裕之・新田　英利 今井　克憲・林　　洋光・長井　洋平・尾崎　宣之 石本　崇胤・中原　　修・井上　光弘・冨樫　陽彦 岩槻　政晃・岡村　茂樹・岡部　弘尚・井田　　智 今村　　裕・日吉　幸晴・佐藤　孝彦・平島浩太郎 古橋　　聡・辛島　龍一・太田尾　龍・佐藤　伸隆 齋藤　誠哉・蔵重　淳二・藏元　一崇・阿部　真也 木下　浩一・哈　　斯塔
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	7名	8名
技術補佐		

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学		馬場　祥史　H12　Dana-Farber Cancer Institute
国内留学	本村　　裕　H10　国立がんセンター東病院 宮本　裕士　H10　国立がんセンター研究所 中原　　修　H11　愛知がんセンター 岩上　志朗　H11　都立駒込	生田　義明　H10　大分県立病院 石本　崇胤　H13　慶応大学 岩槻　政晃　H13　九大生医研 木下　浩一　H16　九州大学消化器・総合外科

	H21年4月　2009年	H22年4月　2010年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		
准教授	別府　　透	別府　　透
特任准教授		
講師	高森　啓史・石河　隆敏・渡邊　雅之	高森　啓史・石河　隆敏・渡邊　雅之
特任講師		
診療講師	林　　尚子・堀野　　敬	林　　尚子・堀野　　敬
助教	小森　宏之	近本　　亮・田中　　洋 岩槻　政晃
特任助教		
ICU講師	蒲原　英伸	蒲原　英伸
ICU助教		
救急・総合診療部助教		
救急・総合診療部診療助手		
医局長	堀野　　敬	堀野　　敬
病棟医長	石河　隆敏	近本　　亮
外来医長	林　　尚子	田中　　洋
医員 専門修練医	田中　　洋・池田　　貯・深見　賢作・宮本　裕士 岩上　志朗[4]・赤星　慎一・田嶋ルミ子・増田　稔郎 鶴田　　豊・尾崎　宣之・長井　洋平・清田　礼孝 江藤弘二郎・江藤慎一郎・坂田　和也・坂本　慶太 杉原　栄孝・原田　和人・村田　飛鳥	宮本　裕士・岩上　志朗[4]・増田　稔郎・長井　洋平 今村　　裕・阿部　真也[4]・原田　和人・泉　　大輔 小澄　敬祐・髙城　克暢・徳永　竜馬・東　　孝暁 宮田　辰徳
大学院生	中原　　修・井上　光弘・岩槻　政晃・岡部　弘尚 井田　　智・今村　　裕・日吉　幸晴・佐藤　孝彦 平島浩太郎・古橋　　聡・辛島　龍一・太田尾　龍 佐藤　伸隆・齋藤　誠哉・蔵重　淳二・藏元　一崇 阿部　真也・木下　浩一・哈　　斯塔	井田　　智[5]・中原　　修・佐藤　孝彦・平島浩太郎 古橋　　聡・辛島　龍一・太田尾　龍・佐藤　伸隆 齋藤　誠哉・蔵重　淳二・木下　浩一・哈　　斯塔 田中　洋平・美馬　浩介・澤山　　浩・黒木　秀幸 志垣　博信・中川　茂樹
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	9名	10名
技術補佐		

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	林　　尚子　H2　Korea University Medical Center 岩上　志朗　H11　Seoul National University 馬場　祥史　H12　Dana-Farber Cancer Institute 林　　洋光　H13　Cleveland Clinic	馬場　祥史　H12　Dana-Farber Cancer Institute 林　　洋光　H13　Cleveland Clinic 日吉　幸晴　H14　National Institutes of Health 今村　　裕　H14　Dana-Farber Cancer Institute
国内留学	坂本　快郎　H10　九州がんセンター 石本　崇胤　H13　慶応大学 岩槻　政晃　H13　九大生医研 美馬　浩介　H17　九州大学消化器・総合外科	坂本　快郎　H10　九州がんセンター 石本　崇胤　H13　慶応大学 江藤弘二郎　H19　九州大学消化器・総合外科

	H23年4月　2011年	H24年4月　2012年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		別府　透[*1]
准教授	別府　透・石河　隆敏[*2]	石河隆敏[*2]・渡邊雅之
特任准教授		
講師	高森　啓史・渡邊　雅之	近本　亮・吉田　直矢
特任講師		
診療講師		
助教	近本　亮・宮本　裕士 馬場　祥史・岩槻　政晃	宮本　裕士・馬場　祥史 橋本　大輔・岩槻　政晃
特任助教	土居　浩一・生田　義明[*3] 石本　崇胤	生田　義明[*3]・坂本　快郎[*1] 石本　崇胤・林　洋光
ICU講師	蒲原　英伸	
ICU助教		
救急・総合診療部助教		
救急・総合診療部診療助手	新田　英利 井田　智	岩上　志朗・今井　克憲 新田　英利
医局長	宮本　裕士	近本　亮
病棟医長	近本　亮	吉田　直矢
外来医長	近本　亮	生田　義明
医員 専門修練医	坂本　快郎・中原　修・長井　洋平・今井　克憲 小澄　敬祐・東　孝暁・有馬　浩太・大内　繭子 甲斐田剛圭・清住　雄希・中村　健一	尾崎　宣之・清住　雄希・江藤　二男・糸山　明莉 北野　雄希・黒田　大介・玉置　裕香・中嶋　梨沙 松浦　光貢・辻　顕
大学院生	岡部　弘尚[*5]・岩上　志朗・齋藤　誠哉・蔵重　淳二 木下　浩一・哈　斯　塔・田中　洋平・美馬　浩介 澤山　浩・黒木　秀幸・志垣　博信・中川　茂樹 江藤弘二郎・坂田　和也・坂本　慶太・杉原　栄孝 原田　和人・村田　飛鳥	岡部　弘尚[*5]・田中　洋平・美馬　浩介・澤山　浩 黒木　秀幸・志垣　博信・中川　茂樹・江藤弘二郎 坂田　和也・坂本　慶太・杉原　栄孝・村田　飛鳥 原田　和人・泉　大輔・小澄　敬祐・髙城　克暢 徳永　竜馬・東　孝暁・宮田　辰徳
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	11名	11名
技術補佐	1名	2名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	坂本　快郎　H10　Korea University Anam Hospital 橋本　大輔　H12　Tampere University Hospital 林　洋光　H13　Cleveland Clinic 日吉　幸晴　H14　National Institutes of Health 今村　裕　H14　Dana-Farber Cancer Institute	近本　亮　H6　Seoul National University Bundang Hospital 宮本　裕士　H10　Seoul National University Bundang Hospital 橋本　大輔　H12　Seoul National University Bundang Hospital 林　洋光　H13　Seoul National University Bundang Hospital 今井　克憲　H13　Seoul National University Bundang Hospital 岡部　弘尚　H14　University of Pittsburgh 今村　裕　H14　Dana-Farber Cancer Institute
国内留学	増田　稔郎　H12　九州大学消化器・総合外科 宮田　辰徳　H20　九州大学消化器・総合外科 原田　和人　H19　がん研有明	井田　智　H14　九州大学消化器・総合外科 中村　健一　H21　九州大学消化器・総合外科 原田　和人　H19　がん研有明 蔵重　淳二　H16　九大生医研 美馬　浩介　H17　九大生医研

	H25年5月　2013年	H26年4月　2014年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授	別府　　透[*1]	別府　　透[*1]
准教授	石河　隆敏[*2]・渡邊　雅之	石河　隆敏[*2]
特任准教授		
講師	近本　　亮・吉田　直矢	近本　　亮・吉田　直矢・馬場　祥史
特任講師		
診療講師	馬場　祥史・橋本　大輔	橋本　大輔
助教	宮本　裕士 林　　洋光	宮本　裕士 林　　洋光
特任助教	坂本　快郎[*1]・岩上　志朗・石本　崇胤 今井　克憲・新田　英利・阿部　真也[*3]	坂本 快郎[*1]・岩上　志朗 新田　英利・日吉　幸晴[*3]
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部助教		辛島　龍一
救急・総合診療部診療助手	辛島　龍一・武山　秀晶 清水　健次	江藤弘二郎[*4]・杉原　栄孝[*4] 坂本　慶太[*4]
医局長	近本　　亮	吉田　直矢
病棟医長	吉田　直矢	馬場　祥史
外来医長	坂本　快郎	橋本　大輔
医員 専門修練医	糸山　明莉・内原　智幸・梅崎　直紀・織田　枝里 古閑　悠輝・塚本　雅代・問端　　輔・村端　秀映 八木　泰佑・山尾　宣暢	坂田 和也[*4]・武山 秀晶[*1]・伊東山瑠美・岡留　一雄 坂本　悠樹・大徳　暢哉・中尾　陽佑・山下　晃平 遊佐　俊彦
大学院生	澤山　　浩・黒木　秀幸・中川　茂樹・江藤弘二郎 坂田　和也・坂本　慶太・杉原　栄孝・原田　和人 村田　飛鳥・泉　　大輔・小澄　敬祐・髙城　克暢 徳永　竜馬・東　　孝暁・宮田　辰徳・井上　梨沙 有馬　浩太・大内　繭子・甲斐田剛圭・清住　雄希 中村　健一	原田　和人・泉　　大輔・小澄　敬祐・髙城　克暢 徳永　竜馬・東　　孝暁・宮田　辰徳・甲斐田剛圭 清住　雄希・中村　健一・大内　繭子・有馬　浩太 井上　梨沙・三宅　慧輔・山村　謙介・江藤　二男 辻　　顕・黒田　大介・北野　雄希・糸山　明莉 玉置　裕香
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	10名	10名
技術補佐	2名	3名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	岡部　弘尚　H14　University of Pittsburgh 美馬　浩介　H17　Dana-Farber Cancer Institute	岩上　志朗　H11　Seoul National University Bundang Hospital 岩槻　政晃　H13　Seoul National University Bundang Hospital 石本　崇胤　H13　Duke-National University of Singapore 今井　克憲　H13　Paul Brousse Hospital, France 今村　　裕　H14　Seoul National University Bundang Hospital 岡部　弘尚　H14　University of Pittsburgh 美馬　浩介　H17　Dana-Farber Cancer Institute 中川　茂樹　H18　Ichan school of medicine at Mount Sinai
国内留学	日吉　幸晴　H14　九州大学消化器・総合外科 蔵重　淳二　H16　九大生医研 志垣　博信　H18　がん研有明 村田　飛鳥　H19　11月～がん研有明病院 宮田　辰徳　H20　厚労省 糸山　明莉　H22　九州大学消化器・総合外科	今村　　裕　H14　九州大学消化器・総合外科 井田　　智　H14　がん研有明 志垣　博信　H18　がん研有明 村田　飛鳥　H19　静岡がんセンター 宮田　辰徳　H20　厚労省 内原　智幸　H23　九州大学消化器・総合外科

	H27年4月　2015年	H28年4月　2016年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授	別府　透[*1]	
准教授	石河 隆敏[*2]	石河　隆敏・近本　亮[*6]
特任准教授		山下　洋市[*1]
講師	近本　亮・吉田　直矢・馬場　祥史	吉田　直矢・坂本　快郎・馬場　祥史
特任講師		
診療講師	橋本大輔	橋本　大輔
助教	宮本　裕士・岩槻　政晃 今井克憲	宮本　裕士・岩槻　政晃 今井　克憲
特任助教	坂本 快郎[*1]・増田　稔郎 藏重 淳二[*3]・原田　和人	澤山　浩[*1]・美馬　浩介 中川 茂樹[*3]
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部助教	辛島龍一	辛島　龍一
救急・総合診療部診療助手	志垣　博信・髙城 克暢[*4] 東　孝暁[*4]	
医局長	坂本快郎	岩槻政晃
病棟医長	岩槻政晃	今井　克憲
外来医長	今井克憲	坂本快郎
医員 専門修練医	美馬　浩介・徳永竜馬[*4]・秋山　貴彦・上村　紀雄 北村　文優・野元　大地・丸野　正敬	木下　浩一・徳永　竜馬・甲斐田剛圭[*4]・中村　健一[*4] 大内 繭子[*4]・八木 泰佑[*4]・問端　輔[*4]・梅崎 直紀[*4] 内原 智幸[*4]・山尾 宣暢[*4]・松村　和季・山根　大侍 森永　剛司
大学院生	泉　大輔・甲斐田剛圭・中村　健一・大内　繭子 有馬　浩太・井上　梨沙・宮田　辰徳・清住　雄希 山村　謙介・江藤　二男・黒田　大介・北野　雄希 玉置　裕香・三宅　慧輔・武山　秀晶・辻　顕 糸山　明莉・内原　智幸・梅崎　直紀・織田　枝里 古閑　悠輝・塚本　雅代・問端　輔・八木　泰佑 山尾　宣暢	宮田　辰徳・有馬　浩太・清住　雄希・山村　謙介 江藤　二男・黒田　大介・北野　雄希・三宅　慧輔 武山　秀晶・辻　顕・糸山　明莉・玉置　裕香 古閑　悠輝・塚本　雅代・織田　枝里・安田　忠仁 Rebecca Kalikawe 伊東山瑠美・岡留　一雄・坂本　悠樹・大徳　暢哉 中尾　陽佑・山下　晃平・遊佐　俊彦
外国人客員研究員/研究生		
事務補佐	10名	10名
技術補佐	3名	2名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	石本　崇胤　H13　Duke-National University of Singapore 今井　克憲　H13　Paul Brousse Hospital, France 新田　英利　H13　10月～ Paul Brousse Hospital, France 美馬　浩介　H17　Dana-Farber Cancer Institute 中川　茂樹　H18　Ichan school of medicine at Mount Sinai 原田　和人　H19　MD Anderson cancer center 宮本　裕士　H10　University of Southern California, Norris Comprehensive Cancer Center 小澄　敬祐　H20　Dana-Farber Cancer Institute 増田　稔郎　H12　Mayo Clinic　他	東　孝暁　H20　Ichan school of medicine at Mount Sinai 泉　大輔　H20　Baylor university 新田　英利　H13　Paul Brousse Hospital, France 小澄　敬祐　H20　Dana-Farber Cancer Institute 原田　和人　H19　MD Anderson cancer center 宮本　裕士　H10　University of Southern California, Norris Comprehensive Cancer Center 増田　稔郎　H12　Mayo Clinic　他
国内留学	岡部　弘尚　H14　九州大学消化器・総合外科 山下　晃平　H24　九州大学消化器・総合外科 井田　智　H14　がん研有明病院 今村　裕　H14　がん研有明病院 日吉　幸晴　H14　がん研有明病院 江藤弘二郎　H19　がん研有明病院 村田　飛鳥　H19　静岡がんセンター 宮田　辰徳　H20　国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED） 清住　雄希　H21　厚生労働省健康局　がん・疾病対策課	藏重　淳二　H16　九州大学消化器・総合外科 丸野　正敬　H25　九州大学消化器・総合外科 井田　智　H14　がん研有明病院 今村　裕　H14　がん研有明病院 日吉　幸晴　H14　がん研有明病院 江藤弘二郎　H19　がん研有明病院 徳永　竜馬　H20　がん研有明病院 清住　雄希　H21　厚生労働省健康局　がん・疾病対策課

	H29年4月　2017年	H30年4月　2018年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		
准教授	石河　隆敏・近本　亮[*6]	石河　隆敏・近本　亮[*6]・山下　洋市
特任准教授	山下 洋市[*1]	吉田　直矢 石本　崇胤
講師	吉田　直矢・宮本　裕士・馬場　祥史	宮本　裕士
特任講師	石本　崇胤	馬場　祥史
診療講師	橋本　大輔	
助教	岩槻　政晃・今井　克憲 岡部　弘尚	今井　克憲・岩槻　政晃・林　洋光 岡部　弘尚・日吉　幸晴
特任助教	日吉 幸晴[*1] 中川 茂樹[*3]	岩上　志朗 中川 茂樹[*3]
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部助教	辛島　龍一	辛島　龍一
救急・総合診療部診療助手		
医局長	岩槻　政晃	馬場　祥史
病棟医長	中川　茂樹	林　洋光
外来医長	今井　克憲	中川　茂樹
医員 専門修練医	澤山　浩・黒田 大介[*4]・北野 雄希[*4]・伊東山瑠美[*4] 岡留 一雄[*4]・坂本 悠樹[*4]・大徳 暢哉[*4]・中尾 陽佑[*4] 山下 晃平[*4]・遊佐 俊彦[*4]・木下翔太郎・佐藤　寛紀 堀之内　誠・白石　裕大・原　淑大・加藤梨佳子 松本　嵩史・松本　千尋	長井　洋平・江藤弘二郎・宮田　辰徳・清住　雄希 秋山 貴彦[*4]・上村　紀雄[*4]・北村 文優[*4]・野元 大地[*4] 小川　大輔・前田　裕斗・光浦　智証・森戸　淳 湯本　信成・安田　忠仁
大学院生	有馬　浩太・武山　秀晶・清住　雄希・江藤　二男 宮田　辰徳・園田　明莉・三宅　慧輔・古閑　悠輝 八木　泰佑・問端　輔・梅崎　直紀・内原　智幸 山尾　宣暢・塚本　雅代・織田　枝里 Rebecca Kalikawe 夏　跃超・山村　謙介・安田　忠仁・秋山　貴彦 上村　紀雄・北村　文優・野元　大地・丸野　正敬	古閑　悠輝・八木　泰佑・梅崎　直紀・内原　智幸 山尾　宣暢・織田　枝里・伊東山瑠美・岡留　一雄 坂本　悠樹・大徳　暢哉・中尾　陽佑・山下　晃平 遊佐　俊彦 Rebecca Kalikawe 夏　跃超・布　魯　克・松村　和季・森永　剛司 山根　大侍・劉　洋・付　凌峰・胡　熙晨
外国人客員研究員/研究生	布　魯　克・付　凌　峰 高　峰	Mohamed Borghan Hatem Abdel Monem El-mezayen
事務補佐	9名	10名
技術補佐	3名	4名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	東　孝暁　H20　Ichan school of medicine at Mount Sinai 泉　大輔　H20　Baylor university 徳永　竜馬　H20　University of Southern California, Norris Comprehensive Cancer Center 山村　謙介　H18　Baylor university 新田　英利　H13　Paul Brousse Hospital, France 小澄　敬祐　H20　Dana-Farber Cancer Institute 原田　和人　H19　MD Anderson cancer center	徳永　竜馬　H20　University of Southern California, Norris Comprehensive Cancer Center 山村　謙介　H18　Baylor university 北野　雄希　H22　Paul Brousse Hospital, France 小澄　敬祐　H20　Dana-Farber Cancer Institute 原田　和人　H19　MD Anderson cancer center 有馬　浩太　H21　Dana-Farber Cancer Institute 岩槻　政晃　H13　MD Anderson cancer center
国内留学	今村　裕　H14　がん研有明病院 井田　智　H14　がん研有明病院 江藤弘二郎　H19　がん研有明病院 問端　輔　H23　がん研有明病院 中村　健一　H21　静岡がんセンター 丸野　正敬　H25　厚生労働省	井田　智　H14　がん研有明病院 今村　裕　H14　がん研有明病院 問端　輔　H23　がん研有明病院 中村　健一　H21　静岡がんセンター 松本　嵩史　H27　九州大学大学院消化器・総合外科 丸野　正敬　H25　厚生労働省健康局　がん・疾病対策課

	H31年4月　2019年	R2年4月　2020年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授		
准教授	石河　隆敏・近本　亮[*6]・山下　洋市	山下　洋市
特任准教授	吉田　直矢 石本　崇胤	吉田　直矢・馬場　祥史 石本　崇胤
講師	宮本　裕士	宮本　裕士
特任講師	馬場　祥史	
診療講師	林　　洋光	林　　洋光
助教	今井　克憲・岩槻　政晃 日吉　幸晴	岩上　志朗・今井　克憲 岩槻　政晃・澤山　　浩
特任助教	岩上　志朗・長井　洋平 山村　謙介	小川　克大・中村　健一 北野　雄希
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部助教	武山　秀晶	武山　秀晶
救急・総合診療部診療助手	山尾　宣暢	中尾　陽佑
医局長	林　　洋光	今井　克憲
病棟医長	日吉　幸晴	澤山　　浩
外来医長	岩上　志朗	中村　健一
医員 専門修練医	江藤弘二郎・原田　和人・宮田　辰徳・徳永　竜馬 東　　孝暁・武末　亨[*4]・松村　和季[*4]・森永 剛司[*4] 山根 大侍[*4]・足立　優樹・大渕　　昂・金光　紘介 田尻　拓哉・堀野　大智・松石　　梢・松原　顕太	甲斐田剛圭・問端　　輔・坂本　悠樹・伊東山瑠美 大徳　暢哉・遊佐　俊彦・加藤梨佳子[*4]・原　淑大[*4] 堀之内 誠[*4]・松本 千尋[*4]・木下翔太郎[*4]・佐藤 寛紀[*4] 白石 裕大[*4]・松本 嵩史[*4]・大町　一樹・大山　真英 小野明日香・耕　　佳徹・谷崎　卓実・松岡　隼平
大学院生	園田　明莉・織田　枝里・内原　智幸・伊東山瑠美 岡留　一雄・坂本　悠樹・大徳　暢哉・中尾　陽佑 山下　晃平・遊佐　俊彦・安田　忠仁・秋山　貴彦 上村　紀雄・北村　文優・野元　大地 Rebecca Kalikawe 夏　　跃超・布　鲁　克・付　　凌峰・胡　　熙晨 魏　　峰・劉　　洋	秋山　貴彦・上村　紀雄・北村　文優・野元　大地 丸野　正敬・松村　和季・森永　剛司・山根　大侍 安田　忠仁・布　鲁　克・付　　凌峰・胡　　熙晨 魏　　峰・柳　　昭・娄　　美月
外国人客員研究員/研究生	Hatem Abdel Monem El-mezayen	
事務補佐	10名	8名
技術補佐	4名	4名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	北野　雄希　H22　Paul Brousse Hospital, France 有馬　浩太　H21　Dana-Farber Cancer Institute 宮田　辰徳　H20　Cleveland clinic 馬場　祥史　H12　Brigham and Women's Hospital	宮田　辰徳　H20　Cleveland clinic
国内留学	井田　　智　H14　がん研有明病院 今村　　裕　H14　がん研有明病院 中川　茂樹　H18　がん研有明病院 清住　雄希　H21　がん研有明病院 問端　　輔　H23　がん研有明病院 中村　健一　H21　静岡がんセンター 梅﨑　直紀　H23　静岡がんセンター 八木　泰佑　H23　静岡がんセンター	井田　　智　H14　がん研有明病院 今村　　裕　H14　がん研有明病院 日吉　幸晴　H14　がん研有明病院 中川　茂樹　H18　がん研有明病院 泉　　大輔　H20　がん研有明病院 清住　雄希　H21　がん研有明病院 梅﨑　直紀　H23　静岡がんセンター 八木　泰佑　H23　静岡がんセンター

	R3年4月　2021年	R4年5月　2022年
教授	馬場　秀夫	馬場　秀夫
特任教授	吉田 直矢[*1]	吉田 直矢[*1]
准教授	山下　洋市	宮本　裕士
特任准教授	馬場　祥史 石本　崇胤	馬場　祥史 石本　崇胤
講師	宮本　裕士	
特任講師		
診療講師	今井　克憲・岩槻　政晃・林　　洋光	岩槻　政晃・林　　洋光
助教	岩上　志朗 澤山　　浩	岩上　志朗・大内　繭子 塚本　雅代
特任助教	美馬　浩介・中川　茂樹・江藤弘二郎 原田　和人	新田　英利・美馬　浩介・小川　克大・中川　茂樹 江藤弘二郎・小澄　敬祐・宮田　辰徳
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部助教	武山　秀晶	武山　秀晶
救急・総合診療部診療助手		
医局長	原田　和人	中川　茂樹
病棟医長	中川　茂樹	江藤弘二郎
外来医長	澤山　　浩	美馬　浩介
医員 専門修練医	甲斐田剛圭・玉置　裕香・問端　　輔・小川　大輔[*4] 前田　裕斗[*4]・光浦　智証[*4]・森戸　　淳[*4]・湯本　信成[*4] 加藤　萌子・河田　彩音・酒匂　照生・椿原　拡樹 中村　　尋・久野　祐樹	問端　　輔・足立　優樹[*4]・大渕　　昂[*4]・金光　紘介[*4] 田尻 拓哉[*4]・堀野 大智[*4]・河田　彩音・内藤　貴一 上村　将太
大学院生	丸野　正敬・松村　和季・森永　剛司・山根　大侍 武末　　亨・原　　淑大・堀之内　誠・松本　千尋 木下翔太郎・佐藤　寛紀・白石　裕大・松本　嵩史 布　魯　克・付　　凌峰・胡　　熙晨・魏　　峰 張　　峻・柳　　昭・娄　　美月・武　　曦昱	丸野　正敬・武末　　亨・佐藤　寛紀・白石　裕大 原　　淑大・松本　嵩史・松本　千尋・小川　大輔 前田　裕斗・光浦　智証・森戸　　淳・湯本　信成 胡　　熙晨・魏　　峰・張　　峻・柳　　昭 娄　　美月・武　　曦昱・佟　　依霖・王　　浩林 王　　懐涛
外国人客員研究員/研究生	蘭　　川	張　衛麗雲
事務補佐	8名	11名
技術補佐	4名	2名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	井田　　智　H14　Karolinska University Hospital 宮田　辰徳　H20　Cleveland clinic 山尾　宣暢　H23　David Geffen School of Medicine 内原　智幸　H23　Doke-NUS medical school 岡留　一雄　H24　Brigham and Women's Hospital 山下　晃平　H24　MD anderson Cancer Center	山尾　宣暢　H23　David Geffen School of Medicine 内原　智幸　H23　Doke-NUS medical school 岡留　一雄　H24　Brigham and Women's Hospital 山下　晃平　H24　MD anderson Cancer Center 中尾　陽祐　H24　Paul Brousse Hospital 安田　忠仁　H28　Indiana University School of Medicine
国内留学	今村　　裕　H14　がん研有明病院 日吉　幸晴　H14　がん研有明病院 泉　　大輔　H20　がん研有明病院 北野　雄希　H22　がん研有明病院 大徳　暢哉　H24　がん研有明病院 梅﨑　直紀　H23　静岡がんセンター 八木　泰佑　H23　静岡がんセンター	井田　　智　H14　がん研有明病院 今村　　裕　H14　がん研有明病院 日吉　幸晴　H14　がん研有明病院 北野　雄希　H22　がん研有明病院 大徳　暢哉　H24　がん研有明病院 松本　千尋　H27　九州大学別府病院

	R5年4月　2023年	R6年4月　2024年
教授	馬場　秀夫	岩槻　政晃（7月～）
特任教授	石本　崇胤	
准教授	宮本　裕士	宮本　裕士
特任准教授	馬場　祥史 岩槻　政晃	馬場　祥史 岩槻　政晃（～6月）
講師	林　　洋光	林　　洋光
特任講師		
診療講師	井田　　智・岡部　弘尚・日吉　幸晴	井田　智・岡部　弘尚・日吉　幸晴
助教	大内　繭子 伊東山瑠美	大内　繭子 伊東山瑠美
特任助教	美馬　浩介・中川　茂樹 江藤弘二郎・小澄　敬祐	中川　茂樹[*7]・江藤弘二郎[*7]・原田　和人[*3](10月～) 小澄　敬祐[*7]・北野　雄希[*3]・問端　　輔[*3](～9月)
ICU講師		
ICU助教		
救急・総合診療部 助教	武山　秀晶 小川　克大	小川　克大
救急・総合診療部 診療助手		
医局長	江藤弘二郎	江藤弘二郎
病棟医長	小澄　敬祐	小澄　敬祐
外来医長	中川　茂樹	中川　茂樹
医員 専門修練医	問端　　輔・耕　佳徹[*4]・大町　一樹[*4]・小野明日香[*4] 谷﨑　卓実[*4]・荒木　健吾・小野　浩輔・下川　琢也 中島　　凌	原　　淑大・前田　裕斗[*4]・酒匂　照生[*4]・椿原　拡樹[*4] 中村　　尋[*4]・久野　祐樹[*4]・東　　陽子・阿部　禎人 大村　亮太・式地　優樹・島本　将希・鈴木裕起子 高田　一登・高橋　啓太・松本　将弥
大学院生	武末　　亨・白石　裕大・原　　淑大・松本　嵩史 松本　千尋・小川　大輔・前田　裕斗・光浦　智証 森戸　　淳・湯本　信成・足立　優樹・大渕　　昂 金光　紘介・田尻　拓哉・堀野　大智・胡　　熙晨 魏　　峰・張　　峻・柳　　昭・娄　　美月 武　　曦昱・佟　　依霖・王　　浩林・王　　懐涛	小川　大輔・光浦　智証・湯本　信成・足立　優樹 金光　紘介・田尻　拓哉・堀野　大智・耕　　佳徹 谷崎　卓実・武　　曦昱・張　衛麗雲・王　　浩林 董　　翰晨・韓　　錦濤・孫　　宇軒・丁　　銘 呉　　霄漢・宋　　銘洋
外国人客員研究員 /研究生	李　　展韜・繆　　鵬宇 張　衛麗雲・李　　文峰	
事務補佐	7名	7名
技術補佐	2名	2名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	山尾　宣暢　H23　David Geffen School of Medicine 内原　智幸　H23　Doke-NUS medical school 岡留　一雄　H24　Brigham and Women's Hospital 山下　晃平　H24　MD anderson Cancer Center 中尾　陽祐　H24　Paul Brousse Hospital 安田　忠仁　H28　Indiana University School of Medicine	中尾　陽祐　H24　Paul Brousse Hospital
国内留学	今村　　裕　H14　がん研有明病院 宮田　辰徳　H20　がん研有明病院 秋山　貴彦　H25　がん研有明病院 森戸　　淳　H28　がん研有明病院 松本　千尋　H27　九州大学別府病院 大渕　　昂　H30　九州大学別府病院	今村　　裕　H14　がん研有明病院 宮田　辰徳　H20　がん研有明病院 秋山　貴彦　H25　がん研有明病院 森戸　　淳　H28　がん研有明病院 松本　千尋　H27　九州大学別府病院 大渕　　昂　H30　九州大学別府病院 大町　一樹　H31　九州大学別府病院

	R7年4月　2025年
教授	岩槻　政晃
特任教授	宮本　裕士[7]
准教授	林　　洋光
特任准教授	
講師	井田　　智
特任講師	
診療講師	岡部　弘尚・日吉　幸晴
助教	江藤弘二郎・原田　和人 小澄　敬祐
特任助教	宮田　辰徳[7]・有馬　浩太[7]・北野　雄希[3] 山尾　宣暢[3]・山下　晃平[7]
ICU講師	
ICU助教	
救急・総合診療部助教	小川　克大
救急・総合診療部診療助手	久野　祐樹[4]
医局長	小澄　敬祐
病棟医長	宮田　辰徳
外来医長	有馬　浩太
医員 専門修練医	秋山　貴彦・木下翔太郎・白石　裕大・松本　千尋 小川　大輔・河田　彩音・内藤　貴一・上村　将太 笹岡　保希・島崎　雅士・高倉　　徹・成富　未果 福司山裕貴・森　　大志・山口　将也・吉田　実奈
大学院生	光浦　智証・足立　優樹・金光　紘介・堀野　大智 耕　　佳徹・谷崎　卓実・酒匂　照生・椿原　拡樹 中村　　尋・張　衛麗雲・王　　浩林・董　　翰晨 韓　　錦濤・孫　　宇軒・丁　　銘・呉　　霄漢 宋　　銘洋
外国人客員研究員/研究生	
事務補佐	7名
技術補佐	2名

*1) 消化器癌集学的治療学寄附講座　*2) 総合臨床研修センター　*3) 地域専門医療推進学寄附講座、専門医療実践学寄附講座（H28～）、地域医療ネットワーク実践学寄附講座（H31～）
*4) 医員および大学院生　5) 研究生　*6) 医療の質・安全管理部

海外留学	松本　嵩史　H27　Paul Brousse Hospital
国内留学	今村　　裕　H14　がん研有明病院 中尾　陽祐　H24　がん研有明病院 森戸　　淳　H28　がん研有明病院 前田　裕斗　H28　がん研有明病院 大渕　　昂　H30　九州大学別府病院 大町　一樹　H31　九州大学別府病院

令和７年度　新入局員紹介

笹岡　保希
Yasuki Sasaoka

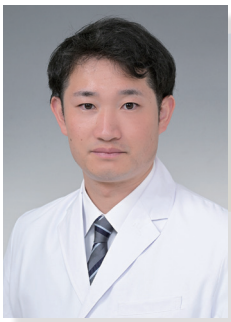
兵庫医科大学　2023年卒
臨床研修：熊本中央病院

熊本の消化器外科をさらに盛り上げていけるように精一杯頑張ります。よろしくお願いいたします。

島﨑　雅士
Masashi Shimasaki

信州大学　2023年卒
臨床研修：済生会熊本病院

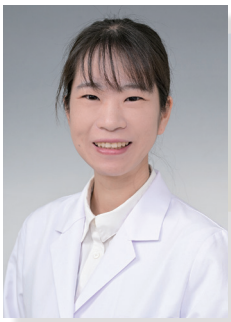
臨床と研究の両面から癌治療に貢献できるよう精進します。まずは自分の健康のためにダイエット頑張ります。



髙倉　　徹
Toru Takakura

秋田大学　2023年卒
臨床研修：諏訪赤十字病院

慣れない部分が多くご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、一人前の消化器外科医になれるように頑張りますのでよろしくお願いします。



成富　未果
Mika Naritomi

熊本大学　2023年卒
臨床研修：熊本赤十字病院

患者様に寄り添える医師を目指し、日々の研修に励んでいます。緊急手術が大好きです。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

福司山裕貴
Hirotaka Fukushiyama

兵庫医科大学　2023年卒
臨床研修：人吉医療センター

熊本大学で研鑽を積めることに感謝し、諸先輩方のように医療に貢献できるように努力して参ります。よろしくお願い致します

森　　太志
Daiji Mori

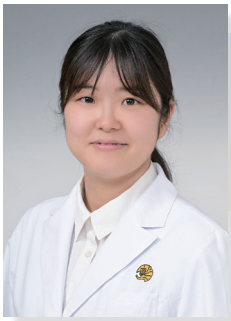
長崎大学　2023年卒
臨床研修：済生会熊本病院

「清く、正しく、美しく。」をモットーに、誠実な姿勢で診療に臨み、日々成長してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

山口　将也
Shoya Yamaguchi

熊本大学　2023年卒
臨床研修：済生会熊本病院

毎日患者さんと向き合い診療に情熱を注ぐ諸先輩方の背中を見ながら、自分自身もそうなれるように日々努力し成長したいと思います



吉田　実奈
Mina Yoshida

熊本大学　2023年卒
臨床研修：熊本大学病院

7人の同期にも恵まれ、4月からみんなで協力しながら日々の診療を行なっています。大学病院で先輩方から日常業務や手術手技等を学びこれからの診療に生かしていきたいと思います。

年　報

20年の歩み※

※2023年（令和5）までは馬場教授退任記念誌に詳しく記載しているため、
主な写真を掲載し、2024年を追加した。

2005 平成17年度

花見

ボーリング大会

オーデンでの飲み会

馬場教授の投球

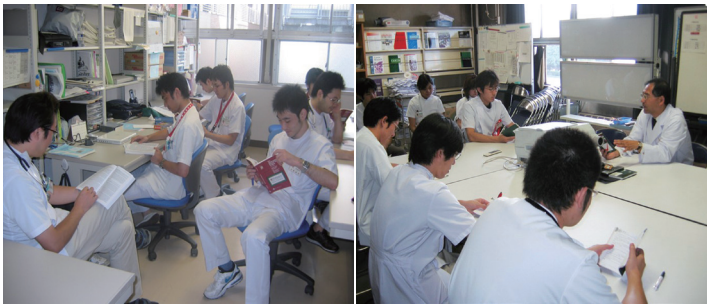
医局旅行

忘年会

仕事納め式

2006 平成18年度

開講記念会



後期臨床研修医に対する早朝講義

第2回熊本大学　内視鏡下結紮・縫合手技 WS

パールラインマラソン

2007 平成19年度

仕事始め式

バールラインマラソン

スタート前

マラソン後の食事

ゴール後の馬場教授と井田先生

オーデンにて

医局旅行

本田先生送別会

宮成先生と林先生

バス内での馬場教授

2008 平成20年度


花見


抄読会


手術体験キッズセミナー


パールラインマラソン


医局対抗野球@福岡ドーム


医局旅行

忘年会


吉野ケ里遺跡にて


帰りのバス内での堀野先生

2009 平成21年度

仕事始め式

医局歓迎会

大腸癌市民公開講座

熊本市医師会登ろう会

Prof.Andre講演

胃癌市民公開講座

送別会

医局旅行

2010 平成22年度

東病棟初めてのカンファ

医局歓迎会

制癌剤適応研究会

制癌剤適応研究会懇親会

医局旅行

外科学会懇親会

市民公開講座

Prof Bull 講演会

新年会

送別会

2011 平成23年度

歓迎会

ヤフードーム観戦

熊本大腸癌地域連携研究会

医局旅行　指宿

消化器癌集学的治療講座
別府　透　教授就任祝賀会

天草パールラインマラソン

英会話風景

送別会

馬場教授自宅にて

忘年会

2012 平成24年度

仕事始め式

歓迎会

天草パールラインマラソン

送別会

医局旅行　湯布院

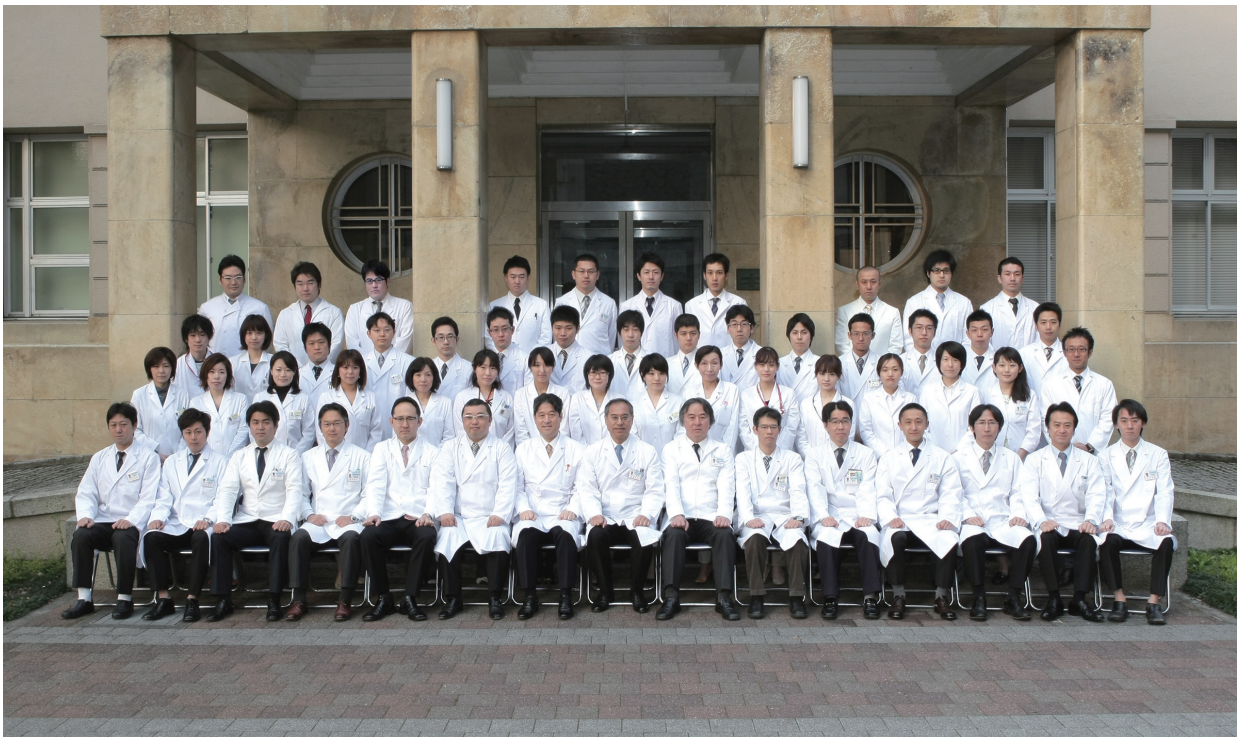
胃病態機能研究会

食道疾患症例検討会

ブラックジャックセミナー

忘年会

2013 平成25年度




歓迎会


冬季研究発表会

パープルリボン活動


ブラックジャックセミナー


熊本外科集談会


医局対抗サッカー


天草パールラインマラソン


石本先生送別会

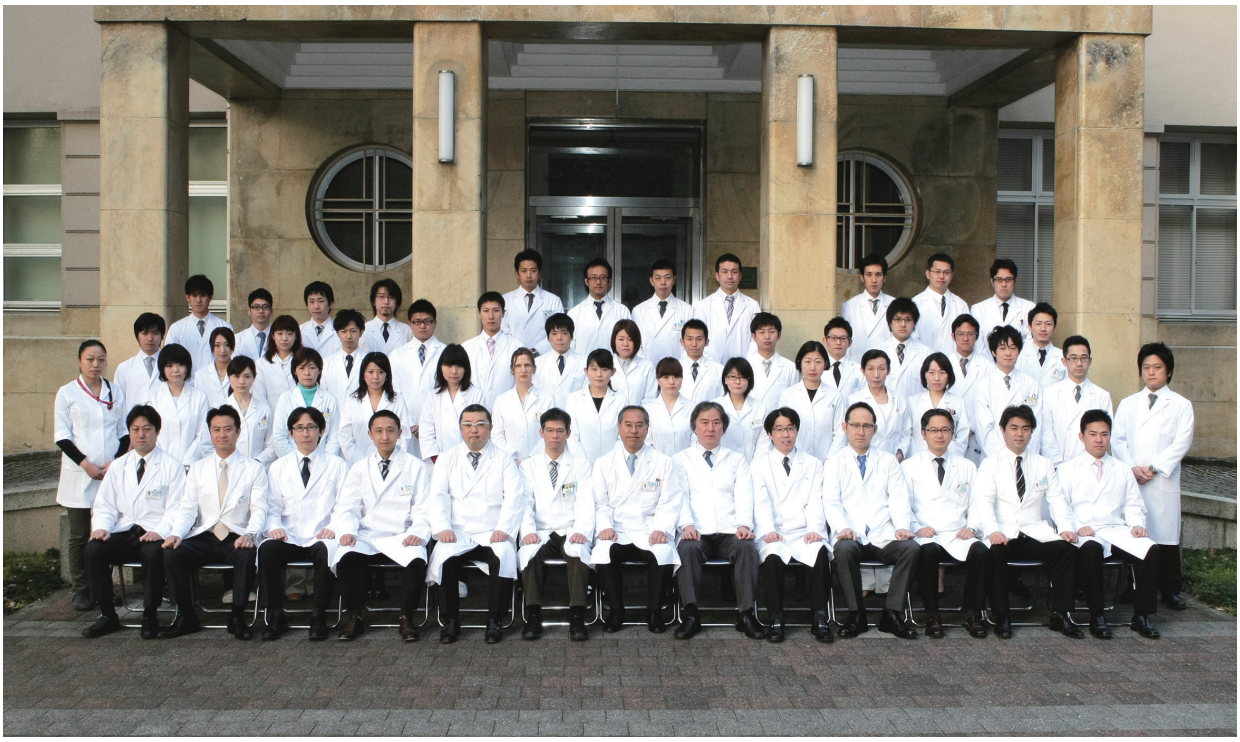
渡邊雅之先生を送る会


医局旅行 厳流島


仕事納め式


医局送別会

2014 平成26年度



医局紹介写真

歓迎会

野球観戦

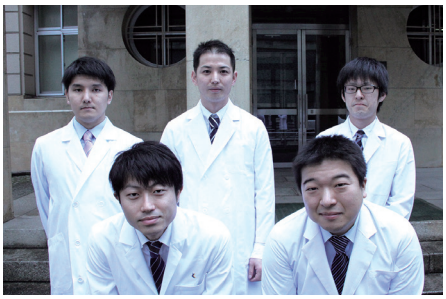
パールラインマラソン

医局旅行

馬場教授宅にてBBQ

前原先生講演会@八代

2015 平成27年度



新入局員

医局旅行

AACR

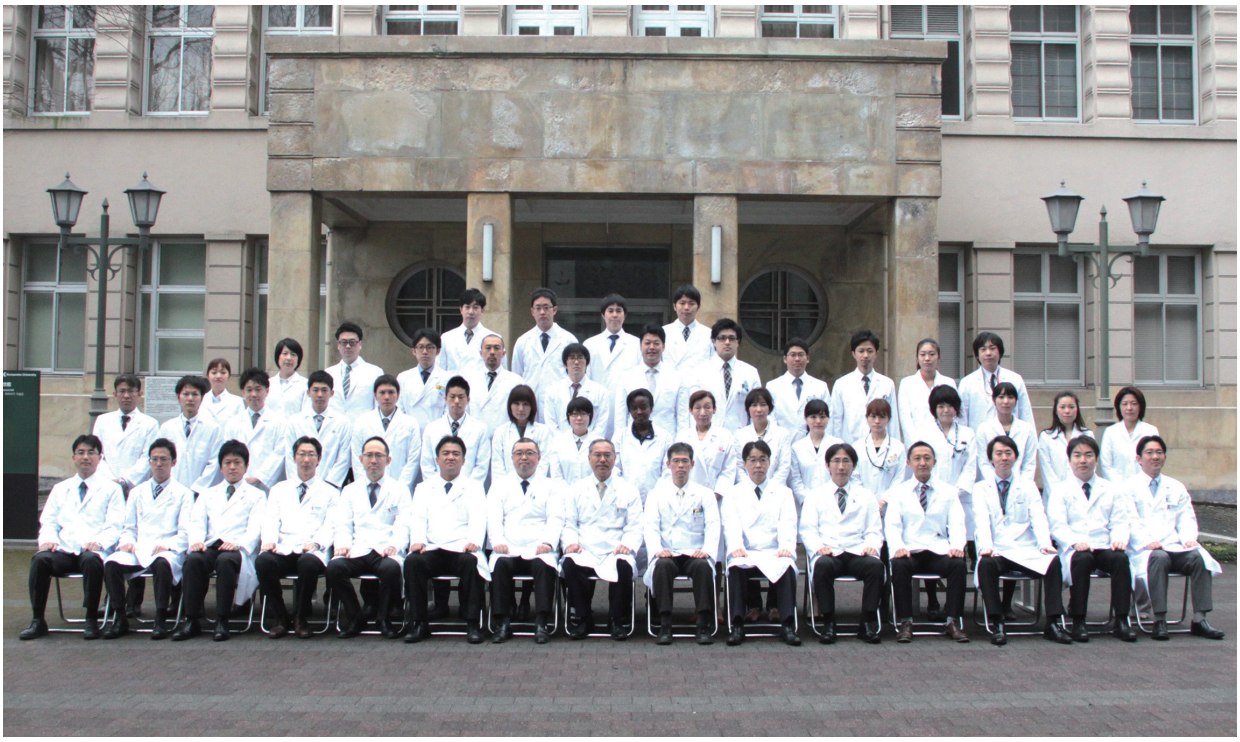
ブラックジャックセミナー

BBQ

仕事納め式

忘年会

2016 平成28年度




新入局員


早朝講義


医局説明会

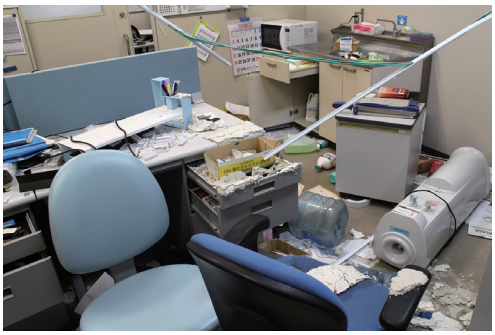

医局対抗サッカー

新人芸だし


教授宅 BBQ


抄読会

忘年会


熊本地震


手術風景

医局旅行

2017 平成29年度

新入局員

医局歓迎会

医局旅行

新人芸だし

教授宅 BBQ

学生実習

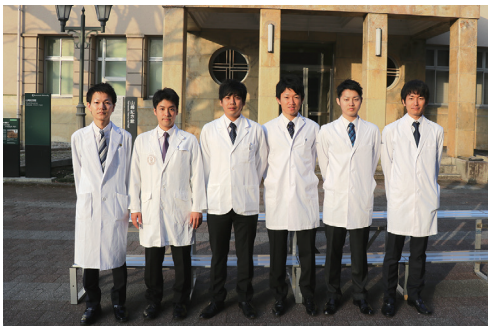
馬場教授５９歳誕生日

パールラインマラソン

ブラックジャックセミナー

クリクラ懇親会

2018 平成30年度



新入局員

新人芸だし

医局説明会

医局旅行

BBQ

ブラックジャックセミナー

馬場教授還暦祝い

パールラインマラソン

忘年会

2019

平成31年度 / 令和元年

新入局員

早朝講義

新人歓迎会

春季研究発表会

ブラックジャックセミナー

医局旅行

ブラックジャックセミナー高校生

開講記念講演会

忘年会

BBQ

外科術後管理検討会

年度納め

2020 令和2年度

医局説明会

近本先生教授就任祝賀会

年始め式

医局送別会

2021 令和3年度

医局歓迎式

医局説明会

開講記念会

外科学会プロモーションビデオ撮影

仕事始め式

送別会

関連病院会議

仕事納め式

2022 令和4年度


年度始め式


歓迎会


医局説明会

外科集談会


医局旅行


100周年記念講演会


研修医腹腔鏡セミナー


忘年会


仕事始め式


医局説明会


外科学会学生慰労会

2023 令和5年度

歓迎会

仕事納め式

消化器外科学会懇親会　函館

外科学会懇親会

医局旅行

スタッフ食事会

忘年会

医局送別会

馬場教授最後挨拶

馬場秀夫教授最終講義

膵疾患フォーラム

馬場教授最終回診

馬場秀夫教授退任記念祝賀会

2024 令和6年度


癌病態治療研究会花火


ハンズオンセミナー


ハンズオンセミナー懇親会


癌病態治療研究会


医局説明会


医局 BBQ

熊本手術手技フォーラム


岩槻教授就任祝賀会・開講２０周年祝賀会


九州肝臓外科


3月集合写真

2024

4月1日　年度始め式
新入医局員10名：髙津 研翔 君、東　陽子 君、安部 禎人 君、大村 亮太 君、式地 優樹 君、島本 将希 君、鈴木 裕紀子 君、髙田 一登 君、髙橋 啓太 君、松本 将弥 君


第33回癌病態治療研究会

4月11日　イベント　医局歓迎会（於：熊本ホテルキャッスル）

4月19日　イベント　日本外科学会および消化器外科懇親会　＠名古屋

5月7日　人材確保委員会

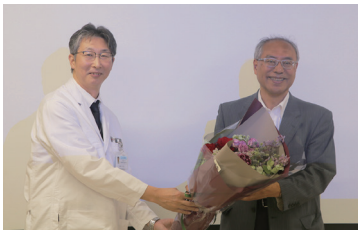
5月16日　学会　第33回日本癌病態治療研究会（於：唐津シーサイドホテル　～17日）

5月22日　講演会　九州・沖縄 Expert Seminar ～肝臓手術における止血マネジメント～（WEB 開催）
『ロボット支援肝切除術における止血コントロール』
林　洋光 先生（熊本大学病院 消化器外科学 講師）
『腹腔鏡下肝切除術における止血コントロール』
戸島 剛男 先生（九州大学大学院 消化器・総合外科 講師）
『低侵襲肝胆膵手術の現状と将来展望』
若林　剛 先生（上尾中央総合病院 外科 院長補佐　肝胆膵疾患先進治療センター長 診療部外科長）

6月4日　講演会　大腸がん薬物療法2024 in 九州（WEB 開催）
『大腸がん後方ライン治療のエビデンス』
宮本　裕士　先生（熊本大学大学院生命科学研究部　消化器外科学講座　准教授）
『FTD/TPI+BEV の使いどころとマネジメントのコツ』
釆田 志麻 先生（熊本赤十字病院　緩和ケア科　部長）

6月21日　講演会　胃癌専門医が語る！胃癌薬物療法セミナー（WEB 開催）
『胃癌一次治療戦略：患者さんに届けるべき治療とは』
仁科 智裕 先生（国立病院機構 四国がんセンター 院長補佐 兼 がんゲノム医療センター 部長）
『胃癌治療の実際』
井田 智 先生（熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学 診療講師）
有上 貴明 先生（鹿児島大学病院 消化器センター 消化器外科 講師）

6月28日　馬場 秀夫先生　一般財団法人化学及血清療法研究所　理事長就任


馬場教授退官挨拶

7月1日　岩槻政晃教授就任


ハンズオンセミナー

7月6日　イベント　ハンズオンセミナー（於：臨床研究棟７階）

7月18日　イベント　消化器外科学会懇親会　＠小倉

7月19日　講演会　Meet the Professor：Pancreas Cancer（於：山崎記念館）
『食道癌における腸内細菌と腫瘍免疫』
小澄 敬祐 先生（熊本大学病院　消化器癌先端治療開発学寄附講座　特任助教）
『Pancreas Cancer：The Dawning of a New Era』
Jeffrey Drebin（Department of Surgery, Memorial Sloan Kettering Cancer Center、アメリカ外科学会　会長）

7月26日　講演会　第10回熊本 Web 内視鏡外科勉強会～下部消化管～（WEB 開催）
『腹腔鏡下 S 状結腸切除術』
野元 大地 先生（熊本市民病院　消化器外科）
有馬 浩太 先生（済生会熊本病院　外科　医長）
『技術認定医取得までの取り組みとロボット手術への応用』
清住 雄希 先生（済生会熊本病院　外科　医長）


馬場祥史先生最終オペ

8月8日　講演会　熊本大学　肝臓手術　ビデオクリニックセミナー（ハイブリット開催）
『止血マネジメントについて』
新田 浩幸 先生（岩手医科大学医学部外科学講座教授）
ビデオクリニック
新田 浩幸 先生（岩手医科大学医学部 外科学講座 教授）
ビデオ提供：伊東山 瑠美 先生（熊本大学大学院 消化器外科学 助教）

8月9日　イベント　納涼会（於：Cafe ＆ Garden Bar CRAIC）

8月25日　イベント　馬場祥史先生　教授就任壮行会（於：ホテル日航熊本）

馬場祥史先生壮行会


馬場祥史先生挨拶


医局説明会

8月31日　医局説明会

9月3日　講演会　KUMAMOTO Nutrition Seminar（於：熊本大学医学教育図書棟 4F）
『周術期サルコペニアを防ぐ！～外科医が考える栄養管理～』
井田　智 先生（熊本大学大学院生命科学研究部　消化器外科学　診療講師）

9月8日　イベント　第198回熊本外科集談会（小児外科・移植外科主催）

9月13日　講演会　Gastric Cancer Meet the Expert ～ St Ⅳ胃癌における集学的治療の異議を考える～（WEB 開催）
『胃癌薬物治療のベストプラクティスとは？～外科医の視点からも考えてみる～』
有上 貴明 先生（鹿児島大学大学院 消化器外科学 講師）
『テーマ：St Ⅳ胃癌における集学的治療の意義について考える』
パネリスト：井田　智 先生（熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学 診療講師）

10月10日　講演会　熊本消化器癌研究会 ～制吐療法を考える会～（WEB 開催）
『制吐療法 update - 食道がん術前 DCF 療法における支持療法の実践 -』
山本　駿 先生（国立がん研究センター中央病院　頭頸部・食道内科 消化管内科）

10月11日　講演会　胃癌診療アップデートセミナー（WEB 開催）
『外科医による胃癌治療』
岩上 志朗 先生（国立病院機構熊本医療センター　外科副部長）
『HER2陰性胃癌１次治療における薬物療法選択の現状と展望（仮）』
島田 英昭 先生（東邦大学大学院　消化器外科学講座・臨床腫瘍学講座　教授）
垣内 慶彦 先生（岡山大学病院 低侵襲治療センター 助教）

2024

10月12日　人事　第20回関連病院会議　（WEB 開催）

10月19日　イベント　BBQ（於：江藤ボートハウス）


BBQとボーリング

10月28日　人事　原　淑大 君　学位審査

11月1日　人事　宮本　裕士先生
熊本大学病院 消化器癌先端治療開発学寄附講座
特任教授就任

11月9日　イベント　岩槻教授 就任記念祝賀会ならびに
第20回 熊本大学消化器外科同門会記念祝賀会
（於：ホテル日航熊本）

岩槻教授就任記念講演ならびに開講記念

11月11日　講演会　Team Up for Cancer Care Seminar
～がんケアのためにチームを組もう～（WEB 開催）
『がん患者さんの栄養管理 ～管理栄養士としての関わり～』
長瀬 博美 先生（熊本大学病院　栄養管理部　栄養管理室　副栄養管理室長）
『がん診療における栄養治療の意義を考える』
鍋谷 圭宏 先生（千葉県がんセンター 副病院長（食道･胃腸外科 /NST）日本栄養治療学会副理事長）

11月12日　講演会　胃癌 web セミナー（WEB 開催）
『胃がん薬物療法の新たな展開』
髙張 大亮 先生（群馬大学大学院医学研究科　腫瘍内科学　教授）

11月15日　講演会　食道癌 Web Collaboration Seminar in 延岡（WEB 開催 ）
『食道がんオプジーボ all check - 一次治療の RWD-』
山本　駿 先生（国立がん研究センター中央病院 頭頸部・食道内科 / 消化管内科）
『食道癌に対する免疫チェックポイント阻害薬 ～当科での使用経験から～』
小澄 敬祐 先生（熊本大学病院 消化器癌先端治療開発学寄付講座 特任助教）

11月16日　イベント　外科ハンズオンセミナー（於：臨床研究棟７階）

12月1日　人事　林　洋光先生　熊本大学大学院生命科学研究部　消化器外科学　准教授就任

12月9日　講演会　Biliary Tract Cancer Seminar ～胆道癌治療戦略を考える～（WEB 開催）
『胆道癌薬物治療戦略 —ICI 時代を迎えて—』
林　洋光 先生（熊本大学大学院生命科学研究部　消化器外科学　准教授）
『胆道癌治療 - 新しい潮流 -』
海野 倫明 先生（東北大学大学院医学系研究科　消化器外科学分野　教授）

12月12日　講演会　教授就任講演会

12月12日　講演会　消化器がん TV Symposium（於：フォレストテラス熊本）
『胆道がん外科治療の最前線と集学的治療の現状』
林　洋光 先生（熊本大学大学院生命科学研究部　消化器外科学　准教授）

『STRiDE レジメンを用いた肝細胞癌治療戦略』
吉住 朋晴 先生（九州大学大学院医学研究院　消化器・総合外科分野　教授）

12月13日　宮本　裕士先生　特任教授就任、林　洋光先生　准教授就任祝賀会


宮本先生・林先生就任祝賀会

12月16日　講演会　第11回熊本 Web 内視鏡外科勉強会～上部消化管～（WEB 開催）
『膵上縁と再建の工夫』
森戸　淳 先生（がん研有明病院　胃外科）
中村 健一 先生（JCHO 熊本総合病院　外科　医長）
『当科におけるロボット支援下胃切除術の現状と今後の展望』
森田 圭介 先生（JCHO 熊本総合病院　外科　内視鏡外科部長）

12月17日　講演会　Upper Gastrointestinal Tract Cancer（WEB 開催 ）
『当院における免疫チェックポイント阻害薬の食道癌治療成績と今後の展望』
原田 和人 先生（熊本大学病院 消化器癌先端治療開発学寄附講座 特任助教）
『胃癌治療におけるバイオマーカー戦略』
江藤 弘二郎 先生（熊本大学病院 消化器癌先端治療開発学寄附講座 特任助教）
『上部消化管癌治療における当院の取り組み』
神田 光郎 先生（国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学大学院 医学系研究科消化器外科学 講師）

12月18日　イベント　消化器外科忘年会（於：熊本ホテルキャッスル）


2025仕事始め式

12月24日　人事　松本 嵩史 君　学位審査

12月27日　納会・仕事納め式

1月6日　仕事始め式

1月24日　講演会　大腸がん治療の現在と未来（WEB 開催 ）
『現在の大腸がん薬物治療 ～個別化治療の重要性～』
宮本 裕士 先生（熊本大学病院 消化器癌先端治療開発学寄附講座 特任教授）
『医療の変革者 - AI - が描く新しい診療：スマートサージェリーの未来』
三吉 範克 先生（大阪大学大学院医学系研究科　外科学講座消化器外科学　学部内講師）

1月29日　人事　湯本 信成 君　学位審査

1月30日　講演会　Gastric Cancer Symposium in Kumamoto（ハイブリッド開催 ）会場：メルパルク熊本
『新たなる胃がん治療の幕開け～新規標的薬ビロイの登場を踏まえて～』
廣中 秀一 先生（杏林大学医学部　腫瘍内科学　教授）
『臨床試験結果から考える実臨床におけるビロイの位置付け - 外科医が考える諸問題 - 』
市川 大輔 先生（山梨大学医学部　外科学講座第1教室　教授）

1月31日　講演会　第43回熊本肝癌研究会（ ハイブリッド開催）会場：ホテル日航熊本
『免疫療法後の LEN-TACE 療法についての考察　―自験症例の経験を踏まえて―』
赤木 由理恵 先生（国立病院機構熊本医療センター　消化器内科）
『肝細胞癌の進展における ADC 値の臨床的意義』
酒匂　照生 先生（ 熊本大学病院　消化器外科）

2月1日　イベント　第199回熊本外科集談会（於：熊本ホテルキャッスル）
特別講演Ⅰ　大塚 将之 先生（ 千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科学　教授）
特別講演Ⅱ　岩槻 政晃 先生（ 熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学講座　教授）

2月1日　人事　第21回関連病院会議　（WEB 開催）
井田　智先生　熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学 講師就任

2月13日　講演会　第12回熊本 Web 内視鏡外科勉強会～肝胆膵～（WEB 開催）
『Calot 三角の攻略』
松本 嵩史 先生（出水総合医療センター　外科　医長）
山根 大侍 先生（宮崎県立延岡病院　外科　医長）
『合併症ゼロを続けるためのラパコレ』
大目 祐介 先生（東京女子医科大学病院　消化器・一般外科 講師）

2月27日　講演会　第18回熊本肝胆膵外科手術研究会（ハイブリッド開催）会場：くすのきテラス３階大会議室
『肝胆膵外科学会高度技能医合格とこれから目指すべき道』
北野 雄希 先生（熊本大学病院消化器外科　特任助教）
『パリで学んだ肝臓外科』
中尾 陽佑 先生（国立病院機構熊本医療センター　外科）
『働き方改革に伴う肝胆膵外科チーム力向上のための取り組みと当科の現状』
伊東山 瑠美 先生（熊本大学病院消化器外科　助教）
『ロボット支援下手術シミュレーションの取り組み（安全な医療を目指して）』
梅田　道子　先生（熊本大学病院手術部　看護師）
『当院の肝胆膵外科における低侵襲手術の取り組み～ロボット支援下手術の導入～』
木原 康宏 先生（熊本赤十字病院外科　肝胆膵外科部長）
『地域の肝胆膵外科治療を支える KMN 遠隔連携診療』
志垣 博信 先生（水俣市立総合医療センター外科　外科部長）

2月28日　講演会　外科と内科が導く！胃癌治療の最前線（WEB 開催）
『熊本大学病院における胃癌治療の実際 ～ ICI 一次治療導入後の変化～』
井田　智 先生（熊本大学病院消化器外科　講師）
『胃癌治療を考える～外科・内科の立場から～』
岩上 志朗 先生（国立病院機構熊本医療センター　外科副部長）
菊川 佳敬 先生（熊本市民病院　血液・腫瘍内科）

3月5日　講演会　食道がん診療医のための実践ガイド（WEB 開催）
『実臨床における術後ニボルマブ療法の投与意義 －100 例を超える治療成績をふまえて－』
菅生 貴仁 先生（大阪国際がんセンター 消化器外科 医長）
『内視鏡外科技術認定医を取得して －鹿児島大学での取り組み－』
鶴田 祐介 先生（鹿児島大学病院 消化器センター 消化器外科 助教）

3月10日　第98回熊本医学会総会、
第77回熊本県医師会医学大会（ハイブリッド開催）
会場：熊本県医師会館
長井　洋平　先生　第98回熊本医学会奨励賞受賞　『地域一体の医療 DX 推進に関する活動』

3月17日　講演会　消化器癌に対する低侵襲手術（ハイブリッド開催）
会場：総合臨床研修センターカンファレンス室
『上部消化器癌に対する低侵襲と機能温存を目指した我々の取り組み』
井田　智 先生（熊本大学病院消化器外科）
『大腸がんの低侵襲手術』
日吉 幸晴 先生（熊本大学病院消化器外科）
『熊本大学肝胆膵外科における低侵襲手術の積極的な取り組み』
岡部 弘尚 先生（熊本大学病院消化器外科）


第77回熊本県医師会医学大会
（長井先生受賞）

3月19日　イベント　医局送別会（於：熊本ホテルキャッスル）

3月20日　イベント　谷川師長送別会（於：ANA クラウンプラザホテル熊本ニュースカイ）

3月27日　年度末報告会

診　療

食道グループ

食道癌の診療について

食道癌に対する治療法には、手術、内視鏡治療、化学療法（抗がん剤）、放射線治療、そして免疫療法（免疫チェックポイント阻害剤）があり、これらを組み合わせた集学的治療によって、食道癌の治癒あるいは延命を目指した治療を行います。私達は、患者様の併存症や生活強度などの全身状態と癌の進行度を総合的に評価し、一人一人にとって最も適した治療法を選択するようにしています。

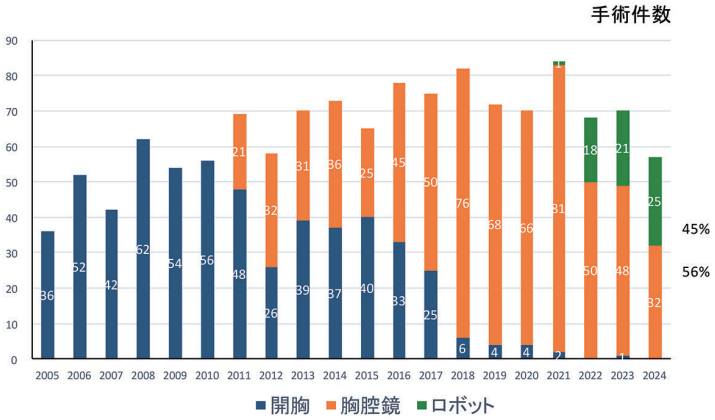


図1：食道癌 手術件数

手術療法と低侵襲手術の進化

当科の食道癌手術はここ20年で大きく進化しました。2005年から内視鏡補助下手術を開始し、2011年から胸部・腹部操作を完全内視鏡下で行うMinimally Invasive Esophagectomy（MIE）を導入しています（図１）。現在は、従前に化学療法や化学放射線療法（CRT）を行った症例にもMIEの適応を広げており、従来の開胸手術は年々減少しています。内視鏡手術は小さい創で食道切除術を行う事ができるため、痛みの軽減、美容的な利点、そして術後の回復の早さといったメリットがあります。また拡大視効果により肉眼では見えなかった微細な神経や血管などの重要な構造を鮮明に確認でき、より繊細で質が高く、また出血が少ない手術が可能になりました。2018年以降は9割以上が完全内視鏡下手術となっています。2018年4月からは食道癌に対するロボット支援下手術が保険適応となりました。当科でも2021年年末よりロボット手術を導入しており、これまでに50例以上のロボット手術を安全に施行しています。ロボットのアームは人間の手以上に関節の可動域が大きく、より緻密な操作が可能であり、反回神経麻痺などの合併症リスク低下が期待されています（図２）。完全内視鏡下手術にロボット支援手術も加わり、更なる低侵襲かつ高精度な手術が可能となりました。

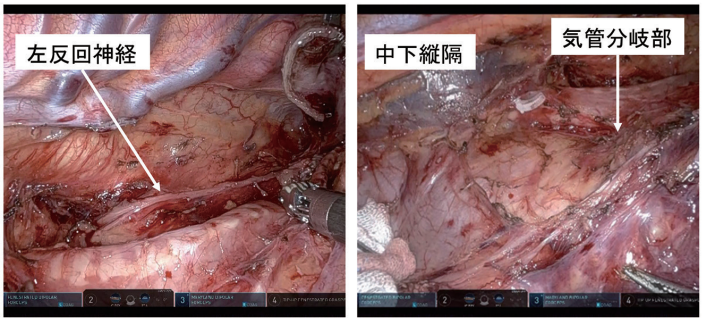


図2：ロボット支援下食道亜全摘

合併症対策と成績の向上

手術アプローチのみならず、周術期合併症についても着実に改善を図っています。最も多い手術部位感染（SSI）は、従来30％近くに上っていましたが、完全内視鏡下手術の普及により10％台に減少しています。呼吸器合併症も15～20％で推移していますが、禁煙指導・歯科との連携などを通じてリスク軽減に努めています。さらに頸部縫合不全は、吻合手技の工夫により10％以下に減少し、再手術率も5％弱まで低下しました。

また、近年はICG蛍光法による胃管血流評価を行うことで、縫合不全の予防にも取り組んでいます。2005年以降、1062例中在院死亡はわずか3例（0.3％）であり、安全性の高い手術を維持しています。

他診療科との連携と治療戦略

食道癌に限らず食道疾患における治療方針は、外科・内科・放射線科による多科合同カンファレンスを通じて決定しています。早期食道癌に対しては、機能温存を重視して内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）を実施しています。ESDは消化器内科で施行していただいていますが、適応の判断は合同カンファレンスを通じて行われます。治療後の病理結果に応じて、追加治療として手術やCRTを行います。近年では、根治的CRT後の遺残・再発表在病変に対するサルベージESDも積極的に行っています。

切除不能局所進行癌や併存症などで手術困難な症例に対しては、根治を目的としたCRTを行っています。多臓器浸潤を認める進行がんであっても、CRTのみで根治に至る可能性は約30％に認めました。また、根治的CRT後に癌が遺残した症例に対するサルベージ手術（救済手術）など信州の大きな手術も積極的に行っています。これまで70例以上のサルベージ手術を行ってまいりましたが、在院死亡例は認めていません。さらに、CRT後にも腫瘍が気管に浸潤している症例では、耳鼻咽喉科頭頸部外科・心臓血管外科と合同で、咽頭喉頭食道摘出術・縦隔気管孔造設術（Grillo手術）も行っています（図３）。かつては長期生存が望めなかった進行食道癌に対しても、CRTは有望な治療の選択肢となっています。

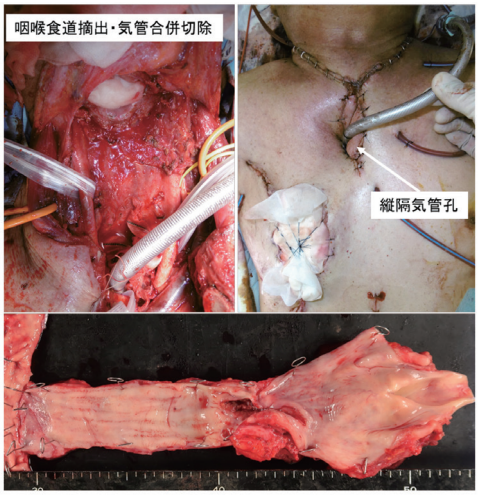


図3：咽・喉頭食道摘出術・縦隔気管孔造設術
（いわゆるGrillo手術）

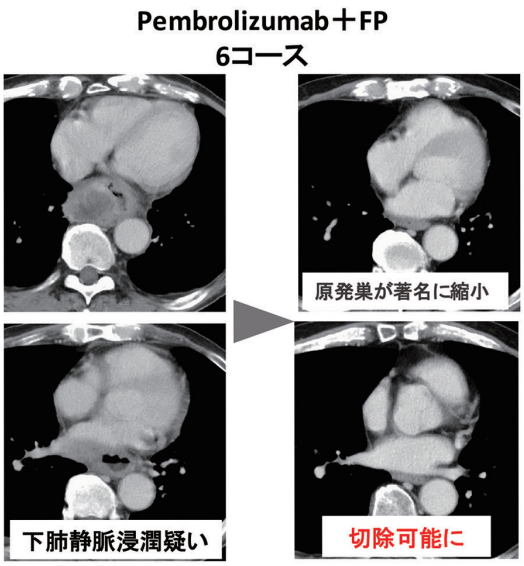


図4：免疫チェックポイント阻害剤
併用レジメンの奏功例

免疫療法・臨床試験と今後の展望

当科ではJCOG（日本臨床腫瘍研究グループ、Japan Clinical Oncology Group）やKSCC（九州消化器癌化学療法研究会、Kyushu Studygroup of Clinical Cancer）などの臨床試験グループの参加施設であり、食道癌に対する標準治療の確立と進歩を目的として様々な多施設共同臨床試験を行っています。また、更なる食道がん治療成績の向上を目指して、治験にも積極的に参加しています。現在は、当科からも症例登録を行ったKEYNOTE-590試験やCheckMate-648試験の結果を受けて、根治切除不能な進行・再発食道癌に対する一次治療としては免疫チェックポイント阻害剤を含むレジメン（ペムブロリズマブ＋化学療法、ニボルマブ＋化学療法、イピリムマブ＋ニボルマブ）が標準治療となっています。これまでに100例以上の食道扁平上皮癌の患者様に同レジメンを使用しておりますが、奏効率52％、病態制御率79％という成績が得られています。

治療前は切除不能であっても、免疫チェックポイント阻害剤を含むレジメンが著効したことで手術が可能になる症例（Conversion surgery症例）も存在し、これまでにもConversion Surgeryも積極的に行っています（図4）。現在は免疫チェックポイント阻害剤とCRTの併用療法による新たな治験も進行中であります。

治療成績と今後の課題

当科の食道癌5年生存率は良好な成績を示しており、今後もさらに合併症の低減、治療精度の向上、新規治療の導入を通じて、より高い安全性と治療成績を目指していきます（図5）。

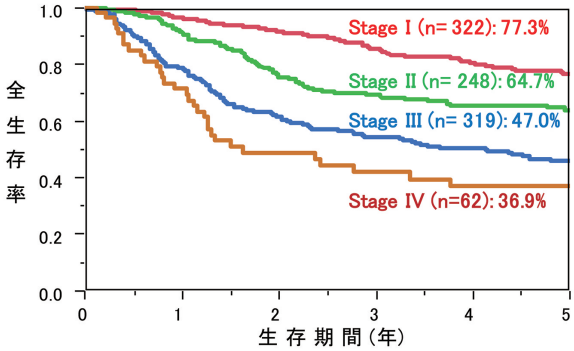


図5：食道癌 stage毎 生存率

良性疾患への対応と地域連携

当科では良性食道疾患にも幅広く対応しています。食道裂孔ヘルニア、食道アカラシアに対しては、腹腔鏡下手術を行っており、患者満足冨度の高い治療成績が得られています。また咽頭食道憩室（Zenker憩室）、薬剤誤飲による腐食性食道炎、義歯・異物による食道穿孔などに対しても安全に手術を行っています（図6）。

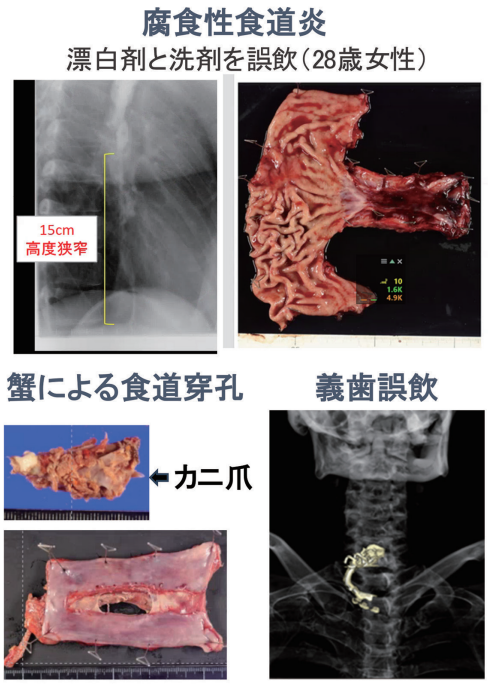


図6：食道救急疾患に対する手術

胃グループ

はじめに

胃癌はピロリ菌の罹患率低下、除菌の一般化などで減少傾向にあります。一方で患者さんの高齢化は進んでおり、当院においても胃切除を受ける患者さんのうち75歳以上の高齢者が約40%を占め、年々増加傾向にあります。また、腫瘍の発生部位としては上部胃癌や食道胃接合部癌の割合が増加しています。このような状況では、安全性、根治性、QOLに配慮した専門的な治療選択がますます重要となっています。当科での胃癌の治療成績(5年生存率)を示します(図1)。

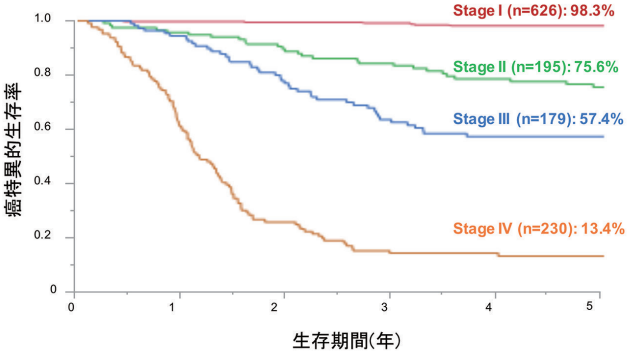


図1. 胃癌ステージ別 癌特異的生存率 (2005-2023)

低侵襲手術と機能温存手術の取り組み

当科では、日本内視鏡外科学会技術認定医(胃)2名、ロボット支援手術プロクター (胃)2名が在籍し、低侵襲かつ機能温存を重視した胃癌手術を積極的に推進しています。

2005年以降、原発性胃癌の年間手術症例数は概ね50-60例程度で推移していますが、この20年間で手術アプローチは大きく変化しました。従来の開腹手術から腹腔鏡手術が主流となり、さらに2019年には胃癌に対してもロボット手術を導入しました。現在では胃全摘、幽門側胃切除、噴門側胃切除のすべての術式においてロボット手術を実施しています。その結果、2024年には胃切除全体の84%を腹腔鏡とロボットを用いた低侵襲手術にて行っています(図2)。

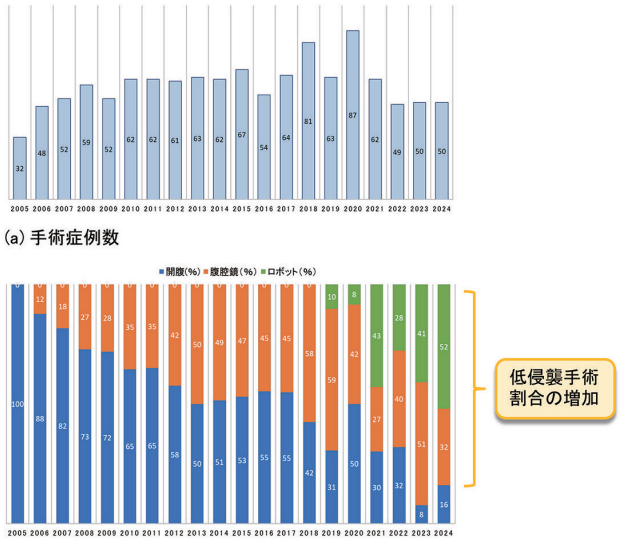


図2. 初発胃癌の手術症例数と手術アプローチの年次推移

また、機能温存手術にも力を入れており、上部胃癌や食道胃接合部癌に対しては、可能な限り胃全摘を回避し、噴門側胃切除を選択しています。噴門側胃切除後の再建法としては、食道と残胃を直接吻合する「食道 -残胃吻合」が生理的ですが、術後の逆流性食道炎が問題となってきました。そこで当科では、逆流防止効果に優れるとされる上川法再建(観音開き法再建)を第一選択としています。上川法再建は、食道と残胃を手縫いで縫合したあとで、粘膜下層のフラップで吻合部を被覆することにより逆流を防止します(図3)。とくに、縫合操作が困難な下縦隔の狭い空間においてはロボット支援手術の有用性が高い可能性があり、当科でもこの術式にロボット手術を積極的に導入しています。

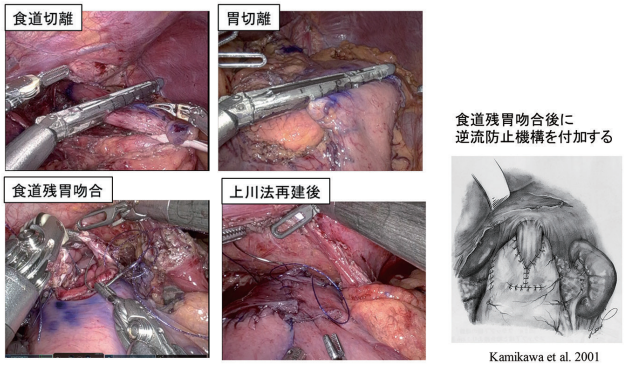


図3. ロボット支援下腹腔鏡下噴門側胃切除術、上川法再建

胃・十二指腸腫瘍に対する腹腔鏡・内視鏡合同手術(LECS)

当科では、胃および十二指腸のGISTなどの粘膜下腫瘍や、十二指腸腺腫、粘膜内癌に対して、低侵襲性と根治性を両立した腹腔鏡・内視鏡合同手術(LECS)を積極的に導入しています。

胃粘膜下腫瘍に対しては、内視鏡と腹腔鏡を併用することで腫瘍の位置を正確に把握し、最小限の切除範囲で局所切除を行うことが可能です。これにより術後の胃変形を最小限に抑え、胃機能の温存にも寄与します。

特に十二指腸腫瘍は膵臓に隣接しており、進行例では高侵襲な膵頭十二指腸切除が必要となる一方で、良性腫瘍や粘膜内癌に対しては過大侵襲となる可能性があります。また、内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD)は十二指腸では遅発性穿孔による重篤な合併症のリスクが高く、慎重な対応が求められます。そこで、当院では、2020年に保険収載された十二指腸LECS (D-LECS)を導入し、内腔側からESD手技で切除後、腹腔側から脆弱化した十二指腸壁を縫合・補強することで、穿孔リスクを大幅に低減しています(図4)。

このように、消化器外科と消化器内科との連携により、安全性と低侵襲性を両立しつつ、高い根治性を実現しています。

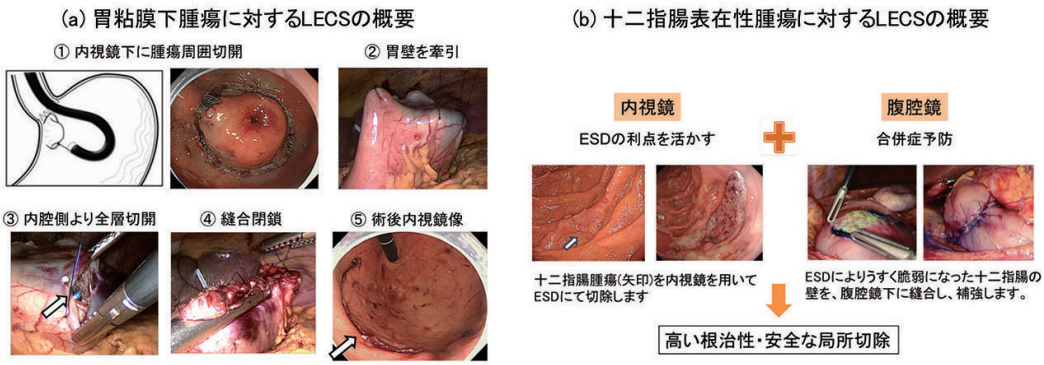


図4. 腹腔鏡・内視鏡合同手術（LECS）

進行胃癌に対する集学的治療

胃癌に対する化学療法もこの20年間で大きく進歩し、標準治療は大きく様変わりしました。従来の細胞障害性抗がん剤に加え、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬の登場により、腫瘍のバイオマーカーに応じた個別化治療が進んでいます。

特に2021年11月には免疫チェックポイント阻害薬であるニボルマブ（オプジーボ®）が保険承認されました。当科でもHER2陰性切除不能進行・再発胃癌の１次化学療法として、化学療法とニボルマブを併用した治療を積極的に導入しており、切除可能に至る症例を経験するようになってきています。さらに、2024年には新たな分子標的薬ゾルベキシツマブ（抗 CLDN18.2抗体）と化学療法の併用が推奨されました。現在では、HER2、PD-L1、MSI、CLDN18.2 などのバイオマーカーに基づいた治療戦略の最適化が進みつつあります。当科では、これら最新のエビデンスに基づく治療を積極的に取り入れ、患者さんの治療成績の向上とQOLの維持を目指しています。

進行胃癌に対するコンバージョン手術

高度進行胃癌や遠隔転移、腹膜播種を伴うステージⅣ胃癌に対しては化学療法と手術を組み合わせた集学的治療を積極的に行っています。当科ではこれまでに、化学療法奏功後に根治を目指した手術（コンバージョン手術）を47名の患者さんに実施しており、生存期間中央値は31.9 ヵ月と切除不能とされたステージⅣ胃癌においても良好な治療成績を得ています（図5）。

今後も、薬物療法と外科治療を最適に組み合わせ、エビデンスに基づき個別性を重視した集学的治療を進行胃癌に対して実践してまいります。

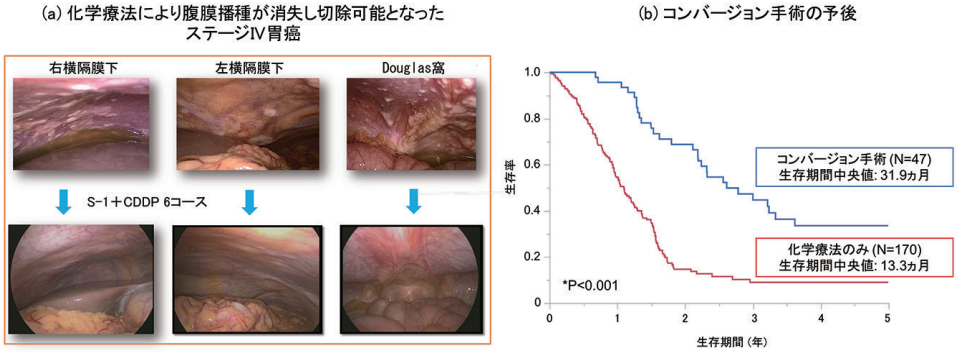


図5. コンバージョン手術の治療成績

GIST(Gastrointestinal Stromal Tumor:消化管間質腫瘍）に対する治療

希少疾患とされている消化管間質腫瘍（GIST）や肉腫に関しても、当科では多くの症例を経験し専門的な治療を行っています。

GIST の治療の原則は、外科的切除です。当科では、根治性を確保しつつ、機能温存と低侵襲性の両立を目指して、前述したLECS（腹腔鏡・内視鏡合同手術）を積極的に導入しています。一方で、10cm を超える大きな腫瘍や周囲臓器へ浸潤が疑われる症例では、すぐに手術を行わず、術前化学療法を行い、腫瘍の縮小を図った上で手術を行うこともあります。

また再発あるいは遠隔転移があるGIST に対しては分子標的治療薬を用いた化学療法を行っています。当院では治療開始前に遺伝子変異検査を必ず行い、治療選択をしています。また、新薬の治験や臨床試験にも積極的に参加しており、様々な治療の選択肢をご提示できる体制を整えています。

おわりに

胃癌診療は2023年4月より胃癌学会の認定施設制度が開始されました。高度化・多様化・専門化が進んだ胃癌治療のセンター化を目指しての施策です。熊本大学病院も認定施設Ａを取得しておりますので、各診療科と協力しながら総合力で治療にあたってまいります。

大腸グループ

はじめに

下部消化管グループは、内視鏡外科学会技術認定医（大腸）3人、ロボット支援手術プロクター（大腸）2人、Acute care surgery認定外科医1人を含むスタッフ4人と医員2人の計6名で専門性の高いチーム診療を目指しています。診療内容は、大腸癌手術を中心として、その他小腸大腸肛門悪性疾患や、炎症性腸疾患、腹部救急疾患の手術を行い、大腸癌化学療法も担当します。2005年以降、手術症例数は徐々に増加し、手術アプローチも開腹から腹腔鏡が主体になりなした（図1）。また、2018年には直腸がんに対するロボット手術を開始し、2024年は直腸がん手術の約8割をロボット手術で行っています。さらに、2024年に結腸がんに対するロボット手術も導入し、今後増加していく見込みです。がんの根治、機能温存、低侵襲化という目的を達成するために、症例ごとの適切なアプローチ、術式選択を行います。また、大腸がん治療成績向上のためには手術、薬物療法、放射線治療等を組み合わせた集学的治療が重要であり、他診療科やコメディカルとの連携を深めながら、安全で質の高い医療を行うことで社会貢献したいと考えています。当科での大腸がん切除症例の治療成績を示します（図2）。

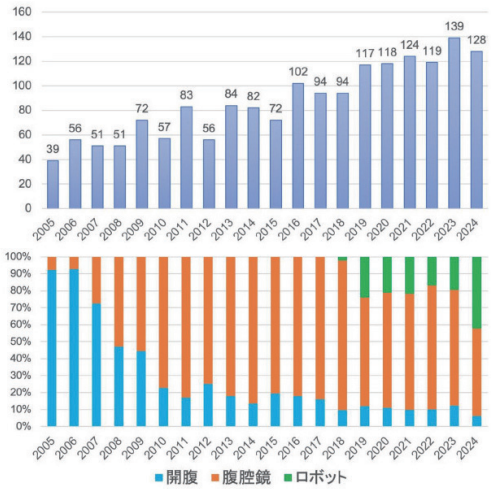


図1：初発大腸癌の手術症例数と手術アプローチの変遷

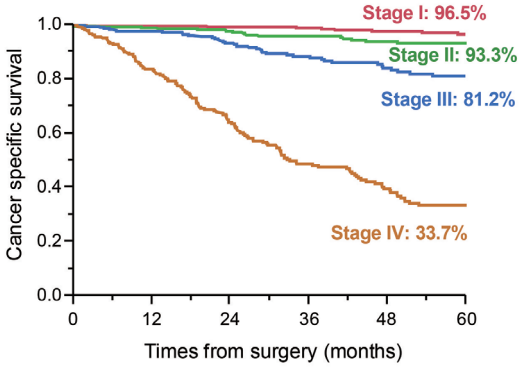


図2：大腸癌 stage毎 癌特異的生存率（2005-2022）

低侵襲手術（図3）

2024年度は初発大腸がん手術の約95%を腹腔鏡手術/ロボット手術で行いました。腹腔鏡手術では、さらなる低侵襲化を目指して細径鉗子を用いたneedlescopic surgeryを取り入れています。これは、通常のポート配置で3mmの細径鉗子を用いる手術で、整容性の面で大きなメリットがあり、今後増えてくると思われるAYA(adolescent and young adult)世代のがん、あるいは若年者に多い炎症性腸疾患の手術等で有用です。

熊本大学では2024年からダビンチXiが2台体制となり、消化器外科全体でロボット手術件数が増加するなか、現在までに約200例のロボット直腸手術を経験しました。術式を定型化し、特にロボット手術の有用性が高い下部直腸がんや男性、狭骨盤症例などでがんの根治性と機能温存の両立を目指しています。ロボット結腸手術も導入し、特にリンパ節郭清などの精緻な操作でロボット手術の特徴を活かして、安全に症例を増やしています。

当科では、大腸癌同時性肝転移に対する大腸肝同時切除を積極的に行っており、2012年からは完全腹腔鏡下大腸肝同時切除を導入しています。さらに、肝臓外科チームによるロボット肝切除の症例数が増加していることをうけて、ロボットによる直腸肝同時切除も行うことができるようになりました。

このように、さまざまな低侵襲手術に積極的に取り組んでいます。高齢化社会で大腸癌患者の高齢化、ハイリスク化も進んでいるため、癌の根治性を担保しながら安全で低侵襲な手術を目指していきます。

局所進行がんに対する拡大手術

他臓器浸潤を伴う局所進行大腸癌や、直腸癌術後の骨盤内再発、骨盤内巨大腫瘍、後腹膜腫瘍などに対する拡大手術にも取り組んでいます。特に、他臓器浸潤が疑われるような進行癌に対しては、他臓器合併切除を伴う拡大手術（骨盤内臓全摘術、仙骨合併切除など）を行っています。また、術前治療の有効性を検証する臨床試験に参加しており（直腸癌局所

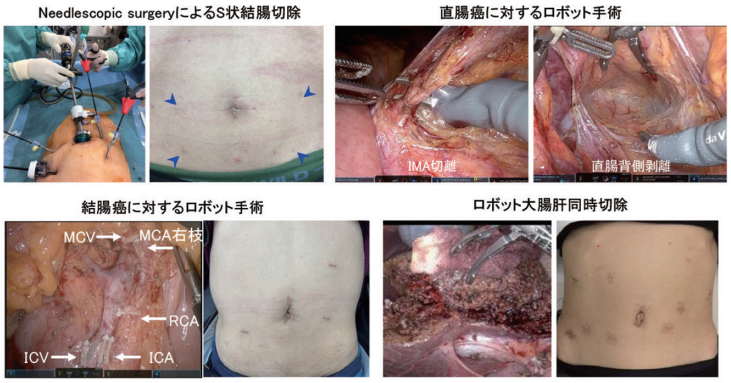


図3：さまざまな低侵襲手術

再発に対する術前化学放射線療法、進行結腸癌に対する術前化学療法）、このような病状の患者さんに、よりよい治療が届けられるよう努力を行っています。

進行大腸癌に対する集学的治療

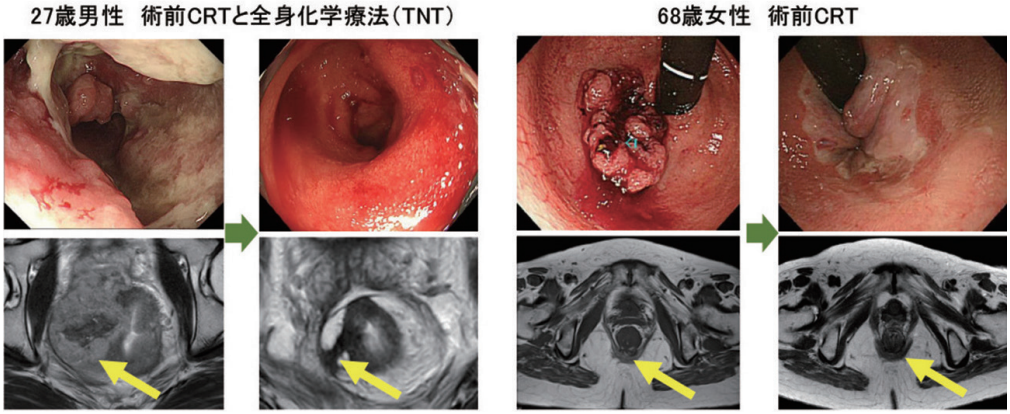


図4：術前治療によりcCRが得られた直腸癌症例

1.　直腸癌に対するTotal neoadjuvant therapy（TNT), Watch and Wait戦略（図4）

直腸癌に対し、術前に放射線療法と全身化学療法を行うTotal neoadjuvant therapy（TNT）を施行しています。このTNTを行うと約3割の患者さんで直腸癌が消失する（臨床的寛解：cCR）ことがあり、この場合は手術を受けず、慎重に経過観察する治療戦略（Watch and Wait）が海外では行われるようになっています。まだ、日本では標準治療として確立されていない治療法ですが、当科ではこのTNTおよびWatch and Wait戦略の臨床試験に積極的に参加しています。

2.　切除不能肝転移に対するconversion手術（図5）

大腸がん肝転移は、初診時に切除不能であっても、全身化学療法が著効して切除可能となるケースを多く経験しています。化学療法を適切なレジメン、タイミングで行いながら、肝臓外科医と連携して、時期を逸することなく外科治療に移行できるよう治療計画を立てています。

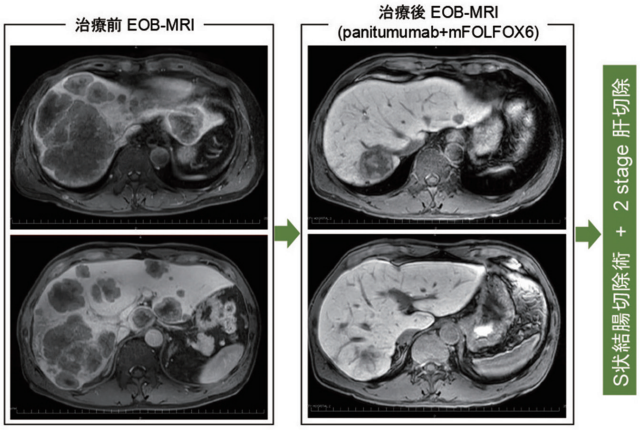


図5：S状結腸癌多発肝転移に対するconversion手術

3.　大腸がん肺転移に対するCTガイド下経皮的ラジオ波焼灼療法（RFA）

大腸がん肺転移に対する標準治療は切除、全身化学療法ですが、低肺機能などの理由で標準治療が困難な症例に対して、当院では放射線科のIVR医や呼吸器外科医と連携して肺RFAを行っています（2022年9月に保険適応）。現在までに約70例に治療を行い、局所コントロール率90%、5年生存率50%と良好な治療成績をあげています。低侵襲で繰り返し治療が可能であることが肺RFAの大きな利点ですが、一定の頻度で気胸などの合併症があること、手技の専門性が高いことが注意点であり、他科との連携によって安全に治療を行う必要があります。

4.　ctDNAによる術後再発リスク予測

集学的治療に関連して、腫瘍組織から血中に遊離する血中循環腫瘍DNA（ctDNA）を活用しています。この技術は微小残存病変（MRD）の検出に有用であり、予後因子としての価値が報告されています。当科では大腸癌原発巣や肝転移切除の術前後にctDNA検査を行う治験や臨床試験に積極的に参加し、これらの結果を基に術後補助療法の治療方針に役立てています。

おわりに

下部消化管グループでは、患者一人ひとりに最適な治療を提供するために、低侵襲手術と拡大手術、薬物療法や放射線療法といった多様な治療法を組み合わせた個別化治療を追求しています。最新のエビデンスと先進的な技術を駆使しつつ、がんの特性や患者の全身状態を総合的に評価し、根治性の向上と患者QOLの維持・向上を両立させることを目指します。

肝臓・膵臓・胆道グループ

― 肝臓 ―

胆道疾患を含めた年間肝切除数の推移を図1に示します。2005年以降の肝切除総数は2564例にのぼり、低侵襲手術の積極的な導入を行い、現在では肝切除の7割以上を完全腹腔鏡下もしくはロボット支援下に行っています(Surg Endosc 2019)。

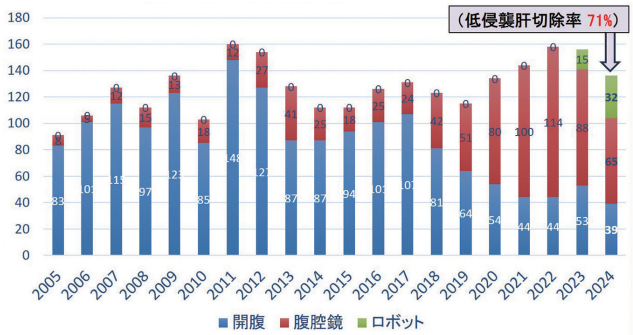


図1：肝切除症例数推移　2005～2024

肝細胞癌

肝機能や癌の進行度を考慮して、肝切除、ラジオ波凝固療法(RFA)、肝動脈塞栓療法(TACE)、全身薬物療法、放射線治療、肝移植などを組み合わせた『個別化治療』を行ってきました。

肝切除後合併症ゼロを目指して様々な取り組みを行っています。致命的な術後肝不全を予防するために、VINCENT™ systemを用いた3D volumetry 画像構築による術前手術シミュレーションとアシアロSPECT/CT fusion画像を用いた「機能的」残肝容量の算出を行い、より正確な残肝評価を行ってきました(Surgery 2015)。

2000年から2020年までに当科で切除を行った初発肝細胞癌(n=1083)の切除後予後は、5年生存率73.2%と極めて良好です。また初発肝細胞癌に対する肝切除のstage別5年生存率も、stage Iで83.4%、stage IIで83.4%、stage IIIで61.0%、stage IVAで43.5%と、stage IIIやstage IVAの進行癌でも比較的良好な予後を実現しています。このような良好な治療成績は、再発肝細胞癌に対しても、肝機能が良好であれば、難易度が高いとされる再肝切除を積極的に行い(Liver Transplant 2015)、再発時の癌の進行度や残肝機能に応じて、RFA、TACE、分子標的治療などを組み合わせた『個別化治療』への我々の取り組みの成果と考えています(HPB 2018)。

肝癌に対する腹腔鏡・胸腔鏡手術を全国に先駆けて1994年に導入し、現在ではICG蛍光法など術中ナビゲーションを駆使して安全性を担保しながら、区域切除や葉切除へ適応を拡大しています。小型の肝癌に対して、RFAを選択する場合もあります(Anticancer Res 2018)。

転移性肝癌

大腸癌肝転移の治療成績は、新規化学・分子標的治療の導入により急速に改善し、ガイドライン上も肝転移巣が切除可能であれば切除を行うことが推奨されています。我々は、肝切除不能な患者さんが抗癌剤治療により切除可能となれば、転移巣が10個以上など多数ある場合でも、様々な工夫を行い、積極的に手術を行ってきました。転移巣が深部にある場合は、ラジオ波焼灼を切除に組み合わせて切除適応を拡大し(Br J Surg 2017)、転移巣が両葉にまたがる場合、切除適応拡大のために『Two-Stage hepatectomy』を積極的に行ってきました(Ann Surg 2015)。1st Stageで原発巣切除と残肝となる側にある腫瘍の部分切除を行い、切除予定肝葉の門脈塞栓を行います。約1ヶ月間残肝の肥大を待って、2nd Stageで門脈塞栓を行った葉を切除します。腫瘍内科医、消化器内科医、消化管外科医と連絡を密にして、肝転移巣の切除適応やタイミングを決定しています。このような工夫により、2001年から2022年までに当科で根治切除を行った大腸癌肝転移症例(n=298)の切除後5年生存率は55.5%と良好です。また、積極的に低侵襲(腹腔鏡またはロボット支援)下手術も行っています。

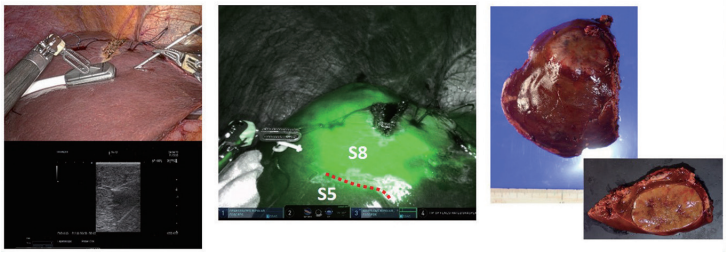


図2：ロボット支援下肝S8亜区域切除(エコーガイド下ICG蛍光染色法)

ロボット支援下肝切除術

2022年よりロボット支援下肝切除術が保険収載され、同年より当院でも肝部分切除から導入を行い、2023年より系統的肝切除にも適応を拡大してきました。ロボット支援下肝切除では安定かつ、3Dを駆使した明瞭な視野のもと細緻な肝離断が可能であり、術後合併症の軽減や在院日数の短縮につながっています。2025年6月現在で肝部分切除を21例、系統的肝切除を40例行い(図2)、大きな合併症や死亡例なく術後在院日数も5日(中央値)と良好な成績を収めています。

― 膵臓 ―

年間膵切除数の推移を図3に示します。2005年以降の膵切除総数は1098例にのぼり、低侵襲手術の積極的

な導入を行い、現在では膵切除の6割以上を完全腹腔鏡下もしくはロボット支援下に行っています。

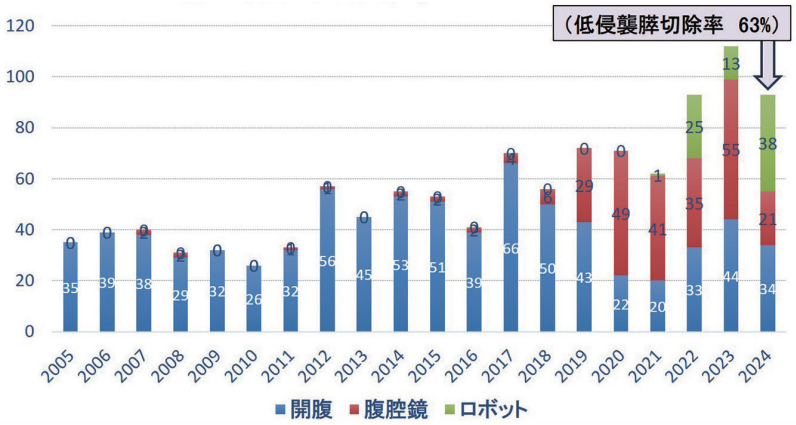


図3：膵切除症例数推移　2005～2024

膵癌

膵癌は極めて予後不良な難治癌です。厚生労働省の統計では、2021年の部位別がん死亡数では男性第4位、女性第3位、男女計4位と年々増加しています。以前は手術のみが有効な治療であったが、新しい化学療法の出現や診断技術、手術手技の向上で少しずつ治療の道が開けてきました。

2004年から2022年までに当科で切除を行った膵癌（n=329）の切除後予後は、5年生存率28.3%と改善が得られてきています。またstage別5年生存率は、stage Ⅰで52%、stage Ⅱで26%、stage Ⅲ/Ⅳで0%となっており、更なる予後改善のためには、stage Ⅰの早期に膵癌を診断すること、およびstage Ⅱ/Ⅲ/Ⅳにおける術前化学療法の工夫が課題と考えています。

切除不能局所進行癌や、肝転移や腹膜播種などの遠隔転移を認める場合は、全身化学療法を行います。FOLFIRINOX療法かGnP療法（ゲムシタビン＋ナブパクリタキセル）を個々の症例に合わせて選択しています。BRCA1/2遺伝子変異の解析やがん遺伝子パネル検査も積極的に行い、有効な治療法がないか検討しています。近年では初診時局所進行癌で切除不能と診断された症例が、化学療法で腫瘍が縮小し、根治切除（Conversion surgery）可能となる症例も増えてきました。切除可能境界（Borderline resectable）膵癌に対してはFOLFIRINOX療法やGnP療法による術前化学療法をルーチンに行っています。一方でResectable（切除可能）膵癌に対しても、Prep-02/JSAP-05試験の結果から、GS（ゲムシタビン +S-1）療法を2クール行った後に手術を行っています。

膵癌に対する手術は高侵襲で合併症率が高いことから、症例数の多い施設で手術を行うことがガイドラインで推奨されています。局所進行癌に対しては、門脈合併切除および自家グラフトによる門脈再建を行う拡大手術を行っている。膵切除においても腹腔鏡手術の適応拡大が進み、膵神経内分泌腫瘍（PNET）といった低悪性度腫瘍のみでなく、胆管癌や膵癌に対しても腹腔鏡下膵頭十二指腸切除や腹腔鏡下尾側膵切除を行い、現在では拡大視効果と多関節機能による精緻な手術を可能とするロボット支援下膵切除の施設基準をクリアし、安全に適応を拡大しています。膵体尾部切除において、膵断端に肝円索を被覆する新たな膵液瘻防止手術手技を開発し、その有効性を報告した（Br J Surg 2025）。

膵神経内分泌腫瘍（PNEN）

全身の様々な臓器に分布する神経内分泌細胞から発生する腫瘍のうち、膵に発生するものが膵神経内分泌腫瘍（PNEN）です。稀な腫瘍とされており、インスリンやガストリン、グルカゴンなどのホルモン過剰分泌による症状がみられる機能性、ホルモンを分泌しない非機能性に分けられます。遺伝性疾患を背景としているものもあります。

治療は、原則、リンパ節郭清を伴う膵切除を行う。当科では2005年－2024年までに127例のPNENの切除経験があり、最近ではほぼすべての症例で腹腔鏡下もしくはロボット支援下での膵切除を行っています。また、PNENの悪性度やホルモン分泌等に応じて、薬物治療を組み合わせた集学的治療を行います。当院では県内唯一のNEN認定施設として、消化器外科、消化器内科、代謝内科、画像診断科による診療科横断的カンファレンスを開催し、最適な治療法を提供してきました。

ロボット支援下膵頭十二指腸切除術

2016年より良性から低悪性度腫瘍に対する腹腔鏡下膵頭十二指腸切除術が保険収載され、当院でも2019年より本術式を積極的に導入し、2024年12月まで死亡例なく安全に行ってきました（図4）。現時点の熊本県内では熊本大学病院のみが施設基準をクリアしており、その経験をもとに2022年よりロボット支援下膵頭十二指腸切除術を導入し、こちらも2024年まで72例死亡例なく安全に行ってきました。ロボット支援下膵頭十二指腸切除術は、傷が小さく、気腹により腸管への負担も少ないため術後の食事摂取が良好であり、術後の早期回復を可能とする上に、膵臓手術特有の合併症である膵液漏も軽減できる可能性があります（Ann Surg Open 2025）。

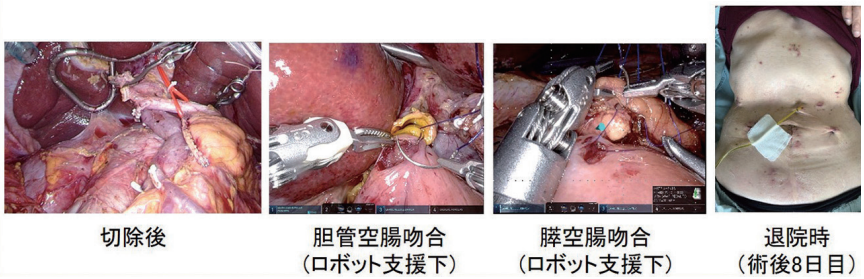


図4：ロボット支援下膵頭十二指腸切除術

― 胆道 ―

広義の胆道癌は肝内胆管癌（原発性肝癌）と肝外胆管癌（狭義の胆道癌）に分類されます。胆道癌に対する年間切除数の推移を図5に示します。2005年以降の胆道癌（肝内・肝外合わせて）切除総数は700例にのぼり、低侵襲手術の積極的な導入を行い、膵頭十二指腸切除や胆嚢癌に対する肝切除を中心に完全腹腔鏡下もしくはロボット支援下手術例が増えてきています。

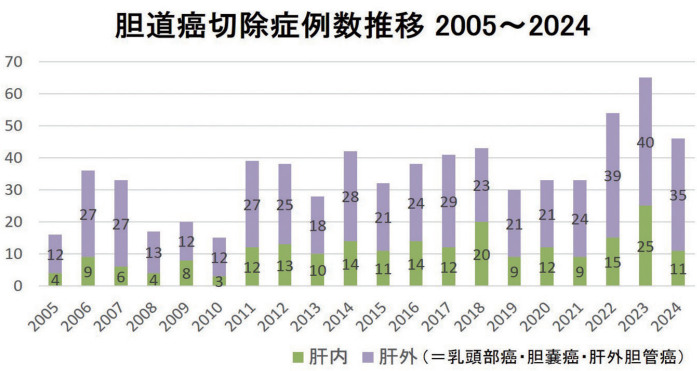


図5：胆道癌切除症例数推移　2005～2024

肝内胆管癌

肝内胆管癌は希な原発性肝癌で、発見時既に進行している症例が多く、切除後予後が極めて不良な難治性癌です。2002年から2021年までに当科で切除を行った初発肝内胆管癌（n=104）の切除後予後は、5年生存率50.9%と比較的良好です。また初発肝内胆管癌に対する肝切除のstage別5年生存率は、stage I/IIで58.7%、stage IIIで52.6%、stage IVAで36.8%であり、更なる予後向上のためには、リンパ節転移のあるStage IVAの進行例に対する術前補助化学療法などの工夫が課題と考えています。また、肝内胆管癌再発例に対しても、適応を吟味しながら積極的に再切除を行って、良好な治療成績を収めてきました（Ann Gastroenterol Surg 2017）。

狭義の胆道癌

狭義の胆道癌は肝外胆管癌、胆嚢癌、乳頭部癌に分類され、肝外胆管癌は、さらに肝門部領域胆管癌と遠位部胆管癌と分けられます。特に肝門部胆管癌は肝胆膵領域の癌の中で最も診断と治療が難しい疾患ですが、MDCTによる画像診断、血管合併切除・再建を含む拡大手術、薬物治療の進歩により治療成績は向上しています。2000年から2021年までに当科で切除を行った胆道癌（n=250）の切除後予後は、5年生存率42.8%と比較的良好です。また、胆道癌切除後のStage別5年生存率はstage Iで76.9%、stage II で43.8%、stage III/IVで 6.8%であり、更なる予後向上のためには、周囲脈管浸潤を伴う局所進行例やリンパ節転移を伴う胆道癌に対する集学的治療体系の確立が喫緊の課題と考えています。

当科では、切除体積率の高い肝切除が必要な症例には、ICG試験とアシアロシンチグラフィで肝予備能を評価し、機能的肝切除率を参考に機能的残肝ICGK値を算出して手術適応を決定しています。残肝機能が不十分と思われる症例に対しては、術前に切除予定肝の門脈塞栓を行っています。残肝機能が増大した後に、葉切除や3区域切除術を行います。また、広範囲胆管癌に対する肝膵同時切除も積極的に行っています（図6）。

図6：広範囲胆管癌に対する右HPD（肝膵同時切除）

癌の浸潤範囲が更に広い切除不能症例や、肝転移など遠隔転移を伴う症例に対しては、第一選択として推奨されているゲムシタビン＋シスプラチン＋デュルバルマブ療法を中心に治療を行い、がん遺伝子パネル検査を用いた効果的な治療法の可能性も探っています。胆道癌はパネル検査による治療可能な遺伝子異常が比較的他の癌種よりも多いことがわかってきました。また切除不能であっても、薬物療法が奏効し、根治切除（Conversion surgery）を行うといった症例も経験し、今後このような症例の適応拡大と長期成績の改善が期待されます（Am J Surg 2020）。

胆嚢癌に対する腹腔鏡下手術が2022年に保険適応となり、当科でも胆嚢床切除あるいは肝S4a+S5切除（＋肝外胆管切除、胆道再建）を積極的に行っています。

ロボット支援下総胆管拡張症手術

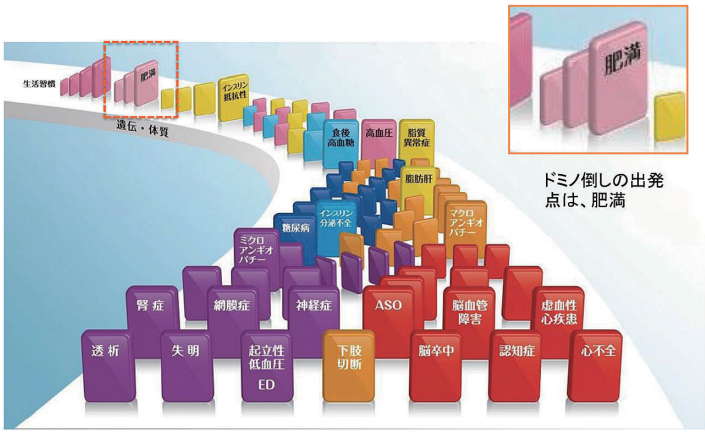
2024年より腹腔鏡下総胆管拡張症手術が保険収載され、当院でも2025年より本術式を積極的に導入し、その経験をもとに2025年よりロボット支援下総胆管拡張症手術を導入しました。拡大視効果と多関節機能を得意とするロボット手術の長所が反映される疾患と考えられ、今後その成績改善が期待されます。

肥満症治療センター

はじめに

肥満症は単なる体重増加にとどまらず、糖尿病・高血圧・脂質異常症・閉塞性睡眠時無呼吸症候群・非アルコール性脂肪肝疾患(NAFLD/NASH)など、さまざまな代謝性疾患の温床となる全身性疾患です。特に内臓脂肪蓄積型肥満はその病態の上流に位置し、遺伝的素因に環境因子が加わることで、各種生活習慣病が連鎖的に発症します。この連鎖を「メタボリックドミノ」として表現する概念が知られています(図1)。

肥満症は生活の質(QOL)を著しく損うのみならず、寿命の短縮や医療費の増大といった社会的負担にも直結する疾患です。とりわけ、近年は内科的治療で十分な効果が得られない重度肥満例に対し、外科的介入による「減量・代謝改善手術(Metabolic Surgery)」の有効性が国際的に注目されています。単なる体重減少にとどまらず、糖尿病の寛解や循環器疾患リスクの低下など、全身の健康改善を目指す治療として、近年注目を集めています。



伊藤裕:日本臨牀,61(10),1837-1843,2003

図1:メタボリックドミノ

糖尿病/糖尿病予備群
HbA1c≧6.0%の割合(40歳～74歳)

男性	女性
26.75%(全国1位)	21.83%(全国1位)

メタボリック症候群(内臓脂肪蓄積)
腹囲≧85cm(男性)、≧90cm(女性)(40歳～74歳)

男性	女性
54.52%(全国3位)	19.02%(全国6位)

特定健診(厚生労働省)第9回NDBより解析

図2:熊本県における糖尿病とメタボリック症候群の現状

熊本県における肥満と代謝疾患の現状

日本人における肥満は年々増加しており、1970年代にはBMI25以上の割合は男性12.3%、女性16.4%であったのに対し、2018年には男性26.4%、女性18.0%と、特に男性で増加が認められます。

熊本県では全国平均と比較して肥満率がやや高く、特に中高年層において内臓脂肪型肥満の増加が顕著です。県内におけるBMI25以上の肥満者の割合は男性33.1%、女性21.7%と報告されています。また、熊本県はHbA1c 6.0%以上の患者の割合が全国で最も高く、糖尿病通院患者は推計で11万人を超えるとされており、深刻な状況です(図2)。

肥満に起因する生活習慣病の増加は、県民の健康寿命を短縮させるだけでなく、医療費・介護費の増大、就労機会の制限といった社会経済的問題にも直結しており、肥満症に対する根本的かつ持続的な治療提供体制の構築が急務となっています。

熊本大学病院における肥満症治療への取り組み

2024年には、持続性GLP-1受容体作動薬の肥満症治療薬としての承認や、減量代謝改善手術の保険適用範囲の見直しが行われるなど、わが国の肥満症治療は大きな転換期を迎えました。

こうした動きを受け、熊本大学病院では2025年1月、代謝内科の窪田直人教授をセンター長、消化器外科の岩槻政晃教授を副センター長として、「肥満症治療センター」を新たに開設いたしました(図3)。

当センターは、内科・外科のみならず、麻酔科・精神科・看護部・薬剤部・栄養部・心理支援・リハビリテーション部門等が連携する診療科・職種横断的なセンターです。内科的・外科的治療、術前後の包括的管理、行動療法や栄養指導などを一体化させ、肥満症に対する質の高い包括的医療を提供し

図3:熊本大学病院肥満症治療センター設立時

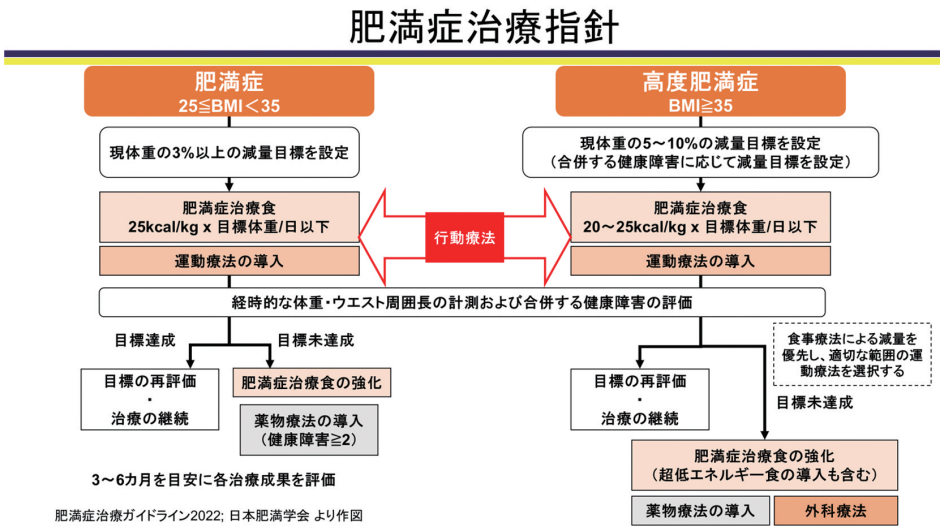


図4：肥満症における治療アルゴリズム

ています。多職種合同カンファレンスを定期的に開催し、医学的適応だけでなく、心理社会的背景・生活環境・身体機能等を総合的に評価し、患者一人ひとりに最適な治療戦略を提案しています。

減量・代謝改善手術（Metabolic Surgery）について

肥満症治療ガイドラインでは、まずは行動療法や運動療法に加えて、薬物療法を6ヶ月以上行った上で効果が得られない症例を、外科的治療の適応としています（図4）。

腹腔鏡下スリーブ状胃切除術は、BMI35以上かつ糖尿病、高血圧、脂質異常症、閉塞性睡眠時無呼吸、非アルコール性脂肪肝疾患のうち1つ以上合併、あるいはBMI32～34.9で上記疾患を2つ以上合併している患者が適応となります。また、2024年度（令和6年度）の診療報酬改定では、「腹腔鏡下スリーブ状胃切除術」に加え、新たに「スリーブ・バイパス術（スリーブ状胃切除術＋十二指腸・空腸バイパス併施）」が保険収載されました。

一方で、減量・代謝改善手術は、まれに重篤な合併症を引き起こす可能性もあることから、導入にあたっては高い安全性と医療水準が求められます。そのため、日本肥満症治療学会および日本内視鏡外科学会は合同で導入要件を発表しており、多職種によるチーム医療体制の構築や、関連セミナー受講等を明示しています。

当センターでは、スリーブ状胃切除術の導入にあたり、毎月のチームカンファレンスを継続し、2025年5月にはチームで「第16回肥満症総合治療セミナー」にも参加いたしました。こうした準備を経て、2025年8月より、消化器外科を中心として減量・代謝改善手術を開始しました。

まずは腹腔鏡下スリーブ状胃切除術を実施いたします。本術式では、胃の大弯側約80％を縦に切除し、細長いチューブ状（スリーブ）に形成することで摂取量の制限と、食欲ホルモン（グレリン）の分泌抑制を同時に実現します（図5）。術後1年で平均体重減少率は25～30％に達し、2型糖尿病や高血圧、脂質異常症の改善や寛解も数多く報告されています。スリーブ状胃切除を安全に導入した上で、より強い代謝改善効果をもたらすとされる「スリーブ・バイパス術（スリーブ状胃切除術＋十二指腸・空腸バイパス併施）」導入も視野に入れ、個々の病態に応じた最適な術式選択を進めてまいります。

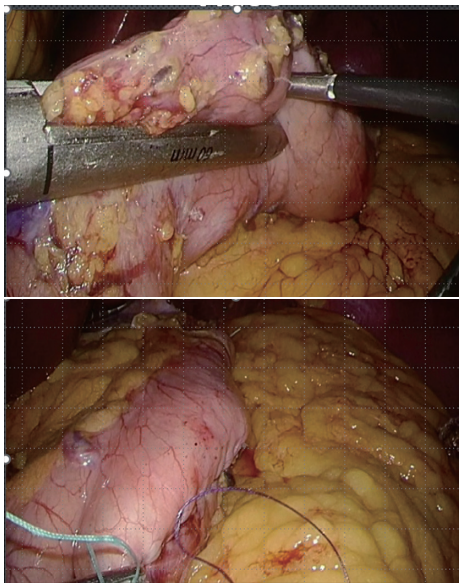


図5：腹腔鏡下スリーブ状胃切除

おわりに

減量・代謝改善手術は単に外科的に減量を達成することが目的ではなく、患者さんの長期的な健康と生活の質を高めることを目指す医療です。術前から術後まで一貫した支援体制が不可欠であり、当院では多職種が連携したチーム医療体制のもと、医学的・心理的・社会的側面を包括的に捉えた治療を提供しています。

今後は熊本県内外の医療機関との連携をさらに強化し、紹介・逆紹介体制の整備、情報発信、教育・研修活動、患者会の開催などを通じて地域全体の診療水準向上に貢献してまいります。また、医療経済面や社会的影響に関する研究・評価にも積極的に取り組み、科学的根拠に基づいた肥満症治療の確立と普及を目指してまいります。

Acute care surgeryグループ

Acute care surgeryについて

Acute care surgery(ACS)とは、急性期外科をさし、緊急外科医療に特化した比較的新しい外科分野の概念です。外科領域の専門細分化が進み、外科的緊急事態に適切に対応可能な外科医へのアクセスが危機的状況にある中、社会のニーズとして2005年に米国で初めて提唱されました。本邦では、2009年に日本ACS学会が設立されました。その後、2019年よりACS認定外科医制度が発足し専門性を高めています。当科にもAcute care surgery認定外科医が2020年より赴任し、教育指導にあたっています。Acute care surgeryの診療領域は、4本柱とされており、①外傷外科(Trauma surgery)、②緊急一般外科(Emergency surgery)、③外科的集中治療(Surgical critical care)、④Surgical rescueがあります(図1)。

Acute care surgeryの実際

緊急一般外科(Emergency surgery)

急性腹症(虫垂炎、消化管穿孔、腸閉塞、胆嚢炎、腸管壊死など)や急性出血、ヘルニア嵌頓など緊急性の高い非外傷性疾患への対応をさします。病態の多様性と診断・治療判断のスピードが問われる領域です。当科では救急外来に来られた緊急疾患に対する外科治療はもちろんのこと、併存疾患を多く抱えた外来・入院患者様の救急疾患に対しても安全に緊急手術を実施しています(図2)。

Surgical rescue

手術や侵襲的な処置の後に生じた合併症に対する救済処置と定義されています。Surgical rescueの患者様は、当科の患者様だけではなく、当院の他の診療科や他施設からの紹介も多く受け入れています。Surgical rescueの患者様はそれ以外の患者様と比較して、在院期間や死亡率が高いと報告されていますので、慎重な対応が必要となってきます。我々は、他診療科や集中治療室とも共同し治療にあたっています(図3)。

Acute care surgeonの育成

当科では、2024年度よりAcute care surgeonを育成すべくプログラムを開始しました(図4)。ACSに興味のある外科医を対象として、外科専門医プログラム終了後に、幅広い救急の知識とスキルを身に着けるべく、救急科専門医プログラムに進学することを推奨しています。最終的に外科専門医と救急科専門医のダブルボードとACS認定外科医を最短で取得できるように指導致します。

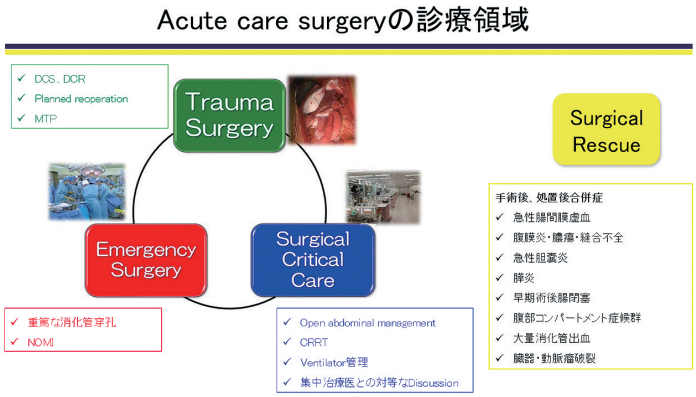


図1：ACSの診療領域

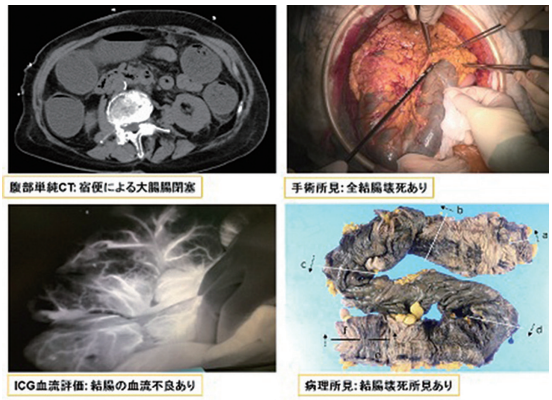


図2：特発性大腸壊死に対するハルトマン手術

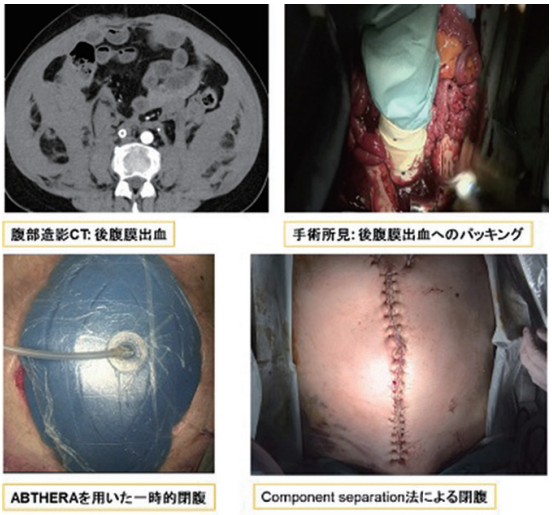


図3：後腹膜出血に対するダメージコントロール手術

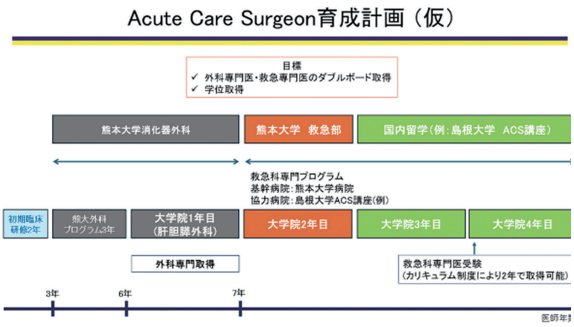


図4：当科におけるACS医育成プログラム案

業　績

学位取得者一覧（計111名）

学位取得者	学位取得日	論文タイトル
平成17年度		
大村谷昌樹	平成17年10月6日	膵分泌性トリプシンインヒビター欠損マウスの膵腺房細胞におけるオートファジー細胞死
本田　志延	平成17年12月8日	m-calpainの活性化は細胞分裂期における染色体整列に必要である
譚　　暁冬	平成18年3月24日	膵臓細胞の浸潤転移機構に関わる因子の解析
池田　公英	平成18年3月24日	大腸直腸癌における基底膜 IVV 型コラーゲンα5鎖、α6鎖の喪失とCOL4A5、COL4A6共通プロモーター領域のメチル化との関連
本村　　裕	平成18年3月24日	新規癌胎児性抗原 Glypican-3遺伝子導入 ES 細胞由来の樹状細胞を用いた抗腫瘍免疫療法モデルの確立
山本謙一郎	平成18年3月24日	EIPL 療法（腹腔内頻回大量洗浄療法）を用いた膵癌腹膜播種再発に対する予防的治療戦略
前田　圭介	平成18年3月24日	急性膵炎の重症化機構と生命予後予測因子の解析
小森　宏之	平成18年3月24日	肝細胞癌の免疫療法に有用な新規癌胎児性抗原 Glypican-3由来のHLA-A2 およびA24拘束性 CTL エピトープの同定
保坂　征司	平成18年3月24日	Heat shock protein105 を標的としたsiRNAによる癌細胞アポトーシスの誘導
水流添　周	平成18年3月24日	SUMO 翻訳後修飾による転写因子 Sox2 のDNA 結合阻害
平成18年度		
王　　鳳山	平成19年3月16日	ラット肝移植における移植前レシピエント血の輸血による生着延長効果
生田　義明	平成19年3月27日	新規ヒト癌関連抗原 Secreted protein acidic and rich in cysteine（SPARC）の癌の診断と治療における有用性
坂本　快郎	平成19年3月27日	HOXA 遺伝子群の転写抑制およびヘテロクロマチン形成におけるメチル化 DNA 結合タンパク質群の協働性
坂本　達彦	平成19年3月27日	微小管と共沈するタンパク質群の質量分析による解析
平成19年度		
陶山　浩一	平成20年3月25日	急性膵炎の重症化におけるオートファジーと CHOP の役割
原尾美智子	平成20年3月25日	cDNAマイクロアレイ解析により同定された免疫療法に有用な新規肺癌抗原 CDCA1（cell division cycle associated 1）
橋本　大輔	平成20年3月25日	オートファジーがトリプシノーゲンの活性化を介して急性膵炎を惹起する
平成20年度		
高橋　将史	平成21年2月20日	IL-8 レセプターのシグナル伝達系制御を介したクルクミンによる好中球ケモタキシス阻害の解析
馬場　祥史	平成21年3月25日	食道癌における基底膜構成蛋白質（IV 型コラーゲン及びラミニン -332）の発現と癌悪性度との関連について
今井　克憲	平成21年3月25日	膵癌の免疫療法に有用な新規腫瘍関連抗原の同定と免疫学的解析
新田　英利	平成21年3月25日	感染症および癌におけるプロテアーゼによる補体系活性化非依存性 C5a 遊離と C5a の病態への関与の研究
林　　洋光	平成21年3月25日	肝硬変症例に対する部分的脾塞栓術における至適脾梗塞範囲に関する研究
宮本　裕士	平成21年3月25日	腫瘍抑制因子 p53 の新規標的遺伝子およびアポトーシス制御因子としての UNC5A の同定
尾崎　宣之	平成21年3月25日	膵癌における Serine protease inhibitor, Kazal type 1 の発現とその意義
石本　崇胤	平成21年3月25日	胃癌形成において CD44 はPGE2 シグナルによる胃幹細胞様細胞の増殖に機能的な役割を果たしている
赤星　慎一	平成21年3月25日	胃癌においてHMGA1 はWnt ／β -catenin 経路で発現誘導されて細胞増殖を維持する
増田　稔郎	平成21年3月25日	肝細胞癌の局所凝固療法、肝切除後の予後予測因子の検討
平成21年度		
古賀　宣勝	平成21年9月17日	イムノビーズによる便中大腸癌細胞の分離と大腸癌診断実用化研究
日吉　幸晴	平成21年9月25日	食道扁平上皮癌におけるmicroRNAの発現機能解析ならびに標的遺伝子の同定

学位取得者	学位取得日	論文タイトル
岩槻　政晃	平成21年12月25日	大腸癌における細胞周期調節因子 FBXW7遺伝子の発現低下の臨床病理学的意義
今村　　裕	平成22年3月25日	胃癌腹膜播種モデルに対するアデノウイルスを用いたOncolytic suicide gene therapyの有用性
井上　光弘	平成22年3月25日	新規抗原 SPARCを標的とした癌免疫療法の開発
井田　　智	平成22年3月25日	コリン欠乏エチオニン食による慢性膵炎モデルマウスの作製と解析
岡部　弘尚	平成22年3月25日	肝内胆管癌と肝星細胞の相互作用に関する研究
平成22年度		
平島浩太郎	平成23年3月25日	食道扁平上皮癌におけるmTOR 発現の意義と分子標的治療のターゲットとしての可能性
中原　　修	平成23年3月25日	膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）の癌化のメカニズム マイクロ RNA-101 と EZH2 の関連から
佐藤　伸隆	平成23年3月25日	切除不能進行再発大腸癌患者における Transcription-Reverse Transcription Concerted Reaction法を用いた血中循環腫瘍細胞検出の有用性
古橋　　聡	平成23年3月25日	NOとMEK inhibitorの併用療法は、癌細胞株の増殖と浸潤を相乗的に抑制する
平成23年度		
長井　洋平	平成23年12月13日	食道扁平上皮癌における WISP-1発現の意義
岩上　志朗	平成24年3月23日	食道扁平上皮癌におけるLINE-1 のDNA メチル化異常と生命予後の関連性
蔵重　淳二	平成24年3月23日	胃癌におけるmicroRNA-200bによる上皮間葉転換の制御機構の解析
哈　　斯塔	平成24年3月23日	肝内胆管癌におけるM2 マクロファージの役割
齋藤　誠哉	平成24年3月23日	日本人の転移性大腸癌患者に対するベバシズマブの有用性に関する研究
平成24年度		
太田　尾龍	平成25年3月7日	血清胆汁酸と肝切除後の肝再生との関連性
田中　洋平	平成25年3月25日	食道癌における血中 exosomal microRNA の臨床的意義に関する研究
美馬　浩介	平成25年3月25日	TGF-β シグナルを介した肝細胞癌の上皮間葉転換におけるCD44 の機能解析
志垣　博信	平成25年3月25日	上部消化管癌におけるLINE-1 メチル化レベルの網羅的検討
平成25年度		
澤山　　浩	平成26年3月25日	食道扁平上皮癌における PPARY と Glut1 の発現の臨床的意義と新規低分子化合物の抗腫瘍効果の解明
中川　茂樹	平成26年3月25日	肝・胆道癌におけるEZH2 の作用機序及び腫瘍マーカーの臨床的意義に関する研究
村田　飛鳥	平成26年3月25日	消化管癌における遺伝子変異とエピジェネティック変化の網羅的検討
黒木　秀幸	平成26年3月25日	LSKL peptideはTSP-1を介したTGF-βシグナル活性化を抑制して肝切除後の肝再生を促進する
平成26年度		
辛島　龍一	平成27年3月9日	食道癌の術前リンパ節転移診断におけるPET/CT の有用性に関する検討
江藤弘二郎	平成27年3月25日	胃癌における microRNA-FBXW7 pathway を介した Trastuzumab 耐性機序の解明
杉原　栄孝	平成27年3月25日	消化器癌における画瘍間質内マクロファージによる腫瘍進展機構の解明
原田　和人	平成27年3月25日	肝細胞癌におけるLINE-1 メチル化レベルの網羅的解析
平成27年度		
小澄　敬祐	平成27年12月26日	食道癌における代謝関連酵素 Lysine-specific demethylase-1 の発現意義の解明
坂本　慶太	平成28年3月25日	肝内胆管癌・膵癌におけるP-cadherin 発現の意義
泉　　大輔	平成28年3月25日	関連線維芽細胞による CXCL12/CXCR4 シグナルを介した胃癌浸潤機構の解明
高城　　克	平成28年3月25日	GNASR201H と KrasG12D 変異による IPMN モデルマウスの開発

学位取得者	学位取得日	論文タイトル
徳永　竜馬	平成28年3月25日	ヒストン脱メチル化酵素 Jumonji Domain Containing / Lysine（K）-Specific Demethylase
東　　孝暁	平成28年3月25日	肝細胞癌における TAZ（WWTR1）を制御する microRNA の同定
平成28年度		
中村　健一	平成28年12月25日	食道扁平上皮癌において UHRF1 はグローバルなDNA メチル化を制御し、悪性度に寄与する
坂田　和也	平成29年3月9日	Spink3 欠損マウスのX 染色体へ Spink1遺伝子を導入することによる新しい慢性膵炎モデルマウスの樹立
山村　謙介	平成29年3月25日	食道癌におけるフソバクテリウム・ヌクレアタムの存在は癌の悪性度に寄与する
甲斐田剛圭	平成29年3月25日	胃癌における C5a 受容体の役割と RhoA の活性化に関する研究
平成29年度		
近本　　亮	平成29年7月10日	膵癌において術前 PET 高 SUVmax は、Glucose transporter 1の発現に関連し予後を予測できる
大内　繭子	平成29年9月25日	大腸癌の adenoma-carcinoma sequence における EZH2発現の変化
有馬　浩太	平成30年3月25日	膵癌浸潤マクロファージ由来 IL-18 による15-PGDH 発現抑制は膵癌進展を促進している
北野　雄希	平成30年3月25日	食道癌において Nrf2 はグルタチオン代謝への代謝リプログラミングを介して細胞増殖を促進する
三宅　慤輔	平成30年3月25日	胃癌関連線維芽細胞におけるトランスフォーミング成長因子ベータ 1 シグナルの活性化はロンボイド 5 ホモログ 2 の発現を介して運動性を増加させ胃癌細胞の浸潤性を誘導する
宮田　辰徳	平成30年3月25日	肝細胞癌、肝内胆管癌を含む原発性肝癌321症例におけるLINE-1 メチル化レベルの予後予測における重要性
清住 雄希	平成30年3月25日	PLOD2 は胃癌の低酸素環境で発現上昇し、コラーゲン合成を介して腹膜播種進展を促進する 平成30（2018）年度
平成30年度		
黒田　大介	平成31年3月25日	胃癌患者における術前 CONUT スコアの長期予後予測因子としての意義
江藤　二男	平成31年3月25日	RNF43遺伝子座における機能喪失変異が大腸癌の発生および進行に及ぼす影響
塚本　雅代	平成31年3月25日	膵癌における腫瘍浸潤マクロファージ由来のTNF-αがPD-L1 の発現を増強し、予後不良の原因となる
八木　泰佑	平成31年3月25日	腫瘍関連マクロファージは食道癌のPD-L1発現と予後に影響する
古閑　悠輝	平成31年3月25日	GIST における再発予測マーカーとしての細胞周期調節因子 FBXW7 の有用性
山尾　宣暢	平成31年3月25日	膵癌における Caveolin-1 を指標とした癌関連線維芽細胞の老化は腫瘍浸潤を促進する
梅﨑　直紀	平成31年3月25日	LOX（Lysyl oxidase）は上皮間葉転換（EMT）を誘導し、肝細胞癌の肝内転移を予測する
平成31年度／令和元年		
Rebecca Kalikawe	令和2年3月24日	食道癌における Lysyl oxidase 発現と予後、ゲノム全体の低メチル化との関係
岡留　一雄	令和2年3月24日	食道癌における PD-L1 および PD-L2 の発現の意義
内原　智幸	令和2年3月24日	Cancer associated fibroblasts 0 Annexin A6 B1 integrin-FAK-YAP シグナルを介した抗がん剤抵抗性を促進する
山下　晃平	令和2年3月24日	胃癌におけるトラスツズマブのNK 細胞活性を介したPD-L1発現制御の解明
中尾　陽佑	令和2年3月24日	膵癌における Rho ファミリー関連タンパク質 ARHGEF2 は癌増殖と浸潤に影響を与え、予後不良に関与する
令和2年度		
園田　明莉	令和3年1月7日	局所進行食道扁平上皮癌に対する術前化学療法（NAC）前後のTotal Lision Glycolysis の比
問端　　輔	令和3年3月9日	食道胃接合部腺癌におけるマイクロサテライト安定性による臨床病理学的、分子生物学的、免疫学的および予後解析
令和3年度		
伊東山瑠美	令和4年1月11日	PHGDH の発現誘導と3-PG の蓄積を介したセリン生合成系への代謝シフトが膵癌の腫瘍増殖を促進する
坂本　悠樹	令和4年2月7日	大腸癌肝転移における細菌 Fusobacterium nucleatum と腫瘍免疫の関連

学位取得者	学位取得日	論文タイトル
松村　和季	令和４年３月25日	Thrombospondin-1の過剰発現は膵癌におけるSmad4発現低下を促進しTGF-β活性化を介して悪性度を進展させる
山根　大侍	令和４年３月25日	大腸癌微小環境における細菌 Fusobacterium nucleatumと鉄の関連
森永　剛司	令和４年３月25日	胃癌におけるNK細胞との相互作用によるHLA-E発現とsoluble HLA-Eの動的変化
令和４年度		
大徳　暢哉	令和４年８月８日	大腸癌患者における術前骨格筋量と腫瘍浸潤リンパ球、予後との関連
野元　大地	令和４年８月８日	Fusobacterium nucleatumはNOD1/RIPK2/NF-κB経路を介して食道扁平上皮癌の進展に寄与する
胡　　熙晨	令和4年12月25日	15-PGDHの下方制御は脂肪酸代謝の機能不全によるT細胞の枯渇を通じてMASH-HCCの発生を促進する
布　　魯克	令和５年１月23日	腫瘍微小環境の15-PGDH欠損は膵臓癌における線維性腫瘍形成と血管新生を促進する
秋山　貴彦	令和５年３月９日	PDGFRα/β阻害による腫瘍間質リプログラミングは、線維化腫瘍における抗PD-1免疫療法の有効性を高める
遊佐　俊彦	令和５年３月９日	肝細胞癌腫瘍辺縁の免疫細胞が予後に与える影響
魏　　峰	令和５年３月25日	FAP陽性の癌関連線維芽細胞を可視化するtdTomatoトランスジェニックマウスモデルの作製
米村　敦子	令和５年３月25日	間葉系の特徴を有する中皮細胞は腫瘍促進性の微小環境を形成することで腹膜播種を進展する
上村　紀雄	令和５年３月25日	スタチンは膵癌に対して、JNKシグナル活性化を介してYAP/TAZ発現を抑制することで抗腫瘍効果を発揮し、PD-L1発現を抑制することで免疫抑制を是正する
令和５年度		
北村　文優	令和６年１月18日	癌関連線維芽細胞は膵癌の産生する乳酸を再利用することで繊維性の免疫抑制的微小環境を維持する
柳　　昭	令和６年３月25日	高血糖は膵癌に代謝的リプログラミングを誘導し、YAP/TAZ-Hedgehogシグナル軸を介して上皮間葉系転移を促進する
張　　峻	令和６年３月25日	混合極性化マクロファージ由来のIL-1βは線維芽細胞を活性化し、がんを促進する微小環境を相乗的に形成する
堀之内　誠	令和６年３月25日	新規評価法に基づく肺の気腫性変化の重症度と食道癌術後合併症との関連
武末　　亨	令和６年３月25日	大腸癌肝転移におけるRAS変異とJSHBPSノモグラムスコアを組み合わせた肝転移切除後の再発予後予測の可能性
令和６年度		
娄　　美月	令和６年９月25日	癌関連線維芽細胞由来IL-8はNF-κB経路を介して胃癌におけるPD-L1発現を制御する
原　　淑大	令和７年３月25日	食道胃接合部癌および胃癌における酸性環境と患者予後に関連したFusobacterium nucleatumの存在
松本　嵩史	令和７年３月25日	統合された肝臓フェロトーシス遺伝子シグネチャーがフェロトーシスの病原的特徴を決定する
木下翔太郎	令和７年３月25日	肝細胞癌患者における微小血管侵襲予測に対するラジオミクスと臨床予測因子の実臨床下における有用性の比較：大規模コホート研究
湯本　信成	令和７年３月25日	宿主由来 ANGPTL2による免疫抑制性腫瘍微小環境の形成と免疫チェックポイント療法耐性の獲得
武　　曦昱	令和７年３月25日	消化管間葉系腫瘍におけるMCL1を標的としたFBXW7によるイマチニブ感受性の制御

文部科学省科学研究費獲得状況

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
平成17年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究C	化学放射線療法感受性による食道癌治療の個別化に関する研究	2,000千円	0円	2,000千円
平成18年度					
1. 杉田　裕樹	基盤研究C	癌細胞におけるNOによるIRS-1ユビキチン化の分子生物学的メカニズムの解明	3,500千円	450千円	3,950千円
2. 本田　志延	基盤研究C	m-calpainを標的分子とした分裂期分子標的治療の基礎的研究	3,500千円	480千円	3,980千円
3. 蒲原　英伸	基盤研究C	癌の間質浸潤過程におけるコラーゲンレセプターによる負の制御機構の解明	3,500千円	420千円	3,920千円
4. 大村谷昌樹	若手研究B	PSTI欠損に伴い発生する生物学的諸現象（オートファジー細胞死、膵炎）の機構解析	2,900千円	210千円	3,110千円
平成19年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究B	miRNAをターゲットとした消化器癌に対する新たな治療戦略の開発	14,200千円	4,260千円	18,460千円
2. 林　尚子	基盤研究C	血中遊離癌細胞中のcancer stem cellの同定と機能解析	3,300千円	570千円	3,870千円
3. 廣田　昌彦	基盤研究C	遺伝子改変マウスを用いた急性膵炎発症機序の解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
4. 石川　晋之	基盤研究C	膵癌の浸潤・転移機序の解明と分子標的治療法の開発	3,400千円	1,020千円	4,420千円
5. 坂本　快郎	研究活動スタート支援	癌におけるMBD1およびhPc2による転写抑制機構を標的とした新規治療法の開発	2,680千円	405千円	3,085千円
平成20年度					
1. 宮成　信友	基盤研究C	食道癌におけるラミミン-332の発現意義と分子標的治療法の開発	3,700千円	1,110千円	4,810千円
2. 高森　啓史	基盤研究C	がん幹細胞理論に基づいたがん根治療法への展開は可能か?	3,600千円	1,080千円	4,680千円
3. 杉田　裕樹	基盤研究C	NOによる蛋白の翻訳後修飾を介した機能制御機構のプロテオーム解析と癌治療への応用	3,600千円	1,080千円	4,680千円
4. 橋本　大輔	基盤研究C	消化器癌におけるオートファジーの機能解析と治療への応用	3,500千円	600千円	4,100千円
5. 蒲原　英伸	基盤研究C	多標的性miRNAのphenotypeを利用した炎症及び癌に対する治療戦略	3,600千円	1,080千円	4,680千円
6. 生田　義明	若手研究B	SPARC を標的分子としたスキルス胃癌に対する診断、治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
平成21年度					
1. 渡邊　雅之	基盤研究C	食道扁平上皮癌のmicroRNA発現異常におけるDNAメチル化の意義	3,500千円	1,050千円	4,550千円
2. 小森　宏之	基盤研究C	ラジオ波凝固療法とグリピカン3ペプチド樹状細胞ワクチンを用いた肝癌の再発予防	3,600千円	1,080千円	4,680千円
3. 別府　透	基盤研究C	門脈塞栓術後の機能的肝再生における胆汁酸の意義と臨床応用	3,500千円	1,050千円	4,550千円
4. 林　尚子	基盤研究C	胃癌播種性骨髄癌症の病態解明と治療薬の開発	3,500千円	1,050千円	4,550千円
5. 美馬　浩介	研究活動スタート支援	消化器癌の染色体不安定性と紡錘体形成チェックポイント蛋白発現の関連	2,000千円	600千円	2,600千円
6. 宮本　裕士	研究活動スタート支援	オートファジーを介したp53遺伝子の癌抑制機能の解明	2,570千円	771千円	3,341千円
平成22年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究B	Exosome 中のmicroRNAを標的とした消化器癌の新規診断・治療法の開発	14,600千円	4,380千円	18,980千円
2. 石川　晋之	基盤研究C	膵癌の発育・進展におけるコレステロール合成経路とTGFBとのクロストークの解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
3. 尾崎　宣之	基盤研究C	PSTIの新規結合タンパク・レセプターの解析	3,400千円	1,020千円	4,420千円
4. 増田　稔郎	若手研究B	癌幹細胞マーカーを用いた肝細胞癌における血中癌細胞の検出とその意義の解明	3,000千円	900千円	3,900千円
5. 馬場　秀夫	萌芽研究	miR-gene pathwayを応用した胃癌における白金製剤感受性因子の同定とその臨床応用	2,800千円	840千円	3,640千円
平成23年度					
1. 石河　隆敏	萌芽研究	拡張現実技術を応用した臨床現場での医療教育手法の検討と開発	1,300千円	390千円	1,690千円
2. 高森　啓史	基盤研究C	発癌におけるマイクロRNAによるエピジェネティクス制御機構の解明	3,900千円	1,170千円	5,070千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
3. 宮本　裕士	基盤研究 C	大腸癌におけるp53 およびオートファジー機能解明と治療への応用	3,900千円	1,170千円	5,070千円
4. 杉田　裕樹	基盤研究 C	一酸化窒素(NO)によるRTKリン酸化制御機構の分子生物学的解析と癌治療への応用	4,000千円	1,200千円	5,200千円
5. 宮成　信友	基盤研究 C	食道扁平上皮癌におけるAKT及びERK pathway関連遺伝子変異の網羅的解析	4,100千円	1,230千円	5,330千円
6. 堀野　敬	基盤研究 C	膵分泌性トリプシンインヒビター抗体を用いた膵癌に対する分子標的治療の開発	4,100千円	1,230千円	5,330千円
7. 長井　洋平	基盤研究 C	食道癌の悪性度を規定するmicroRNAを介した偽遺伝子による遺伝子制御機構の解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
8. 辛島　龍一	基盤研究 C	TRC法を用いた血中遊離大腸癌細胞の検出とその抗癌剤感受性マーカーとしての意義	4,200千円	1,260千円	5,460千円
9. 馬場　祥史	若手研究 A	食道癌の新規治療法の開発を目指したLINE-1 メチル化レベルの網羅的解析	20,100千円	6,030千円	26,130千円
10. 岩槻　政晃	若手研究 B	胃癌腹膜播種を規定する新たなmicroRNA-gene pathwayの解明とその臨床応用	3,200千円	960千円	4,160千円
11. 平島浩太郎	若手研究 B	mTORは食道扁平上皮癌において分子標的療法のtargetになりうるか?	3,300千円	990千円	4,290千円
12. 岡部　弘尚	若手研究 B	肝内胆管癌における癌関連線維芽細胞（ＣＡＦ）の分離・機能解析と治療標的の検索	3,200千円	960千円	4,160千円
13. 土居　浩一	研究活動スタート支援	質量分析を用いた肝細胞癌における癌幹細胞特異的なバイオマーカーの解明	2,500千円	750千円	3,250千円
14. 蒲原　英伸	基盤研究 C	TRAILの好中球排除によるSIRSの制御機構の解明とその臨床応用	4,000千円	1,200千円	5,200千円
15. 馬場　祥史	萌芽研究	食道癌の新規治療法の開発を目指したIGF2 DMR0 メチル化レベルの網羅的解析	2,900千円	870千円	3,770千円
16. 別府　透	基盤研究 C	肝細胞癌における血中癌幹細胞の同定と標的治療の開発	4,100千円	1,230千円	5,330千円
17. 近本　亮	基盤研究 C	胆管癌におけるポリコーム蛋白の発現意義とエピジェネティック治療への応用	4,100千円	1,230千円	5,330千円
18. 坂本　快郎	基盤研究 C	大腸癌に対する新しいエピジェネティックテラピーの開発	3,900千円	1,170千円	5,070千円
19. 中原　修	基盤研究 C	膵臓癌における肝転移を規定するＬｏｎｇ　ｎｏｎ-ｃｏｄｉｎｇ ＲＮＡの機能解析	4,100千円	1,230千円	5,330千円
20. 石本　崇胤	基盤研究 C	癌におけるCD44 を介したROS制御機構の解明と治療への応用	3,900千円	1,170千円	5,070千円
21. 岩上　志朗	基盤研究 C	胃癌におけるＬＩＮＥ−１メチル化レベルの網羅的解析	4,100千円	1,230千円	5,330千円
22. 齋藤　誠哉	基盤研究 C	食道扁平上皮癌薬剤耐性を規定するｍｉｃｒｏＲＮＡ-ｇｅｎｅ ｐａｔｈｗａｙの解明	4,100千円	1,230千円	5,330千円
23. 木下　浩一	基盤研究 C	食道癌におけるｍＴＯＲを標的としたｍｉＲＮＡ replacement therapy	4,100千円	1,230千円	5,330千円
24. 渡邊　雅之	基盤研究 C	食道癌生検のｍｉｃｒｏＲＮＡ発現による化学療法感受性予測に基づく個別化治療の確立	4,100千円	1,230千円	5,330千円
平成24年度					
1. 生田　義明	若手研究 B	膵癌、胆道癌に高発現するFOXM1を標的とした分子標的治療の開発	3,200千円	960千円	4,160千円
2. 林　洋光	若手研究 B	TGF-β活性化機構に着目した肝再生の分子機序解明と肝再生促進の新規治療法の開発	3,200千円	960千円	4,160千円
3. 今井　克憲	若手研究 B	消化器癌におけるCDH3 プロモーター領域の脱メチル化の意義	3,300千円	990千円	4,290千円
4. 橋本　大輔	研究活動スタート支援	通常型膵癌におけるオートファジーの機能解析と新しい膵癌治療法への応用	2,300千円	690千円	2,990千円
5. 馬場　秀夫	萌芽研究	大腸癌肝転移巣における抗癌剤感受性関連遺伝子の網羅的ゲノム・エピゲノム解析	2,800千円	840千円	3,640千円
平成25年度					
1. 石川　晋之	基盤研究 C	消化器癌の発育進展に関与する脂質代謝のメカニズム解明と新規治療法の開発	3,800千円	1,140千円	4,940千円
2. 吉田　直矢	基盤研究 C	食道扁平上皮癌に対する第3世代ＰＰＡＲγ　ａｇｏｎｉｓｔの抗腫瘍効果・機序の解明	3,800千円	1,140千円	4,940千円
3. 岩槻　政晃	基盤研究 C	ｍｉｃｒｏＲＮＡ-ｇｅｎｅ ｐａｔｈｗａｙを介した胃癌トラスツズマブ耐性機序の解明	3,800千円	1,140千円	4,940千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
4. 新田　英利	基盤研究 C	癌細胞におけるC5aRの発現と機能解析と新しい治療法の開発	3,900千円	1,170千円	5,070千円
5. 尾﨑　宣之	基盤研究 C	正常胃粘膜上皮および胃癌におけるSPINK1の機能解析	3,800千円	1,140千円	4,940千円
6. 蔵元　一崇	基盤研究 C	肝細胞癌進展におけるＴＧＦβ－Ｈｉｐｐｏシグナルのクロストークに関する研究	3,800千円	1,140千円	4,940千円
7. 日吉　幸晴	基盤研究 C	消化器癌におけるlincRNAの網羅的発現解析ならびに機能解析	3,800千円	1,140千円	4,940千円
8. 平島浩太郎	若手研究 B	食道扁平上皮癌におけるmTOR発現とヘッジホッグシグナル経路の相互作用機序の解明	3,200千円	960千円	4,160千円
9. 今村　　裕	若手研究 B	FGFR2を標的とした食道胃接合部癌に対する新規治療法の確立	3,200千円	960千円	4,160千円
10. 井田　　智	若手研究 B	大腸癌進展におけるSPINK1の分子機構の解明と新規分子標的治療への応用	3,200千円	960千円	4,160千円
平成26年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究 B	消化器癌幹細胞の特性を制御するmicroRNAの同定と治療への応用	12,300千円	3,690千円	15,990千円
2. 宮本　裕士	基盤研究 C	内臓肥満が大腸癌の予後に与える影響とそのメカニズムの解析	3,700千円	1,110千円	4,810千円
3. 宮成　信友	基盤研究 C	消化器癌におけるエピゲノム関連酵素ＴＥＴファミリーおよび5-hmCの解析	3,700千円	1,110千円	4,810千円
4. 堀野　　敬	基盤研究 C	肝内胆管癌におけるCDH3の発現とRho familyとの関連	3,800千円	1,140千円	4,940千円
5. 生田　義明	基盤研究 C	肝血流低下による肝萎縮機構の解明とLSKLpeptideを用いた新規治療法の開発	3,800千円	1,140千円	4,940千円
6. 高森　啓史	基盤研究 C	FXR agonistを用いた肝切除後肝再生促進療法の臨床応用を見据えた基礎研究	3,800千円	1,140千円	4,940千円
7. 林　　尚子	基盤研究 C	microRNAを介した胃癌における抗HER2抗体耐性機序の解明	3,700千円	1,110千円	4,810千円
8. 馬場　祥史	若手研究 A	食道癌の新規バイオマーカー開発を目指したがん代謝のエピゲノム解析	18,300千円	5,490千円	23,790千円
9. 橋本　大輔	若手研究 B	オートファジー抑制による新たな膵癌治療法の開発	2,900千円	870千円	3,770千円
10. 林　　洋光	若手研究 B	肝内胆管癌におけるTGF-β活性化機構に着目した癌進展機構の解明	3,000千円	900千円	3,900千円
11. 増田　稔郎	若手研究 B	肝細胞癌進展におけるポリコーム蛋白を介したマイクロRNAの作用機序解明	2,900千円	870千円	3,770千円
12. 石河　隆敏	基盤研究 C	医学生の参加型臨床実習と手術成績に関する地域共同のプロスペクティブ研究	2,300千円	690千円	2,990千円
平成27年度					
1. 近本　　亮	基盤研究 C	胆管癌におけるエピジェネティクスを標的とした新規分子標的治療薬の検討	3,600千円	1,080千円	4,680千円
2. 坂本　快郎	基盤研究 C	ヒストン脱メチル化酵素を制御するmicroRNAを標的とした新規治療法の開発	3,800千円	1,140千円	4,940千円
3. 中原　　修	基盤研究 C	癌微小周囲環境における補体を介した間質細胞の増殖・転移促進効果に関する研究	3,700千円	1,110千円	4,810千円
4. 齋藤　誠哉	基盤研究 C	食道癌におけるプロモーター領域のメチル化とmicroRNA発現の網羅的解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
5. 今井　克憲	若手研究 B	癌関連線維芽細胞（CAF）を標的とした胆道癌の新規治療法の開発	3,000千円	900千円	3,900千円
6. 藏重　淳二	若手研究 B	モデルマウスを用いた胃癌腹膜播種規定因子の解明と治療標的分子の探索	3,100千円	930千円	4,030千円
7. 黒木　秀幸	若手研究 B	化学療法後の肝類洞閉塞症候群の分子機構解明と抗VEGF抗体療法の有効性の解析	3,000千円	900千円	3,900千円
平成28年度					
1. 石川　晋之	基盤研究 C	大腸癌におけるstatinの抗腫瘍効果メカニズムの解明と新規治療法の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
2. 吉田　直矢	基盤研究 C	胃粘膜内のmicrobiomeと胃癌の悪性度に関する網羅的解析	3,500千円	1,050千円	4,550千円
3. 岩槻　政晃	基盤研究 C	GISTにおける分子標的薬耐性バイオマーカーの同定とその臨床応用	3,600千円	1,080千円	4,680千円
4. 新田　英利	基盤研究 C	癌C5aR、C5a遊離プロテアーゼを標的とした治療法の確立	3,700千円	1,110千円	4,810千円
5. 橋本　大輔	基盤研究 C	癌特異的糖代謝をターゲットとする新しい膵癌治療法の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
6. 林　洋光	基盤研究 C	消化器癌におけるHippo-pathwayを介した癌幹細胞性獲得機構の解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
7. 澤山　浩	若手研究 B	消化器癌におけるPPARγ agonistの代謝関連蛋白制御機構の解明と新規治療法の開発	3,000千円	900千円	3,900千円
8. 石本　崇胤	若手研究 A	癌幹細胞性維持に関与する腫瘍間質由来ニッチ因子の同定と新規治療戦略の確立	18,500千円	5,550千円	24,050千円
9. 石本　崇胤	萌芽研究	アラキドン酸カスケードを介した癌幹細胞制御機構の解明	2,700千円	810千円	3,510千円
10. 中川　茂樹	若手研究 B	脂肪酸代謝、酸化ストレスを介したNAFLD/NASH肝細胞癌の発癌・進展機構解明	3,000千円	900千円	3,900千円
11. 原田　和人	若手研究 B	バレット食道癌の新規バイオマーカー開発を目指したゲノム低メチル化の網羅的解析	3,000千円	900千円	3,900千円
12. 東　孝暁	若手研究 B	肝細胞癌におけるスタチンによる抗腫瘍効果の分子メカニズムの検討	3,000千円	900千円	3,900千円
13. 小澄　敬祐	若手研究 B	消化器癌におけるがん代謝関連酵素 LSD1の機能解析と新規治療法の開発	3,000千円	900千円	3,900千円
14. 徳永　竜馬	若手研究 B	大腸癌における、エピジェネティクスを標的とした新規分子標的治療薬の検討	3,000千円	900千円	3,900千円
15. 岡部　弘尚	若手研究 B	肝細胞癌における癌関連好中球（TAN）の分離解析による役割の解明	3,000千円	900千円	3,900千円
平成29年度					
1. 馬場　祥史	基盤研究 B	食道癌の新規治療法開発を目指したmicrobiomeとエピジェネティクス解析	13,100千円	3,930千円	17,030千円
2. 馬場　祥史	萌芽研究	革新的治療法開発を目指した消化管術後の腸内細菌叢の網羅的解析	4,900千円	1,470千円	6,370千円
3. 美馬　浩介	若手研究 A	大腸癌の抗腫瘍免疫応答と抗癌剤感受性に関わる細菌を標的とした革新的治療法の開発	12,900千円	3,870千円	16,770千円
4. 宮本　裕士	基盤研究 C	大腸癌の新規治療法開発を目指したカヘキシア経路の網羅的解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
5. 今井　克憲	基盤研究 C	サルコペニアにおける免疫学的癌微小環境の意義	3,600千円	1,080千円	4,680千円
6. 黒木　秀幸	基盤研究 C	肝細胞癌におけるTSP-1の発現と術後再発・転移機構の解明および治療法の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
7. 長井　洋平	基盤研究 C	消化器癌におけるCCN familyの網羅的解析と癌進展及び耐性メカニズムの解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
8. 杉原　栄孝	基盤研究 C	大腸癌におけるRNF43遺伝子による腫瘍増殖メカニズムの解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
9. 泉　大輔	若手研究 B	大腸癌幹細胞における抗がん剤耐性獲得メカニズムの解明と治療標的因子の同定	3,200千円	960千円	4,160千円
10. 有馬　浩太	若手研究 B	慢性炎症におけるALDH1陽性細胞分画拡大を介した膵癌進展メカニズムの解明	3,200千円	960千円	4,160千円
平成30年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究 B	革新的治療法開発を目指した抗癌剤耐性に関わる腸内細菌叢の網羅的探索	13,300千円	3,990千円	17,290千円
2. 馬場　秀夫	萌芽研究	革新的治療法開発を目指した腸内細菌叢とサルコペニアの網羅的解析	4,800千円	1,440千円	6,240千円
3. 高森　啓史	基盤研究 C	膵癌における補体 C5a受容体を介した癌と間質の相互作用に関する研究	3,500千円	1,050千円	4,550千円
4. 近本　亮	基盤研究 C	膵癌進展におけるＴＧＦβ－Ｈｉｐｐｏシグナルのクロストークに関する研究	3,500千円	1,050千円	4,550千円
5. 増田　稔郎	基盤研究 C	肝内胆管癌におけるCXCL12の肝転移促進機序の解明と革新的治療開発への基盤研究	3,400千円	1,020千円	4,420千円
6. 三宅　慧輔	基盤研究 C	活性化ストローマ細胞とのクロストークを介した炎症性発癌メカニズムの解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
7. 甲斐田剛圭	若手研究	膵癌における解糖系酵素 PGAMの発現意義解明	3,200千円	960千円	4,160千円
8. 北野　雄希	若手研究	肝胆膵領域癌におけるがん代謝関連遺伝子 Nrf2の機能解析と新規治療法の開発	3,200千円	960千円	4,160千円
9. 山村　謙介	若手研究	胃癌の早期発見のための、血中循環型 miRNAに基づく診断signatureの開発	3,200千円	960千円	4,160千円
10. 原田　和人	若手研究	胃癌腹腔内洗浄水中のExosomeによる腹膜再発予測	3,200千円	960千円	4,160千円
11. 宮田　辰徳	研究活動スタート支援	ヒトミニチュア人工肝臓を用いた革新的薬物効果検証モデルの創出	2,300千円	690千円	2,990千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
平成31年度／令和元年					
1. 吉田　直矢	基盤研究C	飲酒喫煙が食道癌診療に及ぼすリスクの包括的評価における平均赤血球容積の意義	3,300千円	990千円	4,290千円
2. 林　洋光	基盤研究C	難治性消化器癌のHippo pathway破綻による癌幹細胞能獲得の機構解明	3,300千円	990千円	4,290千円
3. 日吉　幸晴	基盤研究C	直腸癌微小リンパ節転移検出による革新的直腸癌治療戦略の構築	3,400千円	1,020千円	4,420千円
4. 石川　晋之	基盤研究C	バイオマーカーに沿ったスタチン併用大腸癌治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
5. 澤山　浩	基盤研究C	消化管癌・GISTに対するGLUT1阻害剤を用いた治療法の開発、消化管癌・GISTに対するGLUT1阻害剤を用いた革新的治療法の開発	3,400千円	1,020千円	4,420千円
6. 別府　透（宮田）	基盤研究C	非肝炎ウイルス性肝細胞癌におけるレトロトランスポゾン変化の解明	3,300千円	990千円	4,290千円
7. 中川　茂樹	若手研究	網羅的遺伝子解析に基づいた、DKK2を標的とした胆管癌治療の有効性の検討	3,300千円	990千円	4,290千円
8. 小澄　敬介	若手研究	消化器癌大規模コホートを用いたがん代謝を標的とする革新的新規治療の開発	3,200千円	960千円	4,160千円
9. 徳永　竜馬	若手研究	大腸癌における革新的治療を目指したARID1A変異の意義と有用性の解明	3,300千円	990千円	4,290千円
10. 泉　大輔	若手研究	革新的バイオマーカー開発を目指した胃癌リンパ節転移診断ジーンシグニチャーの樹立	3,300千円	990千円	4,290千円
11. 有馬　浩太	若手研究	慢性炎症に起因するメタボライトを介したNASH肝癌の発癌メカニズムの解明	3,300千円	990千円	4,290千円
12. 清住　雄希	若手研究	胃癌腹膜播種におけるがん免疫システムの解明と革新的バイオマーカーの探索	3,200千円	960千円	4,160千円
13. 古閑　悠輝	若手研究	GISTにおけるイマチニブ耐性因子の網羅的解析と創薬への応用	3,300千円	990千円	4,290千円
14. 八木　泰佑	若手研究	食道がん化学療法に影響を与える腸管内microbiomeの網羅的解析	3,300千円	990千円	4,290千円
15. 梅崎　直紀	若手研究	革新的治療法開発を目指した肝細胞癌におけるLOXの機能的役割の解明	3,200千円	960千円	4,160千円
16. 内原　智幸	若手研究	胃癌の腫瘍間質を介した抗癌剤抵抗性メカニズムの解明	3,200千円	960千円	4,160千円
17. 緒方　陽子	奨励研究	オルガノイド技術を用いた転移性大腸癌バイオバンクの構築	540千円	0千円	540千円
令和2年度					
1. 山下　洋市	基盤研究B	医工連携によるミニチュアヒト肝臓創成とそのex vivo培養がもたらす革新的医療	13,700千円	4,110千円	17,810千円
2. 馬場　祥史	基盤研究B	革新的治療開発を目指した腸内細菌Fusobacteriumと腫瘍免疫の網羅的解析	13,600千円	4,080千円	17,680千円
3. 宮本　裕士	基盤研究C	AIを用いたCTテクスチャ解析による大腸癌肝転移に対する化学療法の治療効果予測	3,300千円	990千円	4,290千円
4. 今井　克憲	基盤研究C	膵癌におけるPD-L1/PD-1クロストークが癌細胞に与える影響	3,300千円	990千円	4,290千円
5. 岩槻　政晃	基盤研究C	胃癌腹膜播種における腫瘍不均一性および腫瘍微小環境を標的とした革新的治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
6. 東　孝暁	基盤研究C	膵癌におけるHippo pathwayと癌微小環境のinteractionの解明	3,400千円	1,020千円	4,420千円
7. 新田　英利	基盤研究C	癌関連線維芽細胞におけるC5a受容体を標的とした膵癌幹細胞制御	3,300千円	990千円	4,290千円
8. 藏重　淳二	基盤研究C	エキソソーム内包microRNA/遺伝子制御による胃癌腹膜播種の原因究明	3,300千円	990千円	4,290千円
9. 塚本　雅代	基盤研究C	新規治療薬開発を目指した腫瘍微小環境におけるPD-L1発現の意義と機序解明	3,300千円	990千円	4,290千円
10. 美馬　浩介	若手研究	非B非C型肝細胞癌の発育進展に関わる新たな細菌を標的とした革新的治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
11. 宮田　辰徳	若手研究	肝内胆管癌におけるDNAメチル化とIDH変異に関する包括的検討	3,300千円	990千円	4,290千円
12. 坂本　悠樹	若手研究	大腸癌患者におけるサルコペニアと腸内細菌の関連	3,200千円	960千円	4,160千円
13. 大徳　暢哉	若手研究	大腸癌における腫瘍免疫が全身性炎症に及ぼすメカニズムの解明	3,200千円	960千円	4,160千円
14. 山下　晃平	若手研究	胃癌における新規免疫チェックポイント機構NKG2A/HLA-Eの制御因子の解析	3,300千円	990千円	4,290千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
15. 遊佐　俊彦	若手研究	肝細胞癌における腫瘍免疫制御機構の機序解明	3,300千円	990千円	4,290千円
16. 石本　崇胤	基盤研究 B	胃癌間質の組織型別分子サブタイピングに基づいた抗ストローマ治療戦略の開発	13,600千円	4,080千円	17,680千円
17. 杉原　栄孝	基盤研究 C	RNF43遺伝子異常によるWNTシグナルネットワークを介した膵発癌機構の解明	3,300千円	990千円	4,290千円
18. 安田　忠仁	基盤研究 C	腫瘍間質細胞によって促進される胃癌腹膜播種進展メカニズムの解明	3,400千円	1,020千円	4,420千円
19. 伊東山瑠美	若手研究	代謝リモデリングを介した膵癌進展メカニズムの解明	3,300千円	990千円	4,290千円
令和3年度					
1. 山下　洋市	萌芽研究	生体吸収形状記憶膵臓クリップを用いた革新的膵切離法に関する医工連携研究	4,900千円	1,470千円	6,370千円
2. 近本　　亮	基盤研究 C	革新的治療法開発を目指した膵癌のKRAS遺伝子変異subtypeの網羅的解析	3,200千円	960千円	4,160千円
3. 中川　茂樹	基盤研究 C	網羅的遺伝子解析に基づいた膵癌に対する新規バイオマーカー及び分子標的治療の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
4. 小澄　敬祐	基盤研究 C	ドラッグリポジショニングによる腫瘍微小環境を標的とした革新的治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
5. 原田　和人	基盤研究 C	革新的治療法開発を目指した食道胃接合部腺癌の網羅的ゲノム解析	3,200千円	960千円	4,160千円
6. 野元　大地	基盤研究 C	FusobacteriumによるNOD/NF-κBを介した食道癌進展機序の解明	3,200千円	960千円	4,160千円
7. 山尾　宣暢	若手研究	YAP/TAZを介した膵癌癌関連線維芽細胞の多様性獲得と癌進展機序の解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
8. 古閑　悠輝	若手研究	GISTにおける薬剤耐性、悪性度に関与する血清バイオマーカーの同定	3,600千円	1,080千円	4,680千円
9. 八木　泰佑	若手研究	食道癌におけるT cell informed phenotypeの網羅的解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
10. 山村　謙介	若手研究	網羅的遺伝子解析に基づいた肝細胞癌微少脈管侵襲診断マイクロRNAシグニチャー樹立	3,600千円	1,080千円	4,680千円
11. 岡留　一雄	若手研究	CCL8によるPD-L2および免疫チェックポイント関連分子発現のメカニズム解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
12. 中村　健一	若手研究	DNAメチル化異常を標的とした消化器癌の新規バイオマーカーおよび治療法の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
13. 問端　　輔	若手研究	革新的免疫治療開発を目指した食道扁平上皮癌の免疫回避機構解明と新規免疫治療の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
14. 石本　崇胤	萌芽研究	血行性がん転移における循環クラスターニッチの全貌解明	4,900千円	1,470千円	6,370千円
15. 有馬　浩太	基盤研究 C	西洋型食生活に関連する腸内フローラによる発癌リスクとそのメカニズム解明	3,200千円	960千円	4,160千円
16. 内原　智幸	若手研究	胃がん間質細胞による新しい血行性転移メカニズムの解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
令和4年度					
1. 馬場　秀夫	基盤研究 B	消化器癌の革新的治療法開発を目指したハダカデバネズミ腸内細菌のマルチオミクス解析	13,500千円	4,050千円	17,550千円
2. 吉田　直矢	基盤研究 C	食道癌手術後の呼吸器合併症減少を目指した革新的リスク評価法の確立	3,200千円	960千円	4,160千円
3. 澤山　　浩	基盤研究 C	CMS 2/3 大腸癌に対する代謝関連蛋白阻害剤を用いた新規治療法の開発	3,300千円	990千円	4,290千円
4. 徳永　竜馬	基盤研究 C	大腸癌に対する革新的治療戦略構築を目指した患者体組成に関する網羅的解析	3,300千円	990千円	4,290千円
5. 遊佐　俊彦	基盤研究 C	肝細胞癌切除新鮮組織からの細胞分離による腫瘍免疫細胞クロストークの解明	3,200千円	960千円	4,160千円
6. 甲斐田剛圭	若手研究	肝癌におけるC5aRとPD-L1阻害剤との相互作用を介した革新的治療の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
7. 清住　雄希	若手研究	大腸癌に対するがん免疫療法における革新的治療予測バイオマーカーの探索	3,500千円	1,050千円	4,550千円
8. 北野　雄希	若手研究	MYCとPGC1αが制御する癌代謝と腫瘍免疫を標的とした新規肝細胞癌治療法の開発	3,500千円	1,050千円	4,550千円
9. 山下　晃平	若手研究	新規免疫治療標的やバイオマーカー同定のための胃癌腹膜播種の動的免疫微小環境の解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
10. 伊東山瑠美	若手研究	糖・アミノ酸代謝シフトによる膵がん代謝制御機構の解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円

研究代表者	分類	研究課題名	直接経費	間接経費	合計
11. 北村　文優	基盤研究 C	がん―ストローマ代謝物クロストークによる膵癌進展メカニズムの解明	3,200千円	960千円	4,160千円
令和5年度					
1. 山村　謙介	基盤研究 C	リキッドバイオプシーを用いた膵癌個別化治療のための腹膜播種予測 miRNA パネルの開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
2. 山根　大侍	基盤研究 C	F. nucleatum による大腸癌進展と鉄の関連	3,600千円	1,080千円	4,680千円
3. 宮田　辰徳	若手研究	アルコール性肝炎によるミトコンドリア PGAM5 を軸とした肝障害のメカニズム解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
4. 大内　繭子	若手研究	大腸癌の抗腫瘍免疫におけるニュートリエピジェネティクスについて	3,600千円	1,080千円	4,680千円
5. 岡留　一雄	若手研究	Fusobacterium が癌関連線維芽細胞と関連して消化器癌へ及ぼす影響のメカニズム解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
6. 大徳　暢哉	若手研究	革新的治療法開発を目指したサルコペニアと腫瘍免疫の統合的解析	3,600千円	1,080千円	4,680千円
7. 石本　崇胤	基盤研究 B	腫瘍間質に依存したシェアストレス抵抗性の獲得と血行性がん転移機構の解明	14,400千円	4,320千円	18,720千円
8. 内原　智幸	基盤研究 C	単一核マルチオーム解析を用いた胃がん間質不均一性の解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
9. 安田　忠仁	基盤研究 C	遠隔臓器コミュニケーションによるスキルス胃癌線維化メカニズムの解明	3,500千円	1,050千円	4,550千円
10. 秋山　貴彦	若手研究	がん関連線維芽細胞を標的とした免疫微小環境リモデリング機序の解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
11. 布　　凌峰	若手研究	メタボリックシンドロームに関連した細胞老化が引き起こす癌転移機序の解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
令和6年度					
1. 岩槻　政晃	基盤研究 C	遺伝性胃癌臨床検体を用いた上部胃癌発癌メカニズムの解明と革新的治療法の確立	3,500千円	1,050千円	4,550千円
2. 林　　洋光	基盤研究 C	がん幹細胞能維持と免疫回避微小環境を誘導する機構解明と新規治療法の開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円
3. 美馬　浩介	基盤研究 C	真菌叢を標的とした消化器癌に対する革新的治療法の開発	3,500千円	1,050千円	4,550千円
4. 中川　茂樹	基盤研究 C	Gene signature による膵癌化学療法の治療効果予測及び新規治療標的の検証	3,500千円	1,050千円	4,550千円
5. 小澄　敬祐	基盤研究 C	消化器癌における腫瘍微小環境を標的としたRadiogenomics解析	3,500千円	1,050千円	4,550千円
6. 山尾　宣暢	若手研究	STING シグナルを介したマクロファージ Efferocytosis 制御による膵がん抑制機序の解明	3,600千円	1,080千円	4,680千円
7. 坂本　悠樹	若手研究	大腸癌患者におけるサルコペニアと腸内細菌叢の関連	3,600千円	1,080千円	4,680千円
8. 上村　紀雄	若手研究	スタチンのYAP/TAZを介したPD-L1の発現低下による抗腫瘍免疫の是正	3,600千円	1,080千円	4,680千円
9. 森永　剛司	若手研究	胃癌におけるHLA-E発現制御メカニズムの解明と治療法開発	3,600千円	1,080千円	4,680千円

助成金獲得一覧

助成金名	研究代表者	研究課題タイトル
平成17年度		
1. 上原記念生命科学財団　研究奨励金	馬場　秀夫	プロテアーゼ活性型レセプター（PAR）をターゲットとした新しい分子標的治療法の開発
2. 文部科学省特別教育研究経費	島田　信也 馬場　秀夫	消化器癌の腹膜播種阻止に向けた新しい予防的治療戦略の開発
平成18年度		
1. 上原記念生命科学財団　研究奨励金	廣田　昌彦	急性膵炎の発生機構と解明
平成20年度		
1. 拠点形成研究 A	馬場　秀夫	遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開
平成21年度		
1. 小林がん学術振興会研究助成金	馬場　秀夫	血清中のmicro RNA発現による消化器癌の化学療法の治療効果判定法の開発と臨床応用
2. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	馬場　祥史	生活習慣と大腸癌の遺伝性変化・予後の解析
3. 内藤記念海外留学助成金	岩槻　政晃	消化器癌の転移を制御するmicro RNA(辞退)
4. 熊本大学医学部　奥窪医学奨励金	岩槻　政晃	大腸癌化学療法 FOLFOXにおける効果予測因子としての血清中新規micro RNAの同定
5. アステラス病態代謝研究会 海外留学補助金	林　　洋光	門脈結紮術後の肝再生及び肝萎縮におけるトロンボスポンジンの機構解析
平成22年度		
1. 一般財団法人藤井節郎記念 大阪基礎医学研究奨励会	馬場　秀夫	microRNAによる消化器癌の抗癌剤耐性化機構の解明とその克服
2. 独立行政法人医薬基盤研究所 「保健医療分野における基礎研究推進事業」	古賀　宣克	子宮体がん検診のためのオートスキャン式蛍光顕微鏡を用いた新しい子宮体がん診断法の開発研究
3. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	橋本　大輔	消化器癌におけるオートファジーの機能解析と治療への応用
4. 熊本大学医学部　奥窪医学奨励金	馬場　祥史	食道癌におけるエピジェネティック変化の網羅的検索
5. 上原記念生命科学財団　研究助成金	岩槻　政晃	胃癌腹膜播種におけるmicro RNAによる新たな診断マーカー
6. 財団法人日本ワックスマン財団 留学費助成金	岩槻　政晃	消化器癌の転移を制御するmicro RNA
7. 武田科学振興財団 医学研究奨励（臨床）	岩槻　政晃	消化器癌におけるmicro RNAを用いた抗癌剤耐性メカニズム解明とその効果予測因子としての臨床応用システムの確立
8. 肥後医育振興会研究助成金	岩槻　政晃	消化器癌の抗癌剤感受性を規定する新規血清 exosome 中のmicro RNAの同定
9. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	林　　洋光	肝再生および肝萎縮メカニズムの解明
平成23年度		
1. 上原記念生命科学財団　研究助成金	馬場　祥史	食道癌におけるIGF2DMR0 メチル化レベルの網羅的解析
2. 小林がん学術振興会研究助成金	馬場　祥史	食道癌のLINE-1 メチル化レベルの網羅的検討
3. 武田科学振興財団	馬場　祥史	新規治療法の開発を目指した食道扁平上皮癌のLINE-1 メチル化レベルの解析
4. 横山臨床薬理研究助成基金	岩槻　政晃	胃癌における白金製剤感受性 micro RNA-genepathwayの同定とその臨床応用
5. 日本医師会　医学研究奨励賞	石本　崇胤	消化器癌細胞におけるCD44 を介したROS 制御機構の解明と治療への応用
6. 消化器癌発生学会　研究奨励賞	石本　崇胤	消化器癌細胞におけるCD44 を介したROS 制御機構の解明と治療への応用
7. 肥後医育振興会　医学研究助成金	石本　崇胤	消化器癌細胞におけるCD44 を介したROS 制御機構の解明と治療への応用
8. 熊本大学医学部　奥窪医学奨励金	石本　崇胤	ROS 制御機構をターゲットとした新しい治療戦略の確立
平成24年度		
1. 上原記念生命科学財団　研究助成金	馬場　秀夫	癌幹細胞を制御するmicro RNAの同定と機能解析
2. 独立行政法人医薬基盤研究所「先駆的医薬品・医療機器研究発掘支援事業」	古賀　宣克	子宮体がん検診のためのオートスキャン式蛍光顕微鏡を用いた新しい子宮体がん診断法の開発研究
3. 日本消化器癌発生学会　研究奨励賞	馬場　祥史	CGH microarrayを用いた食道 LINE-1 hypomethylationの機能的メカニズム解析
4. 公益財団法人　武田科学振興財団 医学系研究奨励	林　　洋光	TGF-β活性化機構による肝再生抑制機構の同定とそれに基づく肝再生療法における新戦略の構築
5. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	岡部　弘尚	肝発癌と肝再生における肝幹細胞の役割解明

助成金名	研究代表者	研究課題タイトル
6. 横山臨床薬理研究助成基金	今村　　裕	食道胃接合部がんに対するFGFR2を標的とした新規治療戦略の確立
7. 熊本大学医学部　奥窪医学奨励金	志垣　博信	食道扁平上皮癌におけるAKT及びERK pathway関連遺伝子変異の網羅的解析
平成25年度		
1. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	石本　崇胤	統合的ゲノム解析による消化器癌制御機構の解明
2. 熊本大学　橋渡し研究・ 新規開発シーズンスタートアップ	林　　洋光	TGF-β活性化機構による肝再生抑制機構の同定とそれに基づく肝再生療法における新戦略の構築
3. 上原記念生命科学財団　研究助成金	今村　　裕	食道胃接合部がんに対するFGFR標的治療法の確立
4. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	中川　茂樹	肝細胞癌におけるマイクロアレイを用いた遺伝子解析
平成26年度		
1. 拠点形成研究 A	馬場　秀夫	代謝を基盤とした癌のグローバル先端研究教育拠点
2. 日本癌治療学会 がん臨床試験研究助成プログラム	宮本　裕士	切除不能進行・大腸癌患者におけるレゴラフェニブによる疲労・倦怠感に対する経口ステロイド剤予防治療の検討
3. 第33回日本癌学会奨励賞	古賀　宣克	剥離癌細胞を対象とした新しい癌診断の開発研究
4. 武田科学振興財団 医学系研究奨励（癌領域）	橋本　大輔	Glut1の機能解析と新しいバイオマーカーとしての検討
5. 三井生命厚生財団 第47回「医学研究助成」	橋本　大輔	S-1による膵癌の微小転移抑制効果
6. 熊本大学　橋渡し研究・ 新規開発シーズンスタートアップ	林　　洋光	TGF-β活性化機構をターゲットとした肝再生促進、肝繊維化抑制療法の開発
7. 横山臨床薬理研究助成基金　研究助成	林　　洋光	TGF-β活性化機構をターゲットとした肝再生促進、肝繊維化抑制療法の開発
8. 九州内視鏡下外科手術研究会 平成26年度研究奨励賞	林　　洋光	腹腔鏡下肝切除の低侵襲性に対する科学的側面からのアプローチ
9. がん集学的治療研究財団 平成26年度一般研究助成	林　　洋光	大腸癌肝転移に対するConversion therapy後の再発予測に対するバイオマーカー研究：化学療法後残存腫瘍内におけるMIB-1 indexの有用性に関する検討
10. 日本消化器癌発生学会　研究奨励賞	林　　洋光	ヒト癌組織における腫瘍抑制シグナル Hippo pathwayの破綻による癌幹細胞獲得機構の解明と臨床的特徴へのアプローチ
11. 熊本大学　橋渡し研究・ 新規開発シーズンスタートアップ	新田　英利	癌細胞におけるC5a受容体の機能解析と新しい治療法の開発
12. 上原記念生命科学財団 海外留学助成リサーチフェローシップ	新田　英利	大腸癌肝転移に対する肝切除をその分子病理学的解析
13. 日本消化器癌発生学会　研究奨励賞	澤山　　浩	嫌気性代謝関連蛋白による抗癌剤体積機序の解明と低分子化合物を用いた新規治療法の開発
平成27年度		
1. 小林がん学術振興会　革新的研究	馬場　秀夫	消化器癌の癌幹細胞における化学療法ならびに治療抵抗性獲得機構の解明と治療へ応用
2. SGH財団　佐川がん研究助成	馬場　祥史	消化器癌術後の生活の質向上を目指した腸内 microbiome変化の網羅的解析
3. 横山臨床薬理研究助成基金	蔵重　淳二	胃癌の化学療法感受性を規定する新規バイオマーカーとしての血清中exosomal microRNAの同定
4. かなえ医薬振興財団研究助成金	蔵重　淳二	切除不能進行胃癌の化学療法感受性を規定する新規バイオマーカーの検索 ～ Conversion therapy が可能な症例予測を目指して～
5. 肥後医育振興会 医学研究助成金	蔵重　淳二	腹膜播種モデルマウスを用いた胃癌腹膜播種の病態解明と治療法の確立
6. 上原記念生命科学財団研究奨励金	蔵重　淳二	胃癌オルガノイドを用いた抗癌剤耐性機序の解明
7. かなえ医薬振興財団海外留学助成金	原田　和人	食道癌における化学放射線療法効果予測因子の網羅的検討
8. 上原記念生命科学財団 リサーチフェローシップ(辞退)	小澄　敬祐	消化器癌におけるがん代謝マーカーの網羅的解析
9. 上原記念生命科学財団 ポストドクトラルフェローシップ(辞退)	東　　孝暁	肝細胞癌におけるマイクロアレイを用いた遺伝子解析
平成28年度		
1. 武田科学振興財団　医学系研究助成	美馬　浩介	消化器癌の癌幹細胞を標的とした新規免疫療法開発のための基礎的・臨床的研究

助成金名	研究代表者	研究課題タイトル
2. かなえ医薬振興財団研究助成金	美馬　浩介	腸内細菌を標的とした新たな大腸癌治療法開発のための研究
3. 上原記念生命科学財団　研究奨励金	美馬　浩介	腸内細菌を標的とした新しい大腸癌治療法の開発
4. かなえ医薬振興財団海外留学助成金	東　　孝暁	HCC-risk signature を用いた門脈塞栓術後の背景肝における肝細胞癌発癌リスクの評価
平成29年度		
1. かなえ医薬振興財団研究助成金	石本　崇胤	慢性炎症に起因した膵癌進展バイオマーカーの同定
2. 金原一郎記念医学医療振興財団 基礎医学医療研究助成金	石本　崇胤	胃癌間質ニッチとのクロストークを介した癌幹細胞性維持機構の解明
3. 武田科学振興財団　医学系研究助成	石本　崇胤	腫瘍炎症環境において間質に依存したスキルス胃がん幹細胞性維持機構の解明
4. 安田記念医学財団　若手癌研究助成	石本　崇胤	網羅的メタボローム解析による膵癌の診断的バイオマーカーの探索
5. 双葉電子記念財団　自然科学研究助成	石本　崇胤	腫瘍間質細胞とのクロストークを介したスキルス胃癌幹細胞性維持機構の解明
6. 新日本先進医療研究財団　研究助成金	石本　崇胤	網羅的メタボローム解析に基づいた膵がん診断的バイオマーカーの探索研究
7. 藤田記念医学研究振興財団（辞退）	原田　和人	食道腺癌におけるFusobacterium nucleatumの発現意義
8. 藤田記念医学研究振興財団	小澄　敬佑	食道癌におけるがん代謝・マイクロバイオーム・腫瘍免疫の統合解析
9. 上原記念生命科学財団　海外留学助成 ポストドクトラルフェローシップ	北野　雄希	大腸癌肝転移における原発巣の局在が与える影響
10. 上原記念生命科学　来日研究生	布　　鲁克	代謝物網羅的解析に基づいた膵癌バイオマーカーの同定
11. 膵臓病研究奨励賞	有馬　浩太	代謝物網羅的解析による膵癌進展バイオマーカーの検索
平成30年度		
1. 公益財団法人　高橋産業経済研究財団	山下　洋市	ミニチュアヒト肝臓の創成とそのex vivo灌流培養が可能にする肝癌に対する革新的オーダーメイド薬物治療
2. がん集学的治療研究財団	宮本　裕士	切除不能大腸癌肝転移に対する人工知能を用いたCTテクスチャ解析による治療効果予測
3. 上原記念生命科学財団　研究助成金	馬場　祥史	消化管癌における血中及び腫瘍浸潤リンパ球のPD-1発現
4. 持田記念医学薬学振興財団 研究助成	石本　崇胤	ストローマ細胞由来因子を標的としたスキルス胃癌腹膜播種治療戦略の開発
5. SGH財団　がん研究助成	石本　崇胤	スキルス胃癌腹膜播種を促進する多様な細胞間ネットワーク機序の解明
6. MSD生命科学財団　研究助成 （がん領域）　研究助成	石本　崇胤	スキルス胃癌腹膜播種を促進する癌 -ストローマ細胞間ネットワーク機序の解明
7. リレー・フォー・ライフ・ジャパン 「プロジェクト未来」	石本　崇胤	スキルス胃がん腹膜播種に対する細胞間ネットワークを標的とした新規薬物療法の開発
8. 日本膵臓病研究財団　膵臓病研究奨励賞	石本　崇胤	代謝リモデリングによる膵癌進展メカニズムの解明
9. 高松宮妃癌研究基金研究助成金	石本　崇胤	スキルス胃癌腹膜播種を促進する細胞間クロストーク機構の解明
10. Non-clinical research collaboration with Eli Lilly 2018-2021（共同研究）	石本　崇胤	To examine the impact of cancer-associated fibroblast inactivation by anti-PDGFR-alpha monoclonal antibody on diffuse-type gastric cancer progression
11. 新日本先進医療研究財団研究助成	林　　洋光	難治性消化器癌におけるHippo-pathwayを介した癌幹細胞獲得・癌免疫回避機構の解明と治療法の開発
12. 若手外科医のための臨床研究助成	中川　茂樹	網羅的遺伝子解析に基づいた、LOXを標的とした新規肝細胞癌治療薬の開発
平成31年度／令和元年		
1. 公益財団法人 高橋産業経済研究財団（継続）	山下　洋市	ミニチュアヒト肝臓の創成とそのex vivo灌流培養が可能にする肝癌に対する革新的オーダーメイド薬物治療
2. 立石科学技術振興財団	宮本　裕士	人工知能を用いたCTテクスチャ解析による消化器癌化学療法の効果予測
3. がん集学的治療研究財団	岩槻　政晃	胃癌腫瘍微小環境における血管新生阻害剤の腫瘍免疫応答賦活化を利用した治療法の開発
4. 小林がん学術振興会　先駆的研究	石本　崇胤	ストローマル・リプログラミングによる新規複合がん免疫療法の開発
5. 武田科学振興財団 医学系研究継続助成	石本　崇胤	腫瘍炎症環境において間質に依存したスキルス胃がん幹細胞性維持機構の解明
6. 上原記念生命科学財団　研究助成金	石本　崇胤	胃癌腹膜播種を促進する細胞間クロストーク機構の解明
7. ノバルティス科学振興財団　研究奨励金	石本　崇胤	腫瘍間質由来エクソソームによる胃がん治療抵抗性機構の解明
8. がん研究振興財団　研究助成	石本　崇胤	腫瘍間質由来エクソソームによる抗がん剤抵抗性獲得メカニズムの解明

助成金名	研究代表者	研究課題タイトル
9. 武田科学振興財団　医学系研究助成	林　　洋光	膵がんにおけるHippo-pathwayを介した癌幹細胞能獲得・癌免疫回避機構の解明と治療法の開発
10. 新日本先進医療財団	原田　和人	食道胃接合部癌の抗癌剤耐性メカニズムの網羅的解析
11. 上原記念生命科学財団 研究奨励金	原田　和人	食道胃接合部癌の個別化医療を目指したゲノム解析
12. 上原記念生命科学財団 海外留学助成 ポストドクトラルフェローシップ	山尾　宣暢	膵癌微小環境におけるYAP/TAZ発現と癌進展機構の解明
13. 上原記念生命科学財団 海外留学助成 リサーチフェローシップ	内原　智幸	シングルセル解析を用いた癌間質分子サブタイプの解明
令和2年度		
1. AMED 橋渡し研究戦略的推進 プログラム preB	山下　洋市	膵液瘻ゼロを実現する生体吸収膵臓クリップの開発
2. 大和証券ヘルス財団	宮本　裕士	高齢者に対する術前リハビリテーションによる骨格筋量・腸内細菌の変化に関する網羅的解析
3. 創発的研究支援事業	石本　崇胤	シングルセル・マルチオミックス解析による線維化シグナルネットワークの全貌解明
4. 新日本先進医療研究財団　研究助成金	石本　崇胤	スキルス胃癌間質ダイバーシティに基づいた抗ストローマ治療戦略の開発
5. 内藤記念財団　研究奨励金	石本　崇胤	スキルス胃癌間質分子サブタイピングに基づいた抗ストローマ治療戦略の開発
6. 武田科学振興財団　医学系研究助成	岩槻　政晃	胃癌における治療誘発細胞老化（therapy-inducedsenescence）を応用した新規免疫チェックポイント NKG2A/HLA-E 阻害剤併用の有用性
7. 日本医師会医学研究奨励賞	岩槻　政晃	遺伝性胃癌臨床検体の網羅的ゲノム解析による上部胃癌の分子生物学的発癌メカニズムの解明
8. 外科学研究助成	林　　洋光	膵癌におけるHippo-pathway 経路破綻によるがん進展機構解明と治療法開発
9. がん集学的治療研究財団	今井　克憲	両葉多発大腸癌肝転移に対する2期的肝切除における、腫瘍学的特性と免疫学的腫瘍微小環境の変化の検討
10. 藤田記念医学研究振興財団	北野　雄希	肝胆膵領域癌におけるがん代謝調節遺伝子の同定と新規治療法の開発
11. 若手外科医のための臨床研究助成	北野　雄希	肝細胞癌におけるがん代謝と腫瘍免疫応答機序の解明
12. 日本膵臓病研究財団	伊東山瑠美	セリン代謝シフトによる膵癌進展メカニズムの解明
13. 上原記念生命科学財団 海外留学助成 ポストドクトラルフェローシップ	山下　晃平	胃癌腹膜播種における腫瘍免疫環境の網羅的解析
14. 武田科学振興財団　医学系研究助成	三宅　慧輔	画像解析技術を応用した腫瘍免疫システムの定量化と意義解明
令和3年度		
1. 上原記念生命科学財団 来日研究生助成金	馬場　秀夫	ハイブリッドマクロファージによる胃癌促進メカニズム
2. 高松宮妃癌研究基金　研究助成金	岩槻　政晃	胃癌におけるdysplasia-adenoma-adenocarcinoma sequenceの分子生物学的解明
3. がん集学的治療研究財団	林　　洋光	膵癌治療におけるYAP/TAZを治療ターゲットとした戦略構築ならびにStatinのDrug repositioningの有用性に関する検討
4. 内視鏡医学研究振興財団	林　　洋光	腹腔鏡・内視鏡合同十二指腸局所切除（DLECS）の安全性と臨床的有用性に関する前向きコホート研究
5. 安田記念医学財団若手癌研究助成	原田　和人	シングルセル解析による胃癌腹膜播種に対する革新的新規薬物療法の開発
6. かなえ医薬振興財団　研究助成金	原田　和人	シングルセル解析による胃癌腹膜播種に対する革新的新規薬物療法の開発
7. SGH財団	美馬　浩介	炎症性シグナルを介したフレイルを有する消化器癌患者の病態解明
8. 日本先進医療研究財団	美馬　浩介	癌免疫微小環境や腸内細菌由来代謝物を介したフレイルを有する消化器癌患者の病態解明
9. 藤田記念医学研究振興財団	徳永　竜馬	大腸癌に対する革新的治療戦略構築を目指した SWI/SNF 複合体変異の有用性の解明
10. 日本消化器癌発生学会	秋山　貴彦	腫瘍微小環境に着目した癌進展メカニズム研究の新展開
令和4年度		
1. 上原記念生命科学財団 来日研究生助成金	馬場　秀夫	全身炎症を背景としたカヘキシア進展メカニズムの解明
2. 日本胃癌学会	岩槻　政晃	胃癌におけるdysplasia-adenoma-adenocarcinoma sequenceの分子生物学的解明
3. 熊本大学病院研究活性化プロジェクト	岩槻　政晃	微量癌細胞検出を基軸とした革新的ながん診療・がん研究技術の開発
4. 中外創薬科学財団 研究助成金	石本　崇胤	難治がんストローマ改変を基盤とした複合がん免疫療法 開発

助成金名	研究代表者	研究課題タイトル
5. 鈴木謙三記念医科学応用研究財団	石本　崇胤	血行性がん転移を促進する糖尿病関連がん微小環境の全貌解明
6. 武田科学振興財団	美馬　浩介	血中マイクロバイオームを標的とした消化器癌の新規バイオマーカーと革新的治療法の開発
7. がん集学的治療研究財団	美馬　浩介	全身性炎症と癌免疫微小環境に着目した肝細胞癌に対する免疫チェックポイント阻害剤の感受性に関わるバイオマーカーの探索
8. 上原記念生命科学財団 _研究奨励金	小澄　敬祐	消化器癌 Precision Medicineを目指した革新的統合解析
令和5年度		
1. 熊本大学病院研究活性化プロジェクト	馬場　祥史	腸内細菌 Fusobacterium nucleatum と がん免疫微小環境　～免疫抑制性マクロファージの観点から～
2. がん集学的治療研究財団	井田　　智	多職種により構成される栄養・運動支持療法チームによる胃癌の短期的・長期的予後改善プログラムの開発と分子メカニズムの解明
3. テルモ生命科学振興財団	井田　　智	新規デバイスを用いた胃切除術後ダンピング症候群の克服
4. 小林がん学術振興会	美馬　浩介	血中微生物由来 DNA と癌免疫微小環境を標的とした消化器癌の新規バイオマーカーと革新的治療法の開発
5. 熊本大学病院医療助成金	江藤弘二郎	消化器外科患者の多職種で連携した「私のカルテ」の導入
6. めばえ研究推進事業 NEO	小澄　敬祐	Radiogenomicsによる消化器癌の革新的新規治療戦略の確立
7. テルモ生命科学振興財団	井田　　智	新規デバイスを用いた胃切除術後ダンピング症候群の克服
8. 上原記念生命科学財団	伊東山瑠美	膵癌特異的なセリン代謝メカニズムについての検証
9. 健康長寿代謝制御研究センター研究助成	白石　裕大	希少がん・膵神経内分泌腫瘍（PNEN）に対するYAP/TAZの分子生物学的意義の解明と新規治療法の開発
令和6年度		
1. 上原記念生命科学財団	岩槻　政晃	食道胃接合部および胃癌におけるFusobacterium nucleatumの存在意義
2. 武田科学振興財団	北野　雄希	肝細胞癌におけるGREM1（Gremlin 1）の上皮間葉転換における機能的役割の解明と薬物治療標的としての有用性の検討
3. 健康長寿代謝制御研究センター研究助成	田尻　拓哉	線維化腫瘍に対する複合がん免疫療法の効果予測バイオマーカー確立

学会賞受賞一覧

受賞者氏名	賞与の名称	研究課題名
平成20年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
生田　義明	第29回癌免疫外科研究会　研究奨励賞	cDNA マイクロアレイ解析による腫瘍特異抗原の探索
増田　稔郎	日本肝胆膵外科学会　学会賞	Intrahepatic dissemination of hepatocellular carcinoma after local ablation therapy
今井　克憲	日本免疫学会　Melchers' Travel Award	Identification of a novel tumor-associated antigen, RAB6KIFL, as a candidate of target for immunotherapy of pancreatic cancer
藏重　淳二	第65回消化器外科学会　優秀ポスター賞	microRNA による食道扁平上皮癌抗癌剤効果予測
平成21年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
林　　尚子	第47回 日本癌治療学会　優秀演題賞	切除不能進行再発大腸癌肝転移に対する化学療法後肝切除の妥当性 ―経済的観点から―
吉田　直矢	第64回日本消化器外科学会総会　演題優秀賞	高齢者の食道亜全摘術において合併症を軽減する手術背景の検討
増田　稔郎	日本肝胆膵外科学会機関誌　Japanese Societ of Hepato-Biliary-Pancreatic Award	Intrahepatic dissemination of hepatocellular carcinoma after local ablation therapy
岩槻　政晃	第189回　大分県外科医会　優秀演題賞	Rhabdoid features を有する胃癌の1例
平成22年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
岩槻　政晃	第18回　JDDW 2010 優秀ポスター演題賞	胃癌転移を制御する骨髄中新規 microRNA、遺伝子の同定
岡部　弘尚	The 1st JSGE International Topic Conference Poster Award	Side population cells in hepatocellular carcinoma have some stem-like properties
藏重　淳二	第9回国際食道学会 Scientific Abstract Award	MicroRNA-21 and -26b are novel markers to predict the sensitivity to chmotherapy in esophageal squamous cell carcinoma
泉　　大輔	第90回日本消化器病学会九州支部例会 学会賞	噴門側胃切除後の縫合不全に対し T-tube 留置，肋間筋弁被覆が有効であった一例
小澄　敬祐	第95回日本消化器病学会九州支部例会 優秀賞	急性膵炎発症を契機に診断された特発性腹腔動脈解離の1例
平成23年度		
芳賀　克夫	ISW 2011 Grassi prize	Evaluation of modified estimtion of physiologic ability and surgical Stress (mE-PASS) in gastric carcinoma surgery
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
石本　崇胤	日本医師会医学研究奨励賞	消化器癌細胞における CD44 を介した ROS 制御機構の解明と治療への応用
石本　崇胤	消化器癌発生学会研究奨励賞	消化器癌細胞における CD44 を介した ROS 制御機構の解明
今井　克憲	日本癌治療学会　優秀示説	単発小型肝細胞癌の初回切除例における微小脈管侵襲、肝内転移の予測因子
岩槻　政晃	9th INTERNATIONAL GASTRIC CANCER CONGRESS YOUNG INVESTIGATOR AWRADS	The clinical significance of isolated tumor cell and host side cell in bone marrow for gastric cancer metastasis
岩槻　政晃	第19回　JDDW 2011 優秀ポスター演題賞	進行胃癌における組織優位性の臨床的意義の検討
平成24年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
馬場　祥史	日本消化器癌発生学会研究奨励賞	食道癌における LINE-1 メチル化レベル～ Epigenetic field defect の観点から～
林　　洋光	DDW 2012 in Sandiego 優秀演題賞 (Poster of Distinction)	Thrombospondn-1-Mediated TGF-beta Signal Activation Is a Novel Therapitic Target for Accelerating Liver Regeneration
平島浩太郎	第7回 ISCRT　Poster presentation award (賞金20万円)	Phosphorylated mTOR activation and therapeutic effects of everolimus (RAD001) in esophageal squamous cell carcinoma
藏重　淳二	第10回 Asian Clinical Oncology Conference of the Asian Clinical Oncology Society Merit Award	MicroRNA-200b Regulates Cell Proliferation, Invasion, and Migration by Directly Targeting ZEB2 in Gastric Carcinoma
美馬　浩介	Special Award for Cancer Research (The 8th International Symposium on Cancer Research and Therapy)	CD44s regulates the TGF-beta-mediated mesenchymal phenotype and is associated with poor prognosis in patients with hepatocellular carcinoma
平成25年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
馬場　祥史	第113 回日本消化器外科学会 Young Investigator of the Year	Pyrosequencing technology を用いた食道癌のエピゲノム解析～個別化治療を目指した translational research として～
石本　崇胤	Best Presentation Award of JSGE International Topic Conference	CD44 expression via miR-328 suppression in Helicobacter pylori infected gastric mucosa causes cancer initiation and progression
澤山　　浩	第51回日本癌治療学会学術集会優秀演題賞	食道扁平上皮癌に治する新規 PPAR gamma agnist の抗腫瘍効果・機序に関する検討
澤山　　浩	第113回日本外科学会定期学術集会総会 Young Researcher Award	食道扁平上皮癌に治する新規低分子化合物 CS7017 (PPARG agnis) t の抗腫瘍効果
中川　茂樹	2013 AACR Scholar in training award	Enhancer of zeste homolog 2 (EZH2) promotes progression of cholangiocarcinoma by regulating cell cycle and apoptosis
中川　茂樹	第113回日本外科学会定期学術集会総会 Young Researcher Award	胆管癌において EZH2 は p16 INK4A, p27KIP1 を制御し，癌の進展に寄与する

受賞者氏名	賞与の名称	研究課題名
平成26年度		
別府　　透	JDDW2014 第12回日本消化器外科学会大会優秀演題賞	肝癌治療における 99mTc-アシアロ SPECT CT fusion 画像の有用性
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
古賀　宣勝	第73回日本癌学会　奨励賞	剥離癌細胞を対象にした新しい癌診断の開発研究
林　　洋光	第25回日本消化器癌発生学会研究奨励賞	肝細胞癌進展における Hippo-pathway による癌幹細胞マーカー CD90 発現制御機構の解明
林　　洋光	九州内視鏡下外科研究会研究奨励賞	服腔鏡下肝切除の低侵襲性に対する科学的側面からのアプローチ
今村　　裕	JSGS Young Investigator of the Year 2014（消化器外科学会）	なし（過去の業績に対して）
岡部　弘尚	American Society for Investigative Pathology, Annual Meeting Traveler’s award	Wnt signaling regulates hepatobiliary repair following cholestatic liver injury in mice.
藏重　淳二	第204回大分県外科医会例会　優秀	胃癌腹膜播種モデルマウスを用いた腹膜播種規定因子の解明
澤山　　浩	第114回日本外科学会定期学術集会総会プレナリーセッション	食道扁平上皮癌における Glut1 の発現と Microvessel density に関する検討
澤山　　浩	第25回日本消化器癌発生学会研究奨励賞	嫌気性代謝関連蛋白による抗癌剤耐性機序の解明と低分子化合物を用いた新規治療法の開発
原田　和人	第22回日本消化器関連学会週間ポスター優秀演題賞	食道扁平上皮癌におけるサルコペニアと栄養評価指数（PNI, mGPS）との関係
平成27年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
渡邊　雅之	日本胸部外科学会優秀論文賞	Outcomes of lymphadenectomy for lymph node recurrence after esophagectomy or definitive chemoradiotherapy for squamous cell carcinoma of the esophagus.
馬場　祥史	日本医師会研究奨励賞	食道癌における“がん代謝”に関わる epigenomic biomarker の網羅的解析
馬場　祥史	JSS International guest scholars exchange fellow	なし（過去の業績に対して）
石本　崇胤	日本消化器外科学会賞（JSGS Young Investigator of the Year 2015）	課題名なし
岩槻　政晃	日本消化器癌発生学会研究奨励賞	消化管間質腫瘍（gastrointestinal stromal tumor ; GIST）におけるイマチニブ耐性に関与する microRNA-gene pathwayの同定
泉　　大輔	第115回日本外科学会定期学術集会優秀演題賞（プレナリーセッション）	Cancer Associated Fibroblasts による CXCL12/CXCR4 シグナル活性化を介した胃癌浸潤メカニズムの解明
小澄　敬祐	熊本大学大学院博士課程 熊本大学学長賞	食道癌における癌代謝関連酵素 Lysine-specific demethylase-1 の発現意義の解明
平成28年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
馬場　祥史	第27回日本消化器癌発生学会　大原賞	消化器癌における epigenetic 変化の網羅的解析 - 個別化治療のための biomarker 探索を目指して -
今井　克憲	日本消化器外科学会賞（若手部門）	なし（過去の業績に対して）
林　　洋光	日本消化器外科学会 young investigator award of the year 2016	なし（過去の業績に対して）
今村　　裕	第88回日本胃癌学会総会 優秀ポスター賞（日本胃癌学会）	食道胃接合部癌腺癌における予後因子解析
美馬　浩介	JSS Young Investigator's Award	細菌 Fusobacterium nucleatum を標的とした大腸癌予防および治療法の可能性
中川　茂樹	日本外科学会　Young researcher award	肝疾患における背景肝組織を用いた HCC-risk gene signature の有用性の検討
髙城　克暢	熊本大学学長賞	GNASR201H と KrasG12D 変異による IPMN モデルマウスの開発
有馬　浩太	第20回国際膵臓学会　若手医師優秀賞	PGE2 signaling promotes the expansion of ALDH1-positive tumor cells in PDAC
平成29年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
外山栄一郎	第16回 NeedlescopicSurgeryMeeting SuperCuttingEdge 賞	needle device を応用した左側結腸に対する経直腸 NOSE 併用完全腹腔内吻合
宮本　裕士	2017 ASCO GI Merit Award	Polymorphisms in adipokine-related genes to predict treatment outcomes in patients (pts) with metastatic colorectal cancer (mCRC) treated with bevacizumab-based chemotherapy.
宮本　裕士	2017 ASCO annual meeting Merit Award	Genetic variations in semaphorin/neuropilin signaling to predict clinical outcome in patients (pts) with metastatic colorectal cancer (mCRC) receiving bevacizumab-based chemotherapy.
石本　崇胤	日本胃癌学会優秀研究賞	腫瘍間質ゲノム解析に基づいた胃癌浸潤を制御する新規分子機構の解明

受賞者氏名	賞与の名称	研究課題名
岩槻　政晃	第55回　日本癌治療学会　優秀演題賞	HER2陽性胃癌に対するトラスツズマブ併用療法の多施設共同コホート研究（KSCC1105）
今村　　裕	第89回日本胃癌学会総会 優秀研究賞（日本胃癌学会）	MSI–high as a prognostic biomarker in EGJ adenocarcinoma
美馬　浩介	JSS Young Investigator's Award	大腸癌の抗腫瘍免疫応答と抗癌剤感受性に関わる細菌を標的とした革新的治療法の開発
美馬　浩介	JSGS Young Investigator of the Year 2017	なし（過去の業績に対して）
泉　　大輔	DDW2017 in Chicago 優秀演題賞（Certificate of Recognition）	Identification, development and validation of a circulating miRNA-based diagnostic signature for early detection of gastric cancer
有馬　浩太	日本膵臓病研究財団　膵臓病研究奨励賞	代謝物網羅的解析による膵癌進展バイオマーカーの検索
北野　雄希	第26回癌病態治療研究会奨励賞	肝外胆管癌における腫瘍浸潤免疫細胞の臨床的意義
堀野　大智	第184回熊本外科集談会　優秀演題賞	結腸閉塞による敗血症性ショックに対しOpen abdomen management（OAM）が奏功した一例
平成30年度		
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
山下　洋市	第30回日本内視鏡外科学会 Surgical Forum Award	肝障害度B初発ミラノ内肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除とラジオ波焼灼術の臨床成績
山下　洋市	第72回手術手技研究会奨励研究賞	膵液漏ゼロを目指した膵切離法に関する検討：生体吸収形状記憶素材でできた膵臓クリップの開発
石本　崇胤	膵臓病研究奨励賞	代謝リモデリングによる膵癌進展メカニズムの解明
今村　　裕	The International Gastrointestinal Consensus Symposium (IGICS), Young Investigator Award（最優秀賞）	Molecular status changes according to tumor location in EGJ adenocarcinoma
徳永　竜馬	ASCO 2018 Merit Award	The impact of Tfh cell/ B cell pathway-related genetic variants in metastatic colorectal cancer patients with bevacizumab-based chemotherapy.
有馬　浩太	日本癌発生学会理事長直轄プロジェクト特別推進研究賞	慢性炎症関連シグナルの活性化に伴う膵癌進展のメカニズム
内原　智幸	癌免疫外科研究会　研究奨励賞	胃癌 Cancer-associated fibroblasts（CAFs）を介した薬剤耐性獲得機構の解明
内原　智幸	Best Surgical Case Reports Award	Small bowel perforation due to indistinguishable metastasis of angiosarcoma: case report and brief literature review
古閑　悠輝	第27回日本癌病態治療研究会　奨励賞	GIST における FBXW7 と腫瘍進展の相関の検討
古閑　悠輝	Best Surgical Case Reports Award 2018	Multiple skeletal muscle metastases from poorly differentiated gastric adenocarcinoma
大徳　暢哉	第26回日本消化器関連学会週間　若手奨励賞（示説）	KRAS 変異を有する大腸癌では血清 p53抗体が予後予測因子となりうる
光浦　智証	第51回日本胸部外科学会九州地方会総会 Case Report Award 食道　優秀賞	治療に難渋した食道切除術後の胃管気管瘻の一例
平成31年度／令和元年		
水本　誠一	第47回熊本県医療功労賞	困難な環境のもとで長年にわたり医療活動に従事し顕著な功績を収めた
馬場　秀夫	国立大学法人熊本大学教育活動表彰	教育活動に対して
山下　洋市	Surgery Today Best Reviewer Award 2019	Clinical role of fludeoxyglucose (18F) positron emission tomography/computed tomography (18F-FDG PET/CT) in patients with pancreatic neuroendocrine tumors
吉田　直矢	第119回日本外科学会定期学術集会 優秀演題賞	NCD24,233例を用いた、術前治療が胸腔鏡下食道切除術の短期成績に与える影響の研究結果とその課題
宮本　裕士	第90回大腸癌研究会優秀演題賞	局所進行直腸癌に対するTS-1/CPT-11併用術前化学放射線療法の多施設共同臨床第III相試験の長期成績：SAMRAI-2
石本　崇胤	AACR- KCA joint work shop Young Investigator Scholarship	Molecular mechanism underlying diffuse-type gastric cancer progression depending on tumor microenvironment
今村　　裕	Gastrointestinal Cancers Symposium (ASCO-GI), Walk poseter preentation	MSI-low is an intermediate type between MSI-high and MSS in esophagogastric junction adenocarcinoma.
蔵元　一崇	第26回 JDDW 若手奨励賞	MRI- apparent diffusion coefficient（ADC）値による高悪性度肝細胞癌の予測
美馬　浩介	第40回癌免疫外科研究会奨励賞	大腸癌肝転移巣における細菌 Fusobacterium nucleatum と CD8陽性T細胞数との関連
中川　茂樹	日本外科学会 若手外科医の為の臨床研究助成	網羅的遺伝子解析に基づいた、LOX を標的とした新規肝細胞癌治療薬の開発
小澄　敬祐	JDDW 2019 KOBE 第61回日本消化器病学会大会 会長賞	食道癌における腫瘍内 Fusobacterium nucleatum と腫瘍免疫の関連解析
徳永　竜馬	ASCO 2019 Merit Award	Gene mutations of SWI/SNF complex and molecular profile in colorectal cancer.
泉　　大輔	第105回日本消化器病学会総会 ワークショップ	治療前胃癌リンパ節転移診断15ジーンシグニチャーの樹立と検証

受賞者氏名	賞与の名称	研究課題名
内原　智幸	消化器癌発生学会研究奨励賞	胃癌 cancer associated fibroblasts 由来細胞外小胞による薬剤治療抵抗性メカニズムの解明
伊東山瑠美	JDDW 2019 KOBE 若手奨励賞　受賞	膵頭十二指腸切除術後のドレーン培養から術後合併症を予測する
秋山　貴彦	第73回日本食道学会学術集会　ベストポスター賞	術前の呼気中一酸化炭素濃度と食道癌術後合併症との関連
野元　大地	JDDW ポスター優秀演題賞	食道癌切除症例における栄養・炎症指標と予後についての検討
令和2年度		
山下　洋市	Annals of Gastroenterological Surgery Best Article Award 2020 Silver	Surgical management of recurrent intrahepatic cholangiocarcinoma: predictors, adjuvant chemotherapy, and surgical therapy for recurrence: A multi-institutional study by the Kyushu Study Group of Liver Surgery
吉田　直矢	第58回日本癌治療学会　優秀演題賞	食道扁平上皮癌手術症例における重複癌の包括的解析
石本　崇胤	消化器癌発生学会田原榮一賞	胃がん間質ダイバーシティの解明と治療標的の創出
今井　克憲	熊本医学会　研究奨励賞	大腸癌肝転移に対する、外科的切除を中心とした集学的治療の構築
岩槻　政晃	日本医師会医学研究奨励賞	遺伝性胃癌臨床検体の網羅的ゲノム解析による上部胃癌の分子生物学的発癌メカニズムの解明
伊東山瑠美	膵臓病研究奨励賞　取得	セリン代謝シフトによる膵癌進展メカニズムの解明
大徳 暢哉	第28回日本消化器関連学会週間 優秀演題賞、若手奨励賞（示説）	大腸癌切除例における MSI status 別の腫瘍浸潤リンパ球、PNI の関係
秋山　貴彦	第31回日本消化器癌発生学会総会 優秀演題賞	Identification of molecular mechanism underlying gastric cancer invasive growth depending on the tumor microenvironment
安田　忠仁	第31回日本消化器癌発生学会総会　研究奨励賞	腫瘍間質細胞によって促進される胃癌腹膜播種進展メカニズムの解明
令和3年度		
吉田　直矢	日本消化器外科学会教育講座講師	食道切除術における周術期管理とチーム医療
今井　克憲	HBSN Best Reviewer Award	なし（査読業績に対して）
岩槻　政晃	熊本医学会奨励賞	微量癌細胞を基軸とした胃癌の集学的治療戦略の構築
今村　　裕	Gastrointestinal Cancers Symposium (ASCO-GI), Poseter Highlight	Phase II study of systemic chemotherapy with S-1 plus oxaliplatin followed by surgery in patients with cT3-T4a and/or node-positive advanced adenocarcinoma of the esophagogastric junction: Primary endpoint results of the ESOX trial.
今村　　裕	第32回日本消化器癌発生学会総会 第10回国際消化器癌発生会議 優秀演題賞	TP53免疫染色の AI を活用した遺伝子変異パターン診断
今村　　裕	2021年度日本消化管学会 最優秀サイテーション賞	Recent Incidence Trend of Surgically Resected Esophagogastric Junction Adenocarcinoma and Microsatellite Instability Status in Japanese Patients
美馬　浩介	日本医師会医学研究奨励賞	微生物叢や免疫微小環境を介したフレイルを有する消化器癌患者の病態解明
内原　智幸	JCA 若手研究者ポスター賞	Cancer associated fibroblasts 由来細胞外小胞中の AnnexinA6 は抗がん剤抵抗性を促進する
伊東山瑠美	九州がんプロ養成プラン研究奨励賞受賞	代謝リモデリングを介した膵癌進展機構の解明
山下　晃平	日本胃癌学会西記念賞	Prognostic impacts of the combined positive score and the tumor proportion score for programmed death ligand-1 expression by double immunohistochemical staining in patients with advanced gastric cancer
秋山　貴彦	第29回　JDDW　ベストポスター賞、若手奨励賞	胃癌間質の PDGF/PDGFR シグナルを標的とした腫瘍微小環境リモデリングを目指した取り組み
北村　文優	第32回消化器癌発生学会 ポスター優秀演題賞	膵がん腫瘍微小環境における代謝リモデリング機構の解明
北村　文優	第80回　癌学会　JCA 若手研究者ポスター賞	癌腫瘍微小環境における代謝リモデリングに対する治療戦略の検討
野元　大地	奥窪医学奨励金	Fusobacterium による NOD-like receptor/NF-kB signal を介した食道癌進展メカニズムの解明
松本　嵩史	IASGO advanced Post-Graduate Course in Nagasaki 2021　Best Poster Award	Comparison of short-term results of laparoscopic surgery in pancreatic cancer using the Barthel Index at admission and discharge.
堀野　大智	第17回日本消化管学会学術集会　専攻医英語セッション　優秀演題賞	Advanced lung cancer inflammation index is a novel independent predictor for short- and long-terms outcome in colorectal cancer patients underwent potentially curative resection
令和4年度		
渡邊　雅之	Surgery Today 最多 Citation Award	Recent progress in multidisciplinary treatment for patients with esophageal cancer.
吉田　直矢	第60回日本癌治療学会　優秀演題賞	Preoperative smoking cessation and prognosis after esophagectomy for esophageal cancer
今井　克憲	JDDW The best Presenter Award in International Session	Surgical aspects of conversion therapy for initially unresectatble colorectal liver metastases

受賞者氏名	賞与の名称	研究課題名
岩槻　政晃	第75回　日本胸部外科学会　優秀ポスター賞	食道癌に対する食道亜全摘における textbook outcome の検討
今村　　裕	第15回（2022年度） 臨床薬理研究振興財団研究大賞	低レベルマイクロサテライト不安定性の発癌機構の解明と免疫治療バイオマーカーの創出
江藤弘二郎	第57回日本癌治療学会　Young Oncologist Award	Albumin-bilirubin スコアと胃癌術後短期・長期成績との関連
江藤弘二郎	第30回 JDDW ポスター優秀演題賞・若手奨励賞	Five-factor modified frailty index（MFI-5）と胃癌根治切除後，短期・長期予後との関連
泉　　大輔	第77回日本消化器外科学会総会 シンポジウム	High-volume center における Stage II/III 胃癌に対する S-1単剤を用いた術後補助化学療法の長期成績
小澄　敬祐	日本消化器外科学会賞　JSGS Young Investigator of the Year 2022（若手医師部門）	消化器癌に対する新規治療・個別化治療開発を目指した Translation Research
問端　　輔	JSS Young Investigator's Award	切除不能進行・再発食道がんに対する Nivolumab 治療の免疫関連有害事象（irAE）と予後との関連
問端　　輔	第54回制癌剤適応研究会　優秀演題	切除不能進行・再発食道癌に対する当院の Nivolumab 使用経験
秋山　貴彦	第95回日本胃癌学会　ベストポスター賞	高度線維化胃癌マウスモデルを用いた腫瘍免疫微小環境の解明
野元　大地	JDDW ポスター優秀演題賞　若手奨励賞	Fusobacterium nucleatum は NOD1/NF-kB シグナル経路を介して食道扁平上皮癌進展に寄与する
木下翔太郎	第30回 JDDW 若手奨励賞	転移性膵腫瘍に対する膵切除の臨床成績
白石　裕大	第30回 JDDW ポスター　若手奨励賞	膵癌患者の GPS における conditional borderline resectable（C-BR）症例と術後の合併症および長期予後の検討
松本　嵩史	第60回日本癌治療学会　young oncologist award	膵癌における Bloom 症候群ヘリカーゼの発現と予後との相関に関 する検討
松本　嵩史	第30回 JDDW 優秀演題賞　若手奨励賞	肝細胞癌におけるアスピリン内服と外科的切除後の短期成績および長期予後に関する検討
前田　裕斗	日本外科学会　第3回（令和4年度） 優秀論文賞授賞	Surgical Case Reports 2021 7:83 Ultrasound-guided non-invasive retraction for strangulated obturator hernia allows elective radical surgery: analysis of 12 cases
安田　忠仁	第30回 JDDW 若手奨励賞	癌性腹水中 SASP-CAFs による腹膜播種促進メカニズムの解明
足立　優樹	第16回膵臓内視鏡外科研究会最優秀演題賞	膵癌に対する膵体尾部切除術における開腹と腹腔鏡の短期成績の比較
令和5年度		
馬場　秀夫	第29回日本癌治療学会中山恒明賞	消化器癌進展機序解明と治療法開発
馬場　秀夫	日本消化器外科学会賞 JSGS Science of the Year 2023（学術部門）	消化器癌の発育進展機序の解明と新規治療の開発
美馬　浩介	AGSurg Best Article Award 2023 -Gold-	Frailty is an independent risk factor for recurrence and mortality following curative resection of stage I–III colorectal cancer
泉　　大輔	第78回日本消化器外科学会総会 AGS Forum 奨励賞	Education of the laparoscopic gastrectomy at a Japanese high-volume center over the last decade
有馬　浩太	JSGS Young Investigator of the Year 2023（若手医師部門）	なし（過去の業績に対して）
北野　雄希	第17回肝臓内視鏡外科研究会 U-40 Video Award	若手肝胆膵外科医への安全な腹腔鏡下系統的肝切除の導入～右葉系アプローチの定型化
北村　文優	九州がんプロ研究奨励賞	乳酸を介した膵がん微小環境リモデリング機序の解明
松本　嵩史	第36回日本内視鏡外科学会総会 優秀演題賞	肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除において、抗血小板薬内服が周術期成績に与える影響に関する検討
金光　鉱介	Best Case Report Award of CJG	Two Asian families with gastric adenocarcinoma and proximal polyposis of the stomach successfully treated via laparoscopic total gastrectomy
Zhao Liu	第33回日本消化器癌発生学会総会　優秀演題賞	膵癌伸展における糖代謝メカニズムと高血糖の役割解明
令和6年度		
岩槻　政晃	令和6年度 第16回 大原 毅 賞	微量癌細胞研究を基軸とした消化器癌に対する集学的治療への応用
岡部　弘尚	JDDW2024 The Best Presenter Award in International Session	Clinical impact of HCV eradication on short and long-term outcome after curative hepatic resection
長井　洋平	第98回熊本医学会奨励賞	地域一体の医療 DX 推進に関する活動
澤山　　浩	日本外科学会　優秀論文賞	Pathologic complete response after laparoscopic surgery following treatment with nivolumab and ipilimumab for anticancer drug-resistant MSI-high descending colon cancer: a case report and literature review.
小澄　敬祐	令和6年度肥後医育振興会学術奨励賞	消化管癌における腫瘍微小環境を標的とした統合解析
問端　　輔	第78回日本食道学会学術集会　優秀演題賞	食道癌手術における ICG 蛍光法を用いた再建胃管血流評価
光浦　智証	第36回日本消化器癌発生学会ポスター賞	食道癌における平衡型ヌクレオシド輸送体の病態生理学的意義
松本　千尋	九州がんプロ　研究奨励賞	新規遺伝性胃癌の臨床検体を用いた網羅的ゲノム解析
堀野　大智	Annals of Gastroenterological Surgery Best Article Award 2024 Silver	The advanced lung cancer inflammation index is a novel independent prognosticator in colorectal cancer patients after curative resection
下川　琢也	熊本大学病院第2回マンスフェルト賞	なし（学術業績に対して）

論 文 業 績
（2005年～2024年）

※教室員が共著者に含まれるもの

2005年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Gastroenterology*	33.883	2
10 ＞ IF ≧ 5	*J Exp Clin Cancer Res*	9.65	1
	Clin Cancer Res	9.0	1
	Cancer Lett	8.55	1
		その他	5
5 ＞ IF			29
		英文論文総数 IF　合計	39 202.266

2006年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Cancer Res*	12.5	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Clin Cancer Res*	9.0	1
	Eur J Cancer	7.6	1
	J Gastroenterol	6.9	2
		その他	3
5 ＞ IF			40
		英文論文総数 IF　合計	48 177.562

2007年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Cancer Res*	12.5	1
	Int J Surg	12.5	2
10 ＞ IF ≧ 5	*Gastric Cancer*	7.708	2
	Arterioscler Thromb Vasc Biol	7.4	1
	J Gastroenterol	6.9	1
		その他	2
5 ＞ IF			35
		英文論文総数 IF　合計	44 175.016

2008年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Molecular Cell*	14.5	1
	Clin Cancer Res	10.0	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Surg*	8.6	2
	J Cell Biol	7.4	1
	Gastric Cancer	6.0	3
		その他	1
5 ＞ IF			42
		英文論文総数 IF　合計	51 168.993

2009年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*J Clin Oncol*	42.1	1
	Gastroenterology	25.7	2
	Gut	23.0	1
	Cancer Res	12.5	2
	J Exp Clin Cancer Res	11.4	1
	Clin Cancer Res	10.0	6
10 ＞ IF ≧ 5	*Am J Gastroenterol*	8.0	1
	Ann Surg	7.5	1
	J Gastroenterol	6.9	1
		その他	6
5 ＞ IF			40
		英文論文総数 IF　合計	62 377.0

2010年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Lancet Oncol*	41.6	1
	Gastroenterology	25.7	1
	Int J Surg	12.5	1
	Clin Cancer Res	10	2
10 ＞ IF ≧ 5	*J Pathol*	9.727	1
	Br J Cancer	9.089	1
	Am J Gastroenterol	8.0	2
		その他	25
5 ＞ IF			37
		英文論文総数 IF　合計	70 437.763

2011年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Cancer Cell*	48.9	1
	J Clin Oncol	42.1	2
	Gut	23.0	1
	Radiology	12.1	1
	Clin Cancer Res	10	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Cancer*	9.089	1
	Mod Pathol	8.209	1
	Eur J Cancer	7.6	1
		その他	13
5 ＞ IF			43
		英文論文総数 IF　合計	65 442.897

2012年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*N Engl J Med.*	96.2	2
	Ann Oncol	56.7	1
	Lancet Oncol	41.6	1
	Gut	23.0	1
	Nat Commun	14.7	1
	Cancer Res	12.5	3
	Theranostics	12.4	1
	Radiology	12.1	1
	Clin Cancer Res	10	3
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Surg*	8.6	1
	Eur J Cancer	7.6	1
	Sci Signal	6.7	1
		その他	16
5 ＞ IF			59
		英文論文総数 IF　合計	93 926.306

2013年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*N Engl J Med*	96.2	2
	J Am Med Assoc	63.1	1
	J Clin Oncol.	42.1	1
	Lancet Oncol	41.6	2
	Nat Genet	31.7	1
	Clin Cancer Res	10	3
	Int J Surg	12.5	1
	Cancer Res	12.5	3
	Endoscopy	11.5	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Ann Surg*	7.5	1
	Br J Cancer	6.4	4
	Gastric Cancer	6.0	1
		その他	13
5 ＞ IF			112
		英文論文総数 IF　合計	154 1169.82

2014年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Cancer Discov*	29.7	1
	Cell Metabol	27.7	1
	Nat Commun	14.7	1
	Mol Cell	14.5	1
	J Clin Invest	13.3	1
	Cancer Res	12.5	1
	Clin Cancer Res	10	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Surg*	8.6	1
	Eur J Cancer	7.6	1
	Ann Surg	7.5	3
		その他	11
5 ＞ IF			111
		英文論文総数 IF　合計	134 500.77

2015年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Ann Oncol*	56.7	2
	Nature Immunol	27.7	1
	JAMA Oncol	22.5	1
	Biomaterials	12.8	1
	Cancer Res	12.5	1
	J Natl Cancer Inst	10.3	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Surg*	8.6	2
	Am J Gastroenterol	8.0	1
	Ann Surg	7.5	2
		その他	16
5 ＞ IF			144
		英文論文総数 IF　合計	172 639.6

2016年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Ann Oncol*	56.7	3
	Cancer Cell	48.8	1
	Lancet Oncol	41.6	1
	Gastroenterology	25.7	1
	Gut	23	2
	JAMA Oncol	22.5	1
	Nat Commun	14.7	1
	Hepatology	12.9	1
	Clin Gastroenterol Hepatol	11.6	1
	J Natl Cancer Inst	10.3	1
	Clin Cancer Res	10	5
10 ＞ IF ≧ 5	*Proc Natl Acad Sci U. S. A.*	9.4	1
	Br J Surg	8.6	2
	Ann Surg	7.5	1
		その他	23
5 ＞ IF			112
		英文論文総数 IF　合計	157 895.2

2017年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Ann Oncol*	56.7	3
	J Clin Oncol	42.1	1
	Gastroenterology	25.7	2
	Gut	23	1
	JAMA Oncol	22.5	1
	Adv Drug Deliv Rev	15.2	1
	Cell Death Differ	13.7	1
	Hepatology	12.9	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Exp Mol Med*	9.5	1
	Br J Surg	8.6	2
	Cancer Immunol Res	8.1	1
		その他	17
5 ＞ IF			108
		英文論文総数 IF　合計	140 735.5

2018年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Nat Med*	58.7	2
	Ann Oncol	56.7	1
	Cancers Discov	29.7	1
	Gastroenterology	25.7	1
	Clin Cancer Res Int J Surg	12.5	1
	Clin Gastroenterol Hepatol	11.6	1
	Clin Cancer Res	11.6	2
10 ＞ IF ≧ 5	*Cancer Treat Rev*	9.6	1
	Exp Mol Med	9.5	1
	Br J Surg	8.6	1
		その他	36
5 ＞ IF			124
		英文論文総数 IF　合計	172 739.8

2019年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Nat Rev Clin Oncol*	81.1	1
	Drugs	13.0	1
	Hepatology	12.9	1
	Clin Cancer Res	10.0	4
10 ＞ IF ≧ 5	*EBioMedicine*	9.7	1
	Cancer Treat Rev	9.6	1
	Br J Surg	8.6	1
		その他	45
5 ＞ IF			94
		英文論文総数 IF　合計	136 584.6

2020年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Ann Oncol*	56.7	1
	Lancet Oncol	41.6	1
	Gastroenterology	25.7	1
	Gut	23.0	1
	Clin Mol Hepatol	14.0	1
	Cancer Res	12.5	1
	Clin Cancer Res	10	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Br J Surg*	8.6	1
	Eur J Cancer	7.6	3
	Ann Surg	7.5	8
		その他	12
3 ＞ IF			122
		英文論文総数 IF　合計	153 632.1

2021年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*N Engl J Med*	96.2	1
	Nat Med	58.7	1
	Gastroenterology	25.7	1
	Gut	23.0	2
	JAMA surg	15.7	1
	Hepatology	12.9	1
	JAMA Netw Open	10.5	1
	Clin Can Res	10.0	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Cancer Lett*	9.1	1
	Eur J Cancer	7.6	1
	Ann Surg	7.5	7
		その他	33
5 ＞ IF			103
		英文論文総数 IF　合計	156 1118.256

2022年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Signal Transduct Target Ther*	40.8	2
	Cancer Discov	29.7	1
	Mol Cancer	27.7	2
	Gastroenterology	25.7	1
	Sci Transl Med	15.8	1
	JAMA Surg	15.7	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Cancer Lett*	9.1	1
	Br J Surg	8.6	1
	Ann Surg	7.5	3
		その他	36
5 ＞ IF			89
		英文論文総数 IF　合計	141 888.472

2023年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*Cancer Cell*	48.8	1
	Lancet Oncol	41.6	1
	Nat. Commun.	14.7	1
	Lancet Healthy Longev	13.4	1
	Hepatology	12.9	1
	ACS Cent. Sci.	12.7	1
	Cancer Res	12.5	1
10 ＞ IF ≧ 5	*JHEP Rep*	9.5	1
	Ann Surg	7.5	3
	Br J Cancer	6.4	2
		その他	6
5 ＞ IF			75
		英文論文総数 IF　合計	94 428.8

2024年度

Impact Factor (IF)	Journal	IF	論文数
IF ≧ 10	*The Lancet*	98.4	1
	J Clin Oncol	42.1	1
	Hepatology	12.9	1
10 ＞ IF ≧ 5	*Cancer Lett*	9.1	1
	Ann Surg	7.5	1
	Br J Cancer	6.4	2
		その他	5
5 ＞ IF			57
		英文論文総数 IF　合計	69 340.8

学 会 発 表
（2005年～2024年）

年度	日本外科学会定期学術集会	日本消化器外科学会総会	日本消化器外科学会大会	全国学会	地方会	国際学会	計
2005	10	19	1	41	20	1	92
2006	36	33	1	40	54	6	170
2007	39	39	0	60	29	12	179
2008	41	50	0	101	45	13	250
2009	47	41	0	155	39	22	304
2010	40	41	38	125	31	41	316
2011	47	39	21	115	70	47	339
2012	42	42	20	131	86	25	346
2013	43	28	13	118	71	56	329
2014	53	43	30	200	62	54	442
2015	80	53	19	249	53	43	497
2016	63	41	24	203	77	62	470
2017	64	56	30	175	62	33	420
2018	55	27	29	215	87	22	435
2019	69	43	23	196	81	49	461
2020	66	53	32	124	37	21	333
2021	70	33	31	231	42	11	418
2022	106	23	31	214	55	12	441
2023	25	35	6	184	46	29	325
2024	61	68	7	204	17	4	361

一般社団法人熊本外科研修教育推進機構

Kumamoto Surgical Training &
Education Promotion Organization(K-STEP)

当法人は、熊本県における外科学の進歩とその社会への貢献を目的として設立されました。医療技術の高度化や患者ニーズの多様化が進む現代において、外科領域における質の高い診療と研究の実現は、今後の医療全体の発展にとって極めて重要であると考えております。

一方で、近年、外科医を志望する若手医師の数は全国的に減少傾向にあり、人材の確保と持続的な育成が喫緊の課題となっております。外科手術に求められる高度な技術と知識、長時間労働への懸念、ワークライフバランスの重視など、複合的な要因が若手医師の志望離れに拍車をかけているのが現状です。

こうした状況を踏まえ、当法人では将来の外科医療を支える人材育成を最重要課題の一つと位置づけ、積極的に取り組んでおります。若手外科医が臨床・研究・教育の各分野において意欲を持ち、継続的に学び、成長し続けられる環境を整備することで、熊本県全体の外科医療水準の向上に貢献することを目指しております。具体的には、下記の事業を通じて、医学生や初期・後期研修医、若手外科医を対象とした教育プログラムの支援、外科手技習得のための実習環境の整備、さらには学会・研究活動への参加機会の提供など、成長段階に応じた多面的な支援を行っております。

次世代の外科医が誇りとやりがいを持って活躍できる環境の実現に向けて、当法人は今後も尽力してまいります。関係各位におかれましては、引き続きご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

代表理事（敬称略）　岩槻　政晃（熊本大学）

理　　事（敬称略）　大塚　隆生（鹿児島大学）／金高　賢悟（長崎大学）／高槻　光寿（琉球大学）
武野　慎祐（宮崎大学）／近本　亮（熊本大学）／鶴田　豊（鶴田病院）
山下　洋市（大分赤十字病院）／吉田　直矢（熊本大学病院）
渡邊　雅之（がん研有明病院）

監　　事（敬称略）　松髙　　泉（松髙公認会計士事務所）

事 務 局　熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学内
〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1丁目1番1号
TEL　096-373-5212　FAX　096-371-4378

事　　業
(1)消化器外科学に関する生涯教育の推進と専門医の育成
(2)国際交流・留学プログラムの推進
(3)国内外の研究会の開催、共同研究の奨励、消化器外科学に関する研究・調査等の推進
(4)国民および医療従事者への診断・治療に関する普及
(5)国内外の消化器外科関連学会における研究発表の支援
(6)その他、この法人の目的を達成するために必要な事業

当法人の趣旨にご賛同いただき、寄附というかたちでご支援を賜れましたら幸いに存じます。皆様からのご厚志は、すべて外科医育成や教育支援活動のために、大切に活用させていただきます。未来の医療を担う人材の育成と、地域に根ざした外科医療の発展のために、どうかご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

寄附いただける方は、上記事務局にご一報いただければ幸いです。

編 集 後 記

熊本大学消化器外科学講座が開講から20周年を迎える節目にあたり、本誌『20年のあゆみ』を編纂できましたことは、ひとえに諸先生方のご尽力と温かいご支援の賜物と、心より御礼申し上げます。

創設以来の歩みを振り返りつつ、教育・臨床・研究の各分野における発展と継承の過程を一冊にまとめるにあたり、多くの方々にご寄稿をいただき、医局の成長の軌跡を記録する貴重な機会となりました。編集にあたり、多くの先輩・同僚の先生方から心温まるご寄稿と貴重な資料をご提供いただきました。ページをめくるたびに、それぞれの時代に尽力された皆様の姿が目に浮かびます。編集作業を通してあらためて、馬場秀夫教授のご指導の下に時代ごとの挑戦が感じられ、医局の力強い歩みを実感いたしました。

本講座は現在、岩槻政晃教授のリーダーシップのもと、新たな時代に向けた挑戦を続けております。本誌がその一助となり、次の10年・20年への礎となれば幸いです。

ご協力いただいたすべての方々に、深く御礼申し上げます。

20年の歩み　編集委員

平成19年卒　原田　和人　平成19年卒　江藤弘二郎
平成27年卒　松本　千尋　平成28年卒　前田　裕斗
平成29年卒　金光　紘介　平成29年卒　耕　　佳徹
平成29年卒　堀野　大智

熊本大学大学院　消化器外科学

20年の歩み

平成17年 ～ 令和6年

令和7年8月29日　発行

発行所　熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科
〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1丁目1番1号
TEL 096-373-5212　FAX 096-371-4378

発行者　岩槻 政晃

印　刷　株式会社 かもめ印刷
〒861-2403 阿蘇郡西原村大字布田834-55
TEL 096-279-3440

Department of Gastroenterological Surgery,
Graduate School of Medical Sciences,
Kumamoto University